百花菴秘記

ト一

へ 2
1704

百花庵秘記

古今

一 百千鳥
一 呼子鳥
一 稲負鳥
右三鳥とて古今集大事也深秘
一 をかたまの木
一 めどにけづり花
一 かハなぐさ
此三の木口傳也
其外古今集一部全篇秘説口傳多し
一 伊勢物語

游戲三昧院
へ2 利 4 1704

是も家之大事口受有之也

一 拾遺集

物之名之部ニ口受秘事多し

神楽之歌又大事有

一 源氏物語

とのゐものゝ袋

祢のこ乃餅

揚名助

并ふたこ鳥　又鳴絃之事

一 新古今集

切紙之口受数多有之凡二百七十六首

一 新勅撰集

同所之口受有凡六十四首

一 徒然草　三ヶ之傳授

白うるり

布のこもり

放免乃つけもの

并揚名助ヶ祢のまがり

一 諸集物之秘説共

一 万葉集之内其の外諸集物類の口受前後混雑

一 續後撰集　切紙凡八十首

右目録おもひ出し記之前後混雑其首ふ定集外有之

所々也

和名に證歌ハなしと日向にはさうぞうきにて水をそゝぐ故
それとも又見べし招霊樹にさうぞうきを用ゆる事古来
よりある事にや志らし
歌によめる水かけくさと云ハ萩の事也

一 くさのうへの露とる はさ乃
歌によめる乃のくさは芋の葉の事也七月七日九歌書を並所の
芋の葉の露をとりてそれを硯の水にして七夕に歌を
書て手向る也又七夕祭りにも此露をとりて瓶に納
て手向る也

一 小塩井とハ和歌によみて洗ひし日向に赴来ノ所
法師へと是神に借法を傳ふる也太宰令是大にあへとよふ
歌學令に小なるあへと訓ル也此みあへとは神の借法の事也

只アラハシ衣　其衣實事有リシハ紅衣ヲミセ實事ナキハ白キ衣ヲ左司ノ居玉フ翠簾ノ前ニテ袖ヨリ出シヽセ遁ラルヽトゾ）此由関白殿（昔ケ日録セラルヽト）△又別ニアラハシ衣ト云フアリコレハ物ノ怪死霊生霊ナト付テ悩マシキ時名僧貴僧ニ命シテコレヲ祈セラルヽニ其悩人ノ衣服ヲ取コレヲ形代ニシテ祈ルヽ印形シテ後或ハ官ヲ加ヘラレ或ハ衣ヲ玉フ依之位ヲ増シ衣ノ色モ替ルヽ印ヲ以衣ノ色替ル故印ヲ形スヲ以アラハシ衣ト云トヽ但大内秘事又ノアラハシ衣ト云ハ紅白ヲ以有無ヲ告ルフ大事又コレ始皇ナトノヤウニ他人ノ種ヲ以天孫ニサレシヽ又シテヲ恐レテ嚴重ナル事ヽ此事又決大切ノ事ヽ

に仕歩りき……ど……めく袖て法をひぶし
傳りし歌は法翠簾のはしより袖口をさし出してうへ乃
花後達ゆうの姫にみえさうる也此後達その袖口ぬ
多とりて関白殿へかしほる也万葉集の口傳の秘なり

一 みじか星　又かしよ多ともいふ日多て
古語ハ俗に梶 棖 楊也

一 水かげぐさ
天の川みつかけ草におく露やあかぬわかれの涙なるらん　清輔朝臣
みつかけぐさハ萩の事也
世俗にはさうぞうきといふ草と心得たりそれハそら色に證

百花秘記

一 かたしきぬ
女御又ハ内侍暫かとうへに侍るをめしくて初て法をひろし
侍りし歌ハ法皇家の御まより被仰出してうへ乃
花後達の嫗にみえさせる也此後達その被口伝
家とりて開白殿へかし伝る也一万葉集の口伝の招なり

一 みどり 又の名よぶともいふ日蔭を
古の名ハ俗に梶根鴇也

一 水かげぐさ
天の川水かげくさにおく露やわかれの涙なるらん 清輔朝臣
みかげぐさとは萩のことなり
世俗ならぞえぎといふ草と伝りそれハあやまり也歌に証

和歌に証拠ならぬを見とめ候ふに此さまざまにて水をそゝぐ也
それとえひ及ぶべし招霊極にささぎたきを用ひる古来
とりあるをやはし候
歌によめる水かけくさとハ萩のことなり

一 かさのうへの露とるはさ乃
歌によめるかさのうへの草の露七月七日九歌露を置所の
草の葉の露をとりてそれを硯の水にして七夕に歌を
書て手向る也又七夕祭りにも此露をとりて瓶に納る
ても向ふ也

一 小塩井とはいふ所にてしる流あへ手向事あまたあり
法何とは神に借法を伝ふる事太宰府も大小あへとよく
新嘗会なとに相ちあへと訓也此所あへとは神の借法のる事

一 長柏（ナガカシハ） [illegible]神代巻に[illegible]

加茂の社家にて秘説にする事ものゝ是をまなふとを桂木と
する也かものまつりに葵桂を用ゆそのときを唯世上普
通にかつらとハものゝさま迄と神をと存しせ申ことき八
此桂木を長柏と称しする加茂の社家の秘説あり
桂木を加茂の神木也

[illegible]
六十段
一 白う流里

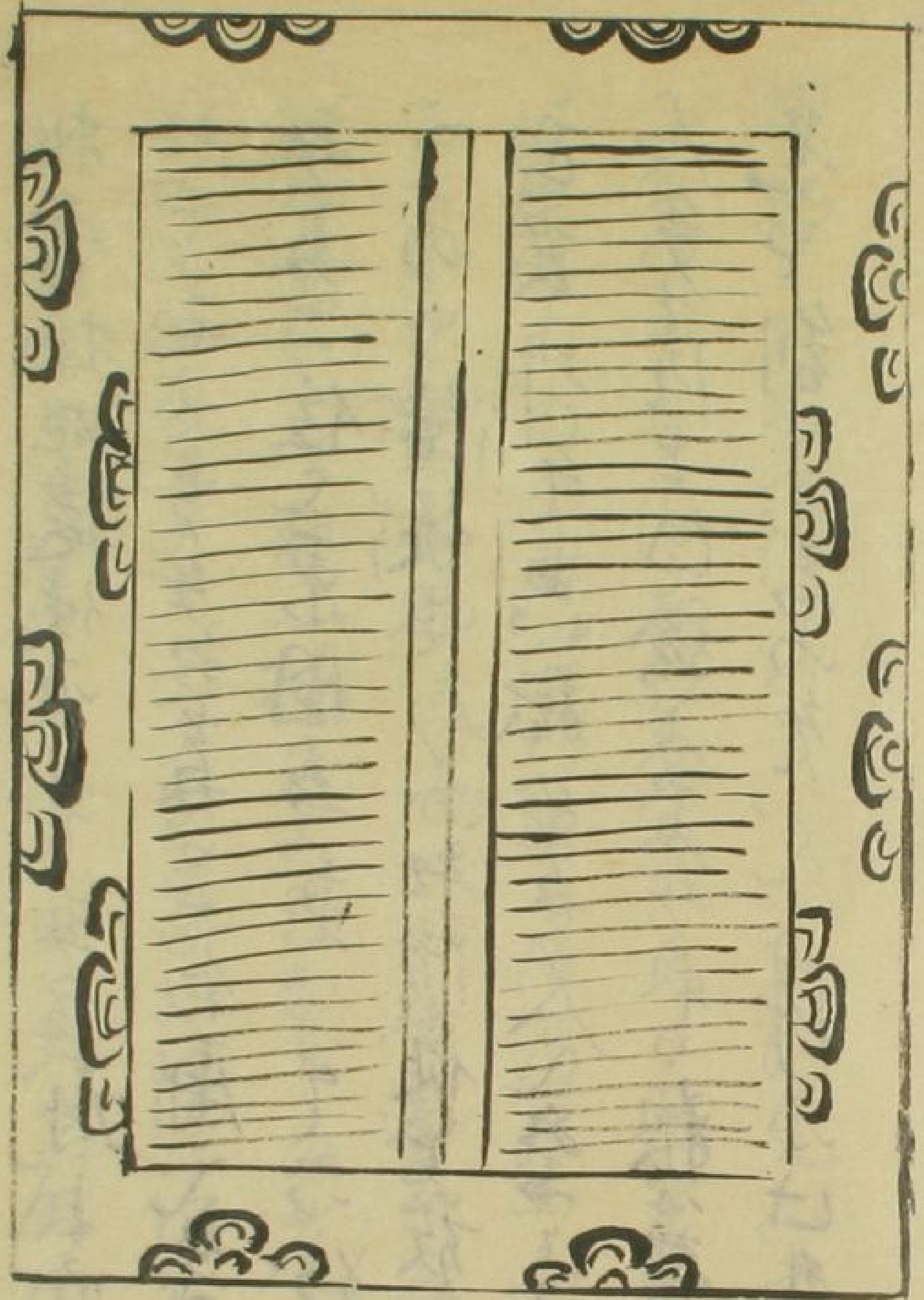
[illegible]にて唯口柄子にいひたる事也此法師も嘉の青白（ヒラ）気
[illegible]京もかくぬるとあんなうさぬて越風れないとく
あるといふんとて是れを越風とあてゝいふといふ文

詞も思ひかけぬハ口拍子にかゝりて白う流りといひしる也
一傳に越風を白瑠璃（ヒヤウルリ）のないとく又ことりれ色も有て来ちり
事なるもの白へ向う瑠璃を以へ流と云説も有俊成八
せんさくをしらて只口拍子に志ろふるとゐふを白う流りと
いひしるまて然とて當流此説を用由ゆへ

二十八段目
一 布のとかり

是ハ天子倚廬にこもらせ給ふと記出の法座に苫ノ笹簾を
かけてたいしまあふ時の笹簾の縁のなき通例法笹簾の縁に
流る木瓜紋にて枚志んくをけるへ諒闇の時れ法笹簾の
縁りに付る布のことなりを指すのなる也是ハ大古の事にして
今世ける事ハを傳え志ゝ人其布也さ族ふよりてけるを

傳授とハ上古諒闇の時ニ付る所の木瓜ハ上下ニ木瓜形
二ッ宛竪ニ左右ニ四ッ宛之布のとかうあらしく
出し者也ニ有りといふニあらす平生ハ
繧繝縁の木瓜も数ある如く然るに付る也又縁ニ織
それを備後ニ而ハ布を以て縁として木瓜形を
書ニいふとく付けるる也其形殊ニ為も実ニもとの
映しくう遠くして抵すらん云伝うとき先ツ上古の
例ニ出て此代より絶えて此ハ最も実も断絶し
て居人有之きも出ニ其草紙の傳とハ法所
法繧繝の縁と備後の時なくして平生の繧繝縁
縁ハ[illegible]
[illegible]



如此上下ハ縁ニ木瓜形二ッ宛
又竪之左右の縁ニ木瓜形
四ッ宛ツクル也

二百廿一段

一 放免のつけもの

是も上古の古実也とて世に知る人ゝ希也是は加茂の祭に出る
所の役人放免といふ也其の放免の衣紋に付るものを云
なり扨其のまつりの折の役人に先近衛乃番長(テウ)左右に立て
次に次ゝ門長(カドノヲサ)左右に立並(別)し行 次に山城守行也山城守は
相当検非違使にして五位尉と成 畿内山城大和河内摂津
此四ヶ国之守は其毎五位尉之兼帯内なりもちても和泉一国は
其毎六位之東国を兼して六位之此山城守の召連る所の
ものを陪従(ベイジウ)といふ此陪従を放免の者といふて検非違使は
武家にて曲ハ獄の家人之類なる所の役人ゝ何々
人多く流とひ禁じ安めれハ狼藉の叫鳴の者もあれハ其附
光を割し志つ咎人捕に出る日にしまうれる之也とぞ

下巻八十四段目也

上巻凡百四十八段
下巻凡百九段 都合二百四十七段

下部しもべへ陪従といふ又放免の者ともいふ也此放免の着たれ
ふ着用するを添衣襟衣に添うるものを添ふる也此衣襟衣は神楽男
の舞人の今は世乃加茂乃祭にも着用せる所の狩衣の
なときさ蛮衣也 或ハ斑衣 此蛮衣のたけはかり衣よりハ少し短き
装束なりそれに梅さくらなどの造花(ツクリバナ)と今は蛮衣の大紋の
ごとくに付るなり三条家は陪従は梅桜なとを付ると古実
と成 他(タ)の家にては山吹又ハ藤なとを造花にて付る
許さるなり蛮衣に其色々の染にて獅子なとを
いふも大きやかにして染出て付る也是も右の方獅子
左の方鳳凰なり 今世葵祭に楽人者懸を冠て蛮衣を着し騎馬にてつとむる也
此物語は放免の付るものを造花にて糸にて結(ユ)ひ付る
なり 検非違使五位尉の山城守か召連るるに用ふるへき

役人なりぬと當時乃家禮也國の守ちち護して狼藉
なとのことを防んとせさする一つの者なり又放免のものゝ犯罪
にたけものつく所なり上古の故實に仍而此物語の秘訣
とせしとなり

一 揚名のすけ
此も源氏物語にも有を説と同ること多くハ源氏の方　百九十八段に有
にゆつる

一 歯がり
是も古實之一に厳因を旨して水をまわらせよと大臣比
ののしる也へ去察してまいらせて家をきりてへ乃きこし召ル
廐察相也といふをそろつくりに用ふへき唯歯がりして
飲んとてひのふるまひまがりといふものは當代にハなく

まぬもれて身とへハ馬砂（マヒシヤリ）なりうま子に流れて水なすと被
察へうつまを押て杪のさいとくふ言あつふるもの也是をまさき
あぐに正しんとの謙退の音也此まがりといふ稱ハ
溜口の安人のとりなつふものまで主水司にこたぬ
ものゝ也へ水を召れハ主水司の者にて去察にてきこしめ
さるるをそれとすがりを召まさせしに重水司溜口の安人を
召て此まがりをとて水をそそくめてさるる也是まがり也
上古の察も今代の人ハ知らぬ源氏ものに此大抵此私なる
など公事を重じ職方をよく知さし右古實と失
きる程ぬるふなと笑ひてよろしき由世話も知る事ある
此もの謙の案ずと見

一　たごどり

實は鶯也　母子鳥ともいふ此鳥は兄と妹と夫婦に
なりしを母ねたみて是を制さしに此兄鳥母鳥
をやき殺しまゐらせ妹鶯は門の外に育て人来(ヒトク)く
となきし雄鳥は母乱焼(バウセウ)くとなきしを是此由に
母子鳥といふ　又たこ鳥といふすハ此鳥かくのごとく
子母兄弟親族一ツに集て住鳥なりせへ第をさしさ
除おさいとくめして並住といふ心にて第鳥といふ也
此鳥源氏若菜の巻れ上にて秘説の論也
柏木衛門いふなきハ花に木つたふ鶯のさえずけて祢てると云鳥
若菜の巻の詞書の鳥れさくる一木(ヒトキ)に止(トマ)りぬらんよあ
やしと見る由除るすそゝしといへハいで何なわちきれ乃
ことのあつかひやされんよとおもふ
夕霧
同山木に祢ぐらさらむるんに鳥もいかでか花の色に飽くべき
ときなきまちどりこともきをのこゝかハといひてけつらんに見え
ハことふいふ見知りぬ下略
此夕霧がいへるやま木といふは源氏をいふん也又際園の心とこ
覺たり源氏此時六條院とやて太上天皇に准しなれん
天子同なれる也されハ六条院ハ宮室に並びきますのなり
凡宮室は女御后内親王此と住む所也此六条院
それらがやく紫上を始め花散里明石上明石姫君玉葛
内侍女三宮蟬丸等此六条院中は築町も造り立てて
く住むへ除されハ宮室の除園乃ごとしそれと隆山木
いひて宮室深園に比しすゝも祢ぐら宮とを此深宮札

陣さの女房逢に行通ひて源氏のん一ツならんさせよと
かの女房はいつも顔を源氏をとんと召しに出して此ん哀れ
深山に住て山中の花山にさき誇りつゝしみけるまのなりつ
住て一本の心もある桜り住ずれていと源氏の女房さ
心かれ色に行くとひ出し深山に出しそれは覚ひ深山を
御して此山中の花見に成りに此て行くとあれ中なる桜
色おして来りし一の党親乃まのなれは流し葉山ふき
なとに移へとも桜は拝便に見すきすの心にに思ひぬ返
とゝ
女は成は心いふれは花のまつるに党の桜をとまきて称をとい
女のとよふうけしいかくあすて此女中とも出て来さ
こ所さ心海ひまのは党の花のまて本伝ふ此心にある所さ

右所さと吉野山に咲きける此まの心に移りさやだとも桜あれ
こしとふにとくれ咲ることの中とありとは此桜とされ称をと
定むへきに心はかれは又吉野山咲の来れあやさ此花に
色ありつくふりそとし此桜とまたは紫上さからさ
又秀此た桜の本人乃世に紫上ともめて西あれ此ひとに
名し桜とかんらさらとくちりよしれ評判ありは心よ
ありして桜をときて称をとはやねといひて紫上のまは
心をとあ見して女三の花かまるを移り住むかなり
此あさくしまさまと柏木右衛門の源氏をとそりてそ又
来りてまうけ為歌也かくうを柏木右衛門女三に
心けさりあまへ心かくいひけるとされと柏木の心に
も女三こもりは紫上をとくれはふるまとも心にそむ我かせ

こゝに出家詞にしたかひ此名へふりかへ大切なる事へ事之
此夕霧の返歌のこゝ名とさしたる事のなりし事を名ね
名とふるさ事に妻く志て我に男君かなし其名は
親子夫婦も己とゝに無ひ住むゝされども名ねをさしして
其外に親族なとしく集まり住むる所に公ともなり
名の内へ名ね名といふさ姓六条院の中に此名に比と
くり親族集まひ住ゆふ内へ此名に臨してもあるへし

拾遺集物名之内秘決分

一 さけかうん

さけの塩引と（シホ）　鮭搦（サケガラミ）也　俗に云さけの塩引也

（箕）（鯛）（ス）鮓にさけとりて奥の衣河より来る

一 うなゐの里

うなゐとふ館の勝さそれを黄金をいふうゝの塩辛（シホカラ）なり

本へし

綿の（こくゝゐのくゝも）川乃風に吹む館にそうなゐとゝいふ所も（勝し）ぞある花

一 さをりやを

黄を黄色にありやもでたるやといふへし

一 波かり

かりそのりやくの如くなる菜也當代をなきむ菜也こまか瀫（司）の
水を汲む菜名也又恵は清進く菜の仏を文れる花

一説に舊のせんにて餅のやうに作りさしとあり此説當應に
ふ用らく

一むなぐるま

此歌　空車(ムナグルマ)也人乃のらざるなき車也
飼ぐさのなどもこなく(一本さるなくに)に泣なき犬の取車也ていんなぐるまなど
空車といふをかくし題にてよみたるなへ此うさん
なれていんなぐるまつかどとハ係催て力を抛一なげて
まろよしてハ空車も傳授又此家の説も傳授之

一そやしまめ

此相名ハ内にも傳之受也
此名ハ山にあるやうにて其まゝ黒く此角赤く首れ
まるり黒く茶碗なり名に大きさ四手薩などとある
名に云ひそやしまめ　めハつけ字也

一いるかぶきを

満私云
俗にまめ名といふ名あり此名れ種類あるとも
是もそやしまめと同く口傳之受之
班鳩(イカルガ)也名れ名也此いるがをあかでたる汁のやうにけ(ケ)ハ莫
字(ジ)に書ケハ汁也(シル)し
一説に馬れ白く黒き毛あるを云　暗(バン)の班鳩(イカルガ)牧にうまれ
班馬(ブチゴマ)也
其七説　実花(ミノハナ)新正贈所持本ニアリ其本作ルにて温和の附属也温類正蝕とも小泰山師が説と記シオカレシヤイカヽ前ノイカルガヲ二タル汁ト云説ハ満光正しく其師に謡して直に口受とあるゆゑ也
満私云右両件の説の内いるがの牧れ班駒れるいてみるんた傳
たる葵竹とあるなれ説正説として信

いせものがたり

七ヶ大事といふ事有

一 三段 思ひあらハむぐらのやどにねもしなんひしきものには袖をしつゝも

古来此分の傳ハ此秘事の文字の心ハ思ひ有大事之此心ハ我心ニもとより
いふへくもなき人ニ懸想(ケサウ)の思ひ深しかくいふ思ひのふかくいふ
思ふ人も我をおもふ思ひあらハとなふるわざ也としいへる
かく思ふ人もおもふ思ひあらハよし金殿玉楼にあらずとも
ふのこやにも又ハ葎生(ヨモギ)の宿にてありとも厭ふまじく寐床も
しけれる條しきものゝかくハ袖をしても何のくるしからんといふ
人とかくして侍りしとの事をよく切(セツ)にいふ事也

右此分の傳ハ定家卿の説也

又近来三光院殿見出し一其外一説有其説の心ハ

○

秘事文字の心ハ 思ひかくといふ人を思ふ心思ひあらハ玉楼金殿と
いふともよしなきことよう深き心かくしていふ人とねたらハ
あとひ葎の宿にても秘もあるへしひしきものかくハ袖を
しても秘なるへしとぞ

此段玉楼の大事と此玉の字をば翫(ネガ)ひ選しめより
万葉の歌の伺せんにまのりてあをむぐらはむぐらもしゆ宿に
ふかきてき秘なり といふ心を合せて通ふてこひ合せてある
つたへ事之此万葉の分を印合せて此玉の字の心ゆへ入出て居る
ハ他傳のなきひかて心労まる定家の説ハ只此本歌を心にこめて
思ひ合せて居る事也 是面授口決の極昴之秘ニ侍

此説三光院殿所発明也 当流定家の説也

定家卿の説とは玉の字の心の様の意ひあり定家也

の説也又初五文字憚に應（スベ）き由へ古今序にも不叶となれと
貫之古今序にあり其外の歌の評判にも心ありて詞あり
なとゝ書進しとめあてみしてこそ先院殿は貫之の心を
に叶ふ事をしえん出しかひしく云とえん出しかふりこそ先院殿
の御猶之為流此説と用ひて極秘となし進り

第二

一 かはなくさ　第六段　河の名也

此段ある年二条后といて（川辛の名）かくれ居ると堀川の大臣並つる此
大納言殿なとを尋とりて取かへしけると書あるさ
此あくた川みゆるはまちいとのあくた川にそ引なし禁裏
の清溝水なとのるなりみのていふことをしれおもて也
必竟此段ハたゝいらいに書なるく根云の事なるへし此段
好中能男女一味の花へ小出となるゝ此段の全篇と此花
我の心をとこめて般味し侍るへきなりと此段極所の秘と
なす源なるへし

第三

一 第九段之内　ありとなきとをしれ　此事はなき有無
勘物云　塩尻（シホジリ）壺塩（ツボシホ）といふ物あり其形似（タリ）此山ニ此物語之習（ナラヒ）好（コノンデ）異（コトナル）詞（コトバ）ヲ
寂蓮殊ニ信用ス此説ヲ先人之命。縦（タトヒ）雖（イヘドモ）為（タリト）塩事（シホノコト）非（アラズ）卑（ヒ）也不可用之ヲ内
にとて有なし往年有（アリシ）等同人ノ憚ニ不甚由ヲ答ふと云ゝ
さ様ハ後成定家ハかくのゝひ立しものをなかくば清なをへきなり
事ゆゑ秘説もぬるに秘説とせうに源つゝ第事大事ゝ此

佛具にいろものの此形に似たりと御説有しそれは委しき説
なる事ハ部の傳授也其ハ大事なれハ寂蓮の桃し君ハ逆にかの
塩を凡ての物にいふとハいへり凡ハさ本の事にて凡界にして然し
後成のなき事をも用ひと仰られけり然るに寂蓮の
此間にまかせ其後塩を穢に塩と云ふ物に溺
と没入して塩に穢悪をいふ甚塩谷にて穢所は塩の形也
うつぶせるが悉皆（シッカイ）なり山の雪は積もりて併に似たる迄ひ其れ
比と云ふ義也塩無に似たるといふ不空しき説なり
実に凡界にいふ所ふと又凡界にいろいろにあらむと
有無なりぬめが此の遠ひのなきよふ大きに覚え
遠ふるし艶にやさしく麁なるとさるまふけや
けく似たるなりと同物なり味ひの遠ふる無説に

に限らずよむにもなんぞ古仏の事也此凡界なりと
界外（レツ）と出でたるとは遠ひめが大事也此見ん為の所なれば
事とせり深く此道の極秘し

又此歌の未の文に
冨士の山をミれハ五月のつこもりに雪いと白うふれり
時しらぬ山はふじの根いつとてかかのこまだらに雪のふるらん
此歌は伊勢物語につきて尺根の事也伝授あるべし詞の
に雪いと白うふれりとありてかのこまだらにと
よめり此室を味ひよりて尺根のたるあるべし 又七八
時しらぬ山は此歌の字ハものがたりの文字（もじ）し 時しらぬ

山名といへハふじハ神より出来るにもいふとなふてら
かく其ハいふ白ら示すもの皆てひ出るなき
けかのこ満ちるふるといふさく見る松のなりひたる
有る事自ら出自然の雪いと白ふふれると
いひて雲ふかのこまてふと云にに深く冷ぬ
付てらる／＼ー時にてふ西月時の都れて極暑
の外天にとき比当所に在る富士の高根をこれハ
白雪堆高くつもりきけれるとつくんなる年中
う照篠の草葉とも云れて皆く積りの雪池
に勢气とてふにちらし出ならがちな代の雪ハ
と白ふなりてり変かしことに消沙り気色眼前
に今一景色とそ白くそれハいふにとそ山一座

に白雪のきえてみて有しら白ひたる白き変かしこ
消るかハ時眠に五月ハ時の大出消く消なれハ
也け帰中に言語同様の景象にされハ名残御景
雪いと白ふとおてものこやをふとよめりけるが
うちの景色よくんとつく／＼ー云所に納涼も
こまる／＼し冊る折ふしに風人のとらる垂
細ふんとを付て興味まさる／＼しける十五其資料訶書
たに快とまさる家の説也

一　都どりを　第九段之内　第四
実ハ鴎也此川にかもめあやまりし在鴎に四種あり
そのうちの其中に白き羽して嘴と足と赤く大き
さき鴨なりとある是也其鴎を人々然說しなり
何鳥ぞと尋ければ都鳥といふと答へ侍り此船頭
の返答の此事は伊勢物語之注とも古鴎をおぼめかれん
都鳥と答へ侍りしを此段の詞に京には見えぬ鳥なれば
鳥なれバみな人見しらずとあるに見えぬれハ是
なれハ都鳥といふ事にてとあり此句の見知ら
伊勢物語の事又ハ京人名都人故京にて見ん
訓ぬといふ詞をつけて語しものつふハそとゝと

かこハ京の人にて河の鳥を見しらぬ所は都鳥は鴎を
いふものぞそれを都の人のしらぬを仰られて其鳥をあはれ
なる也俗諺の燈臺下暗し(モトクラシ)といふ事なれと答ふ字を当て
いへ河猶此作りあやまりしは船頭が其船頭
は都にてしらぬ鳥を見て都の人のしらぬと云しは風流
の詞にて是も見知らぬ所に雅なる答へと思ひて
詞の風流なるべし此段の字は答へにより此事
なりけるおかしいさゝと見ん事にて船頭の答へ午
はいてよめる事又返し是も家に秘密せる事
口傳之

秘傳再釈

都鳥秘物也實ハ鷗之鷗ニ四種ありて其中ニ嘴と足と赤く羽色白き鷗をさして都鳥と云之と船頭の此物語ニをしえし其船頭の詞ヲ秘説也
是ハ此業平其外の人々とも都人ニしてかく東の方へ旅行きたるをかくさんとしてあるゆゑてるゆゑ其為業平の左近の中将の旅なる事也是はすみた川にうかひてなきたる鳥を水面に揺ふ白き鳥のはしとかく赤きをさして船頭の其しれ其鳥になるを業平の下の人々にしていを以して乃名へし其問ふ人を都人と見て都の人の名所辺土にまかりしこと見ゆる所へ旅行るその返所なり

名てゝそとかへ都やさしと思ひき人とる高成人々の供人も具せず業平人のたゝくにしてさとしらハ道成時ハて長途を安ふ勅使と成らハ供人あまた召して東東にてもねぶみまゐへまに身心のまゝ爲業とてかく庶人のさいとく平なりて爰に遠き国にさまよひある行きたるは都まなひとにけ隅田川に都へ帰白鷗の如と船頭の心ゆゑにいふしてけ鴎とさして都鳥と答へあるく其鳥けまと足と赤く羽色白くて白し鳥のさ姿ゆくかくまいとに都の人のさまに似通ひて作者ハ當意に都鳥よと答へし船頭の智恵なるさりけ見猶々口伝の大事なり

○ 此鷗ハ火を弄ぶ鳥之先年先師在江戸ありし時
江戸出火ありし有しにすみた川の鷗出火の烟中
に飛舞して高翔しとし古書にも白鷗ハ弄火鳥(ロウクワテウ)之
とあれバよし 師説ありしなるべし

一 月やあらぬ春やむかしの 第五（第四段）

月やあらぬとハ月やむかしにかはらぬ春や昔にかはりし此春ありされ
あらぬ月も春もむかしの此月むかしの春なれ
とも我ひとりのこゝろ昔の身になりかはりてうき事
のみ不足く我ハおぼえて似るべくもあらぬよしさ此段此
詞一部の此歌に引うけて味ふに一篇情実ハ
もなく切なるといふ深意の意味出るべし此段一部の
主意とはうきにおぼしとこめてみえたる
ものなりといふ也

一 風ふけは沖津白浪　第廿三帳　第六帳

此歌にて此女の貞実にして嫉妬の心なく夜半にた
周の文王の后大姒にも等しかるべし源氏にも此女に
比して宗の上を書かれたるに女の至情を殊に
しるしたる也

歌のおもてには風ある夜ねなく龍田山をさぞ越
路をいとほしき河内へかよふ男の道にも辛苦
あらん又身にあやまちもやあらんと案じ
出るとの抑にての一途にて心かくる心ある意にて恨
の嫉妬の念を起さぬ事を表しけるなり是賢女
貞女のふるまひ女の手本にすへきなりとし

此歌をよりてなからひ有ることといふに沖津白浪と云詞
になからひのたかりし事なくより此白浪の事をぬす人
の事に定めて其説を用ひ来りたるは昔唐土にて
盗人有て其名を白浪と云又は緑林と云へ伝るを
本説ありて故古人も用ひ来りて今世も白浪緑林
とぬす人に用ひ来りたるし然れとも此説を不用
とある所になからひありかく春にも用ひさ隔よしいひし
さて家の説にもやはり白浪の古事を盗人といへん
故事は此事の婦なしといひて沖津白浪といへん為に
風吹けばと云龍田山といへん為に白浪とこそとく
見隔て歌也心もさありなからまさかぬす人の
事にあたりと見隔一通人の説を家にも用ひ給ふ

いふも序歌にして大事に見て置てかく佗くを顧しあり
詞の中にて總目録と然思ふなれ詞ハ道人のことにもあり
らんと云事におぢめきて学ぶ事なれば此思ふなきと
いふに呉竹未鮮とも小道人のことハ建定して則
日本記にも其題をよく顕し又六百番の歌合にもと
志つとめを人のことに用ひられ多くハ道人のことを
はよく見ん説を佗よふるとて家にも用ひ遣す所
ること同し道人のことと定る中に序歌にして
此白浪の詞も用ひしと見て扨こそ大事に道人
のことをや有るらんとのおぢめき文て見候拙見増が
口授の大事極秘の傳授也

再釈口授

△此ことを此物語の七ケの大事に入たるハ此ものかたりおそくハ
幽艶無色をとととして書たりされと実ハ女の本紀刻
に書多く済ひせつんを見ふへしまたいと文法唐朝の春秋
に孔子の筆誅しめし心を模して婦道をいましめたる
趣にあるさされハ此物語一部の中にさまざまの女の
定本ともなりて賢女貞女の心たくみを後世の婦女
さとしとなるものえしめし女子詩もし 其家のたくみ
乃さはよく夫を助ふへしと物に佗くて女の身を慎み待
ら八聖人のを本にもれなふへし先此歌の心と此まゝ
詩一部の本意として書たるしめ中詩一百廿四首
婦着の本をとりたてられへきて此物語一部の所謂

所要の義也

第七

一 おもふことなくてあらましかはやよみぬへきわれならなくに人なりけれは

詞書にいひあり、らることをいはむとおもふよりあはれとあり

歌の其筋を清き古詞に積る其筋をとはむ式は其言に

大事なれともさしおきてゆく所をまさしくいひて詞書にいひあり

其風ことをいはむ折ふしよりあはれとあらは、いはむ其義

とも知らし 志れ無所をえてさとるは見知らぬ禅

語趣向の无の類のらし義を清からぬさは言の理有

且しとらし 一説 歌詠の義理をはいへは

誠もく歌の其義理をまうしてるは謡りは何のすきと

斗云旨清常の清説とよく ても思ひ無きこと

新古今 おもふこととなとふ人のなかりけんあふけは空に月そさやけき

とよめるも此歌ゟもよまれてよめる

志あて家を清すは口知ぬ

浦私云 此歌の意見ある事は中の秘密なれは後人いふとと

詠まへきもあはれへての業平所してたに此歌のかくいふ風と

いふその趣意を見知きへ詠む事おもふへし 但し

世上一通りにかけてハ万事に此ものにたとへしいふ
も此物語一部の秘決なるへきものなり
師説此歌此物語一部の伝授也と云了
蒲私云
案するに風流は沖津白浪の命は此ものの譬の一
部の中世の貞操と表はして後代婦女の亀鑑
成一隅なる處をも出るなる所なるの
語を悔てうらみを人に謀を以覚悟せし趣後
人男女上下にわたりて此志を忘れさらん事を
に聖門の教 神道の直道 仏の実相中道にも
等しや伝るへし又此意を示すといふて只心に背
かんとの意なり此中の秘密の事なれ
いふともいふへき事無けれとも此歌の趣意なり

人倫のうへに押あてて見る處に各其趣あるへし 此
歌の主意言端語端を絶してまさに拈華
微笑とも 直指人心見性成仏といへる禅の
極意の意に等しかるへし およそ右三首は意
此物語一部の本意にして冑国の髄脳なるへし
此ものの語毎色好趣をとりてあまりに表は其
あれとも実は伊勢の御の娘の中将に教訓の書なる
多く后に二条の后の事とみゆるときかうと再語し
て源ハ源の頼ら祖父之清和のいかしあとなるとも
其歌の例にならひて其人を筆誅せしとその
事ことに云ふ所に節者のあとへの基の惑
一部の主体をとへて此心を以て見る者とも後世

未学の人多く無色妖艶は基とおもひて此哥に
向ひ、甚害ある事也されは
風ふけハ沖津白浪　閑まの所業にまと出
捌ふるのいゑてにや
此二首は物語始中終無二首の心をとりて見るべき
事無物語の大事也

第五段

いせもの語意しかれの口決條々

一むかし男有けり東の五条わたりにいと忍ひていきけり
此段乃口決とはいふハ此一段あり平の情を文面に書
顕さし好色ハ忍ひの切なる事隠さる所なる事なし女
乃情も此段にて書されハ其情を知るへし此まゝハ
此女の忍ひ多き情のいふばかり切なるらんと推
量して忍ふ義也男をいふていふても親の深き物
也されハ彼是とはゝかる女になるよしある業平にさき
ら有是男の心の深くはゝかる故也されハ業平か女を
ふかく忍ふといへとも又一度に親しくなる事なる此
物語一部に見えたり女も我へて男にかゝりて親共
のかたきの上下さはれハいふにも津迄行く見る物也

一度まみえて後ハ男ふ疎さりて其人をこふする切なるものぞ是故ふて女ハ情也源氏ふも六条の御息所ハ深くもの怨(エン)じ[redacted]ありて其霊(レウ)の人を悩まさる事あるも女ハ男ふまさりて嫉妬の執念ふかくてふかく恨みへきされハ此隠其女ならち思ひてゐふく男の源氏をきめ見えて恋をこふるれ切なるといへ斗り悲しく捨ひかちくあへきぞとおもひやりて見るゝ此一隠の口决也古書の宣ふすと源語

第八隠

一 京や住うか里の人　友ともあ源人ひとり二人して世隠の内友ともあ源人ひとり二人してとい一家謂さいの者り年の友としてそうりなる友人の性名を云ふ此隠の口决ぞ　此友ともあ家人ハ慈覚大師の弟子湛慶 佛師せし人 佛像の細工の名人 後ふ還俗して高階公助と云しが忠仁公の家頼(ケライ)となりし人て主公の家業なる首て名徳多き出家なれとも忠仁公ふ宮仕せし女ふ陸慕ら経しところの其才能を惜て忠仁公家礼(ケライ)みめいしと友とも源人といへ隠をも此人ぞ此性名とふかるよう此所の口决也

一 第十一段
はほ人竹をさかふ小若なちとも小
此段なし段と為後さしべ部此首尾猥なゐる無
一部のなりしとおゐるべし凡勅撰の集なりてハ家々
の集私の記録を部立を正しくせぬか一が抄部
撰集ハ廿一代集ニ限るべし依て後柏原院の法代ニ
集撰せられし続撰吟集も序なし部立なし是ニて
考ふへし此段も前段と為後せしるす此一部の
なりし也

一 京ニその人の涙ととにきて文かきて川く
此段ニて此るす口決之　此口決といへるすハ此[redacted]涙ととに
紫いつる涛の字のるるし此て字ニて二条の后へ此文をま
いらせ後にれよしみを認めるしそれを其人といえるしして
その流れを分と書し後涙の字を秘决之歎も
なみだかならうつれ山へのうつてふも後ふも人ふはそね
るりけりと先上ふを此うつの山の寂寂なる山路の生
心細きやうをよきて様遠の然君とのへて裏ふハ此后
を思ひ忘れ未覚うてふも恋暮れ心ハ止むとはれ
涙作をも涙あのらしとも見も字るをもちうれ恵しき
よしとうてふも着ほにも人ふ逢ぬと大事ニ往
還れ様人ふもはそぬやうふよきちまて存さ年

慕欲

后には[redacted]ひまし凡人なるもかく志らぬ山路に
さまよひけるうちかしき事を心に含ミてよまれたり
此文詞の多の流れといふ所の字后とよみてみるに
其歌の意味も又其裏此説感隙深甚のること

△
此所の字　二条后五条后忠仁公照宣公此流人々へきに凡夫
ある人流の字をあやまりといふ一傳可然あれともそれにてハ文
此うに其意味も只程遠れ此然帖のことをけいとふりて字あり
るうなれハ弁れたるも一階おし程まきその流れとに定
いへは原文の趣意も立さしもし此人こにめることへきを凡
文あらハ京へ甚流〻さぐのれとへ又流くとおへき

うちさそれを擬の流意とへとあらる文勝只二（条）后斗へ
きし原文とえんうへし多うにかんるに此うつくにも慕ふ
ものうこはそれもふるく其家の一説もたいわり傳へる
是大なる此傳授なし

一 第十四段
中〳〵に恋に志なずバくハこにぞなるべかりける玉のをばかり
中〳〵にとハ一向にといふ心なりかくうき恋しくなりぬるとは物
おもひもあはずなりぬるをくるしくなりぬる物を深く思ふ心より
かくよくこしく恋に死なずハとかく恋死にもせでいと苦しと
さはらむハ死もえせざればかくてあらむよりハくはこにてもなるべし物
を桑子ハ命短かれ共契の深き物なればそれにもなるべし
身をとくなし死せむ思ひのふかきよりかくよめる玉のを
ながうハしばらくの事なる用ひなり此所にてハ緒を
此類のことく通例玉の緒とハ命の事といふたる
まし物をといふ所詞二首の優なるにて已ふる
趣と此詞なこそあり
此哥も有と万葉此うたと万葉にハ中〳〵に人
ならすハくハこにぞなるべかりける玉のをばかりとあり
此万葉にてハ恋にといふを人にとかはりなるべかりけるとある
をかはりたるのをとよめり
此哥桑子とハ蚕（カヒコ）といふていとふるき虫也桑をとりて飼ひて
まゆを作らせて後に此蚕を蒸ていとふ引くなり此桑子
ハ春卵を生じたる其卵を紙にうつし置たるを桑の若葉にて
飼ふて六七月頃にハいとふびるなる虫也一年とせる
ぶして死ぬるそのはかなき虫なれとも契りはふかき虫なりし
此物語は此なふにてハおなじ口伝も侍る様と三代集傳授
此時此桑子といふに口伝あり大事なりあるべし
後撰集相傳之時此大事ヲ傳フル事也

第十八段
一 なまごゝろある女有けり

くれなゐににほふはいづら白雪の枝もとをゝにふるかとも見ゆ

おとこしらずよみによみける

くれなゐににほふがうへの白ぎくは折りける人の袖かとも見ゆ

此二首の哥のこゝろとわ口伝 又此なまけうさる女誰ともなし
此哥なまけうさハ小野小町のこゝろなど述ともよめこし人もいへりと見えて
おくゆかしく誰とも定まりたる所ありかねたりとみゆるひさし此るゐ
其后の口伝にもよめこし人もいへそのゆゑ 撰集の時同人の名多
く入ぬときハあらはしてよめこし人もいへりてとかくかくさし又古
勅撰の人のうちに又其のなかにも其人とあるハ小書出
さるへき哥又ハ名もなき人のうたさ下賤の人のうた
其哥の詞ひハよみし人もいへれと書す古実也

なけうさの~~虫菊~~なれ紅に白ふる~~折人の袖もかくれと~~ いつら白雪のとふ心ハ△
~~いかさまに~~△ 恋白うつりに菊なる人一口をもとにようて下に心懸
ありして此男なんを引見んとていづれとハどれかどいふ名也
とをいとふた撓むる心きて雪なとハ中将の心よ菊の見しぬ
といふ心白色ハ菊の本躰にてうつろふ菊のなき女への好色
な人と見んれさもなきといふ心にいろ中将を却弁まで悩
ある菊なれ聊かに移ふ所ハ紅にみんあれとも大なるハ桜に
雪なふりたる所とみんあると也ここれ心もあり草を女菊と
いふそとこと也此所さへ心のうつゝぬと歌りたよむこと
紅に白ふとも此白ひといふも其に白ふる心にハかし 紅なる
に移り行が白ひやかなりとの心也
返しのうたの心も

紅に白ふかうへに白き葉を折きを添人の袖もかくてそあれ
らんと思ひやるとハいさゝかも詞をぬすめるによりて其流之哥
紅ハ白ふかうへハいさゝか句ふをはなちてその上に置と
云義し紅に白ふ所もあり又元来白菊なれば之此所の
うこきさうなるをとゝめて唯此所にとゝまりて女共おもて
きし菊の其末に交りて衣のえうさハいやまさりつるハて
白き菊の花のあかそれと同しの紅白と交へし女の袖
口の衣の栄能なるに人あらむぞと菊の上のなるにいひて
女の服装のなすに成しても思ひ知らるゝ此所
身ならさゝむきものよりことといふ詞此女の仕さまおもひけて
よろしおこせるとハ能なからそれとおもひよすこしと
いふ也之

此踏答の音ハ口吻あ流とふるすハ凡あとかれてふえ也ふ㊂
と爲するあるひ有　ウクスツヌフムユルウ第三ノ音是ホノ字ニテトルゝ　此踏答此音此通
音なるましても文字にてことめて此るすハ口吻之大かう
ウクスツヌフムユルウにてことむるにも皆とめるをなしてにえしそれが
此第三之音をとらへしてもの字にてとめしるゝ也
「も文字にて爲すれとも又それとも又これとも云ありと三
方にかけたる詞なるを之（ともとありてはたえ之）「もの字一字乃
扱ひにてハとまりゆくしそれハとてありといふんれて
字を入てこれハとまりてふえなれハ之此所の字扱ひ
大事なるへし

○ こゝとめの證音

天のうミに雲の浪立月のふね星の林にこきかくる見ゆ
箱根路や我越へくれハ伊豆のうミ沖の小島に浪のよる見ゆ
右二首ハことなる文字なくて押へて世にあまりあるを
清く見とゞけたる也 波のよるとこそ見ゆとあるを入
てこゝろすまし其外にも
ねそぶこゝろ かこのうつこゝろ 花見しこゝろ 立添くこゝろ
右各と文字を入てこゝろと見ゆ（ふしも）
あそふとこゝろ なこの折とこゝろ 花見しこゝろとこゝろ添
立添ゝくとこゝろ 外新いつ迄もと文字を入て
こゝ添るへし

廿一段
一おりふしひろき世かはりかはり手[redacted]月をはさに花やもミち
上の二の句を世女を治りをへとも立出ぬれハそふひろき世
なりかはり人の心もかくあるものかはりといふにさて手
月をとりふるき色をとゝめまた又これもはさに花
てや有りんと一方に人に咎（トガ）とをせとよみ也花中秋の
心し　諸抄義同之　これや世中ひしと続きたる実に花見に
人ハそひろきといふ説あれとも世の中にてハ女に世
ときを治し世治いては世ふひろき世のなか月を
随分花見も治りとそひれとも世のうつり有る
といふ事なり草の中性にとれ後と女の心に
料とつみぬ 女とうらみとして我身を説き
実毎季春に見るへき也

君子ハ桂ノ芳性ハ春濃カニ秋更ニ繁シ小人ハ桂ノ花心ハ在朝夕ニ不存
御註此詩御引也　後註トハ後水尾院也
寒しといふその人の心に多くおもふにかはらぬといふ心
ひしっん心にたっひ多あるすれとも有りまやといふ心
哥の心と前註にて明らか也此哥にかきて口伝の由
寒しといふ事ハ寒草ひしといふし文字にてふかく
此し文字を寒草のしといふてかくひあるよし
寒草のしといふるハかれたる草を水にうつして
見えしハ汀の草にうつりしおもひしとくえ此し文字に
[illegible]にあるも
[illegible]我ハ随分とそふ人の

寒草ノしノ事本文ニ明ラカ也ト雖只枯タル草ヲ水ニウツスカ如シト有　湍差師口授シ給フ所ハ
譬ハ冬草ノ枯レタルトミエテ下ニハジツト芽ヲ持タル如ク上ニハ左モナクミエテ上クト
味フ時ハ下ヨリ春待草ノ芽ヲ出スカ如ク味ヒ湧出限ナキ意味言語ニ述ツクシ難
只枯レタル草ヲ水ニウツスト枯野ノ草ノ下ニジツトせ芽ヲモツアンバイト心持吹遠ヒアルヤウ也
依テ爰ニ記

徵

心に遠ぬやうにとえひしっよしとその人乃心にまよひしる
れはりてこかくそふ人乃ふりくとして年月陽かく紫り
し中れあくまるなり行振になりさふやとれるゑ女の方に至
とおやせんとして糸方の上に誤かちはりてのすくと糸を
口まをせめて人をとうしこまる人男の本性本情て
此尺振ハ申へて此物語一部の所々に此尽理を心中に合てる
るゝて唐朝聖人のをしえハ義我理なめに切院してをしえられ
こそり本朝神の教えハ和を基として何事も
[redacted]
温和にをしえを
なりよりて此物語源氏物語ハともに只文面の上にたる色
艶優の事をとりきえ盧言にかゝりて徳教をもえすに先本
邦の神道の餘風と今もとゝへて堂上のことハ萬事優かに

君子ハ桂ノ芳シキ性ノ春濃ニ秋更ニ繁シ小人ハ桂花ノ心ノ在朝夕ニ不存

御註此詩御引也　後註ト八後水尾院也

香きびしとはその人の心に多くふるまひにたへたる

ひしかと心にたくひなきすかたも有けりやといふ也

哥の心も前註にて明らか也此哥にうきて口決の也

こいふ事ハたえすひしといふ一文字にてかなへたる

此一文字を寒草のしといふてかなひたるなり

寒草のしといふ事ハかれたる草を水にそへて

見る也ハ浮草にうかひ出るとくさ此一文字に

業草の心案しを此一字に繋るなり

△

たまふといふ事ハ人の心に幸ふる事我ハ隨分とおもふ人の

心に違ぬやうにとたえひしかよしとその人乃心にきざひしるす

れはりてそかくふ人乃ふりくとして年月陽ふく紫り

しけれあらそるなり行振にあり言ふやとれんて母の方に能

をおやせをとして家方の上に誤かちはりてのるかと家を

口きをせめて人をとうしこまるる人間の本性本精

此尺振へて此物語一部の所々に此道理を心中に合てさる

るをて唐朝聖人の教えハ義我理分明に切段して教えられ

そより本朝神の教えハ和を基として何事も[redacted]温和に教えるを

なりよりて此物語源氏物語といへとも只文面の上にて好色

艶優の筆をとりきれ處々に節有徴意をあらす先本

邦の神教の餘風にて今もまへて堂上の事ハ萬優りに

如武家に廉くし紀子ハなきさ之是祢代の路愿之文武
是漢家聖人の教えを守て、何事も義理に叶ふ節
陰して万民を平均し国家を安んずるこそ要の本
友臣を車の両輪のごとし片輪も欠てハ太平の
なりと申すべし——

廿三話

それまで
そハ離れもの
ゝ
れハ離して
離の事

一　一 [redacted] 民のめ明き口の身をとうと云て祢ハそれまでは生おし、なくなる
此前海松和布明かに満に我くらめなく明きんと云へてしまり
我ならぬハ我に何のえんもなきことを了簡之それとハ云て
業平のなしさまやて来り、ひのふと云ふると法共
さらめかりもの哉れハよせてとめるべし　背見るめ明きとは
此女中神にみえぬなき之我見んしぬハ中村に恨る事ほ退
されハ我見ぬハ是明きのとがにてあれど我身をとう
先しとハ名ハてあると足ぬ前記ぬり来るそといふなり
我身とは男のこゝろ也（於口波有　読物無之）
男の身をさしして我身といふ説もあれども只女なる之
なり平の化しきる事と女とりて逢ぬとそれとは

ちとせを月にてある女に逢ふ事もなくあるそとて逢ふ事を紀
まちしけるか女の身ハ我をたのめつる御事とハまうしけ
とは業平の事としきりに念ありしを重て
て我見て下ぬやうに思ひしかして有女にそと面富して
云也
人の女に年あまりの女かくれ居る所にてハ我しと云也
それゆうにふるまひつゝありけるとけさし人の志て之ゆまれ
見る人く入るものに無益乃るに行かよひのふよと有り
又一説そのかたにうらみありとて男に見え　しきに
やうの名也それハ其方の科の事に思ひて恨みし年
其方に無益にくゆかりけれとも此説よし有説
ともに用之於口傳の有也

説ニ下に委し　然とも初心の人にはわかりかたき事
先これを略す　其身をうらみと思ひて移る心といふ説ハ女の
其身をひけしてかくれ居るみも我もやさしきものと思ひ
移る心やとてく女の人あらはにいひもなくと云ひもよくハ
それ人の見る所としてハ恋をすれ共ハ我も我く
女の人に云なからひていふ事もあまきそとかくハ
いつと定めたある事ハあさましき人あれハ其人と
知りそこ庭の心にあひのまゝして通ひぬとそれとは
業平也其て宿月にて有女に逢ふくあるそとある
見ゆるをとハ見の為に添ひ移り千万匹も行かへりて
まちえてそとて女を見たる事のあくるとあるゆく年
たれなくとて此心をある事ハあるらんして女乃

それとハ見えぬやうにそむいて都せに来てそことしも
女の心のうち深くハ今の事のこゝろれぬるすハあるまじきに
来り深くハ女の不審なりとし
口の秋をとらしといへる深切なる恨二條なり男女が
恨てよといふ事に大切なる思ひ切れもせず心をあはせ
先ハ女の男をはなさぬとの心もちぬまでを男によく見
給ひて見えしる思ふ何やうにかゝぬと別れハそこを
女上ふのうちに心ある人の有て女の心をあわせとされは
其方に猶ハ別れし其方のあそしきつ其方の身
の難にてあるにも人をとらへむるを別し我身をとらへて
とれよと異見し云りしそれとハ女の身ハ又くらく流して
只女の身を思ひぬる事を済ませとの言一向に見えぬかく行

通りてよとし平生ある北枕をとかくして人の枕を深そ
振の事をとらへ見んにそむいてられるハ実女の身へ
さ深事ハ恋よと名をもしかしそれをいふ身をとら
とよみさり吾身をとらへむるといふるとて離を離
をも海士の海中と見さかく皆らハとく別れりとて
我ハ事よとして見えるあなきといふ名字一首の首尾
女難に見るとき上女が業平にあやまりしぬと思
かくして逢ましきとしされハ彼を是ぬ事離き難にて
逢見るあ難き事ハ業平の口のあるる心故と歌語と
きてかはれし都て人をとらへみて吾身を恨めといふ
ることをてらはして見てあきらめて我をとらへてみると
とし然ん 振にてハ一首目の首尾よく聞えて伝ふや

卅九段

一いろあるきさふかおもちてみこれ有ぬなし

是も無証の再談し　無証いせか筆作とは見へし

後人の註と見てあり　傾ハいせの清とハ後の人なり

時代ふ同しされハ無証も証人といふる無信の説

一 わかうへに露そおくなる天河とわたる舩乃かいのしつくか

なを有れ露にて是藤生しまた紀伊とに是を天河に磨
舟のかいの雫なりへしとて常に哥をとかふをくれハ無隣な
とふよむる有ましきるとし哥人ハ無理なとそふへし
又云此の文字大かう一字れの文字治定なるし哉此略なり
疑のかなをそれか是のかなとくの文字をかさねてとくるまし
然とも無哥のか文字一字成る疑のかし也けるる舟此
かいの雫乃露なるかし是と成るのまきかてなく
信色の棧の所にてかく藤生またかれんとされハ此
かなを疑也無偏の口波とまたあるも此無か文字の見れの
事かの口波之

一 六十五段
女がたゆるされたりけり此段ハ
後撰詞ニ女ゆるされたりといふに女ハ禁色をゆるさるゝ
織物濃織物を着かゆるさるゝ色をゆる衣といふ也
御ゆるし事とハ禁中にても[illegible]高位なと色ゆるし八歳か
紫[illegible]色ニ給ふへし男ハ大臣以上女ハ三位以上着之
尚侍 女官也 ゆるさるゝ之ゆるし色と[illegible]也
誰も着ることゆるし色也
此段の二条后を源氏物語ニハ藤壺女院 藤壺女御[illegible] ニ
俤をうつしして書たるへし
一 女がたゆるされたりとは 此中将女中へゆるされて参るを
通ふ之女房第一の人也と世上にゆるされたると云説あ
是と云ふてもいふ也 女の侍所ハ臺盤所にて有る殿

上人にて業平の女中まへも申されて内外かく后につ
まりしと思ふへきなし摂政殿と仁女の侍ひにて后に対面
一入の叡慮也内こその所に口決有
あり平生御人と遠ひ忠仁公の家礼なれハ女の家中
も許されて出入しけるとしたりけるによりて二条后とも
心やすく語あひけるに見まつり同前にありしとそ

師説此所の口訣（ソケツ）といふは凡女の侍の台盤所にて
業平の心よく知るき殿上人のたやすく行かよふ御事
所なれハ内々この所也此女の侍所ハ主人へ天子みへて召され
しませぬ所也摂政殿なと女の侍所にて天子に御
対面ありけるハ甚貴賤雑穢の事也此附乃摂政殿在

忠仁公也是后の外戚也大古より天子の御外戚なる（此人とよん）
人の摂政申されけるなり然ハ此忠仁公初めて又太政大
臣の始りハ忠仁公の事照宣公（堀川大臣の事之）初りなり
此忠仁公后の外戚故摂政しあふによりて内々の所なれハ
女の侍所にて后に対面の事も是雑穢の事なし此事口決
ゝ今抄の大事の女侍所にも業平ハ許され后に疎
以雑穢の事なし此なり平の女侍所に伺候と許され
又二条后と見まつり同前の事なれハ殊更殿上人なと
もかく心安く許されけるよしなり

六十五段之内古今ニ不逢恋トアリ

一 恋せしとみたらし川にせし御祓神はうけすそなりにけらしな（古今ノ点 そ家ノ点 家の点）

此哥家の点ならひ有相伝の説は神はうけすもなと文字

助字とうけるゝ神はうけすそなりにけらしとよむ

とよみても一首済ゆる也

流る洗川は神山より賀茂の御社に流出来て船岡乃

森より也とう小河也又いはくにも有

斎日雖の祓しけれともみそきしける所ぞ河なれは縁しとぞおもふ

流る洗川とは惣て神おはす處の川をいふ神詣する人然

川にて手洗しきよめて神にまいるさされは神ある所に必

みたらし川はいつくにても流る洗川とも河なき神ある所に必

まつ祓ある此川なき社の流る洗也

此ものはらしはいつきの社にもあるなれはな

いはれけるハ此分によりて之悪をしとらし川
にせし法祓神ともけるとてあつかふにはあらしといふ
前にありて此所は清手洗川の大事ありけるなり
さくて悪を祈るには佛神にむしろ又佛神のみにあ
そうしハ佛ハ伯潔神ハ賀茂貴船などに下りて悪を
祈る所ととをらし此賀茂の清き流ハ貴船の流の
来りされハ賀茂の社に悪を祈り清祓を御手洗川
にてはじめて賀茂と貴船両社に自然にかよひて
祈願のとゝの遠きを貴船に悪を祈る第一の所也
そのかみ貴船とし祈りける故賀茂の御手洗川にて清
御祓の此二神社に祈誓せらるゝのありけるに是の口決
し
故御祓ならるゝ和歌此頌を本分にして藤川

百首に 宗家卿

絹売かけにせもあらぬ御祓川おりまきるゝ是 数まさり行く
ことに詠じ藤川百首の中に此御祓川のことを口決也されと是
撿証の此歌[redacted]ひとし此物かたりの此歌の口決ハ葉のうへハ
藤川百首にて末の口決あれし 唯御祓川の主意を傳ふ
ゆゑなり

此歌の心ハかく悪しきゆゑの孫僧も人の御祓なく
のこともうけても中々今は所詮此悪けふかなしき儀也
ハことに悪をやしと御手洗に此悪をあらしのことを神に
さいとなるもかさんとて御祓しなかく猶深きをかる
御祓をあさ祀よりも百信まさりてこゝろよきを
きこゆる廿日夜にて深くかゝる物を一向に悪詠

聞°

出仕しさと御神のひ八神ちらけをありにさらりしき
さゆう八方を作りてたふとけぬ画ーと一向にさふれ
そのふ乃法経くありいうとありにたてねといふ足ら
切に覚(キコ)えられしも玄作りりて字ありされハ家のき
音ののひらつに優に字ありてうつ作りしとおかめ玩て
よろこなるを用ひつ添くとくともに主体苦つ八ろ
画ろし　凡

六十九段

一口のあり所にゐていりて神のとかりうしろまて
子をとつより丑三つまてとハ刻(コク)を上中下三段にさたむ
謂也　又云一刻を四つにさたむるもの也　其一つを漏刻に
十二時を四十八刻にて昼夜の时をさため其一时を四
刻にての子の一つなり

六十九段の内

一 つの人をや所へきかし ねて得てハとかくと思ひくて待をれハ（後朝の文をまつ也）
ちくりて多めるさし
女も亦宗の正しき職也 男も正使乃職也 いつれ
もさやうれ思ひ子ハあるまし 抱ふる所ろハ打任せ
人をやり文行へかふもあらぬなるへし 其子又説也
其おの約ふかきを何ろもまよいぬふ久りとふ行りと無
小帳子あ逃もあるとく 此筆跡面白し されと斎宮ハ
中々多るハ狩のかそ是乃らん
或説ふ一夜れなしとに以いと思く成て師尚とまうを
あつるとは くりやすいとは知るく記るき
高階（タカシナ）峯緒（ミネヲ）子（ノ）師尚実ハ業平れ息也といふ其一説全
等あらぬいみなるへし

七十五段

一いせのくにゝゐていきてあらんといひけれは

いきのくにゝゐていきてとゝいふる口伝にいせ乃国に手いていくとはいせ乃国に引率[redacted]て行のかたりなとを京にてのるさにいていきてあらんといふハ人の忍してわかれんの心にいせの国にそ住かにてあるへしさなくハ今逢かたきといふ心也母ハ斎宮の女也亦斎宮とも縁りて逢にくゝありしあのて後めるさける

此段の口伝也

此段初にてゐるさといせの国にいていきてと おほかたけれて都のうちにあるぬれハあふこと口伝にて只ましこれとあひかたきを海に

あぬ矢たる

七十六段

一二条乃后のまた東宮のみやすん所と申ける時氏神にまうてたまひけるにこの衛府にさふらひける翁人ゝ乃ろくたまはりてよめて小御車よりたまはりてよみて奉りける

大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思ひ出らめ

此段全篇口伝あり

二条后 東宮ノ母 大原野ハ西北国の大原野也 長岡に時分に嘉祥三年 仁明在位 閑院左大臣冬嗣公春日の大原野[redacted]社に勧請し藤氏の氏神にて祭られあるし五条后順子冬嗣公の女也、神ても祭り 大原野四社ハ平岡平野春日大原野是也 春日大原野社也 皇御孫太玉 天津児屋根三所ハ就中天津児屋根ハ藤氏の鼻祖にして藤氏となりたまふ哲言して天照太神と姫御神と申せまつる也

天照太神の神勅にて天津児屋根と君臣を分ケ給ふ

△二条の后のいまだ東宮の御息所にておはせし時より中宮に
よせ給ひて帝深く御寵愛有し故早く御位について御所に
傳受ありき御息所ハ御諱をいはずして御車より
おりたまふといふより傳受之恋を近衛と越て会
御の躰之一ツ是にて御契ふて業平と東下りとく
后宮らるる之叡聞と法皇長人の御まま東宮の
とかく文にしいどもりて古今にて要之のくまし
を付給ひりの例にならひて也大原野社ハ春日同
社也

春日四社ハ

一ノ社　姫御神（ヒメオホンカミ）　天照太神　一社　本地観世音

二ノ社　平岡　（河内国いさうき　天津児屋根命）　一社　本地地蔵　河内国平岡より降臨　榎本明神臣ヤス　ふるく当社に居に堂ありて今そさらんへの為ことよりのりより春日の中にもとて如来ん留む

三ノ社　武甕命（タケミカヅチ）　鹿嶋明神　タチスミノ命臣　一社　本地釈迦　それとそれ釈迦牟尼仏世に生てまさけき月の世とてもとは

四ノ社　フツヌシノ命　香取明神　一社　本地薬師

二条后いまだ東宮の御息所にてましし内をハ后の振迎ハなされ
ぬところそれを二条后は忠仁公の女にて時めき給ふより
て中宮の例の振迎をなされし是は無位の傳受あり

△大原行啓といふ事を

この衛司　註　あり平に衛司のこと此時にはまだなかりしを
となる家なれども貞観六年三月左近少将に任ずとなれハ
此行啓より先なれハまだなし　此大原詣行啓とハ
いふへからん只推行しのがれのことを　春宮行啓
にて此衛司の御供にてまゐりしことをさしてたまへる息所に
てありしも時めきたる人なりし例もあるべし　業平此時少将之
近衛(ナカキマモリ)とハ唐朝にてハ羽林(ウリン)といふ職也　羽林とハ左右の[redacted]
陣を張ル故鳥翼(トリツバサノウモウ)羽毛をたとへたるにていふ

車よりめハりし　註　禄を車よりめぐりて其例なしとこそされき其ハ
ほかに見えてよくるなし
後陽成院御説にハ車より下知へとあり

翁　業平をさして云るなり平此時壮年なれども翁と書[redacted]る大原や小塩の山もとふ
うた老人めきてよめる故なるかれ翁をかく形容してよめる歌なるにかく老人のやうに

云ルハ老人のよくよむべきことをさとらするなるべし
又車より禄たまはりしことは此平に在近衛府の車より禄をたまはりて此時の人々たまはりし
又ハ二条后の古への契りもありて其の人々にて業平ハ在近衛府にて伊勢をも御覧じ
たまへりし　女車へまゐらせられて車より禄たまはりて先縦なし　此所此臣
の口授之此口授といふは業平をかく車よりまゐらせられてたまはりしも其口授之
先縦なき禄を此平にまゐらせられて后と平の禄を給はる人因縁なれハ女車
其由りと云れりてかく先縦もなき禄をたまはりし恩をも人よく心得
まくなよせてたまはりし事ともなくて此たまはりし下の心なるへし此事を
そしめ先縦なき小車より此禄なるといふ口授の大事なり

○

大原やをしほの山もけふこそハ神代の事(コト)も思ひ出らめ

東宮の御息所としめて行啓ありしかとに春日の神も天照太神と契りたまひし
相殿の昔を思ひ出給はんとて君臣の約し下の心ハ二条后と蜜通の昔をお
もひ出しなれとの心也

源氏ニ　住吉の松こそものはかなしけれ神代のことをかけて思へば

外宮内宮とも天津児屋根命相殿也是伊勢の神秘也下の心ハ大原や小塩の山
と后にかけていてよる心にこめてよめるなりとしほの山ものこと
文字に心を入てよめるなり　大原や小塩の山藤原の子孫のまつりハ后をさして
○をしほの山ものも文字に心を入てよめるなり天照太神と春日の明神と君臣の御約束
ありしにならひて其例にて藤氏の人春日大原へまうで給ふなりけり　此后ハ藤氏の人

そてハ業平の
地にかけて見る
神代のことも
思ひ出らめ
とそとて（二）

天子の御后にならせ給ふを彼神の御心のことく合神となりとし已上大原のとかり此山もとゝ申る所也
のみ子そハと業平のうちなりし昔の事を思ひ出られて御後見の人申し出て其心ハ神代の事[redacted]と思ひ出らめとハ天照太神と春日明神と君臣の御約束の昔し神代の事とも今思ひ出らめとかくいふ下の心ハ后と業平とむかしわりなかりしを思ひ出らめとなり因て此段を記して後を取載しておくにかの内の事をしかくのみいひ此段よりも下ハ作者の心すちなり首乃段を思ひよせてよみ給へり但此段の事ふてしか人の甚深と八文乃とかくかし作者の文勢ハそれと心と信ずべき事也

此段の文は後人文をかくべき事知るへきにもあらされと
通しまて此一段をさ編む後傳授之

七十八段
一 たかきこと申す女御おはしましけるがうせ給ひて七七日（十ゝ十九カ）の御わざ
安祥寺にてありし
七七日乃御わざの事を此段の作意也

高子ハ文徳の御代貞観元年に薨ずとあり是三代実録之義也
女御ハ天安二年十一月十四日にうせ給ふよし実録の記にあり三代実録の
文也然ハ四十九日ハ明年正月二日なりの頃にや然とも常行の大将なり是ハ右馬
頭業平の後の追善なとへきを作りものゝなりなかくおほし大方の疑ハ皆貞観年中の事なれハ
遠遠院殿御抄に云女御多賀幾子貞観十二年九月廿八日に薨ずとありと云
然ハ四十九日の御わざは遠かし先実録の記の事にかきなせると見ゆる事つか
ぬしたる也

師説此七七日の事定家卿の御勘物ハ三代實録を引たるは実記なれハ違ふ事
有るへからす逍遥院殿御抄是又定家の人のとり分て勘へ見侍るなれハ疑ふ
へきにもあらす但し作りものゝ事なれハ年号月日を七七日とおもひあやまりて
かく一義也七七日と決定してハかへりて後のことさと大やうにみるへ
き也

八十七段

一 津の国あしやのさとにしるよしての段

同母をはなふりはらふとおもひのたゝこれ段といつ種なるへ

註 此時にあたりて田舎をきてひるとなる身の述懐之心をいふ

此時にあに母をはなふりあまそうとや甲斐のあまきそのなるよ

なる段とは此段といつもなるらんとなし侍らひの居

と無の字をいひかけたるなる也 旧説ハ兼行にあるを

侍らひハ間也 祇云 行平はなり時にはなかはと

してなつりに成しくしも程に我母をハ果なふるは

ちらに極りよる身とそふあてゝ同と無随といふ道

なるらんと云也 諸抄同義 口訣

後註云 はなちに成よとぬしにすある在原の

氏の此時にはをぬかあのこなきなるなりといふ也 臣下非

王命不越境なとは此ハ天下をうけたまはりてはなさるゝこと
ともなる難本なるへし
宣聞書云 あまりひろき風ハあまりひのあきといひのけたる例と述懐之
茂聞書云 歌生世にあるハ官のあるとも奏ふさしれくて此袖
のせはきと此歌ハいつまでも高き位へのぼらんとし
蒲註 昇進をしきて定ある事を歎たる歌なり
ともに補任をこそと待ぬさしもあるまてかく老
ゆるまでと述懐せる也 昇進をまたすの歌
き此の歌と世布川乃歌とはまたさ高からんとて
てあるハ此の述懐の風の歌ハ従たるらんとこゝの
哥頭は唆文此説なり

一 ぬきみたる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせはきに
古今十七業平朝臣也 ぬきみたるは珠をいとよりぬき乱
したる也 歌の表ハ玉を袖のせはきにふたつへてよみて
此歌ハ彼小相子栗の大さしてちりつるをよみかくしたり
しろき神さしも間なくちる歌の白玉ゝとし上は
いとぬきみたる人こそあるらしと袖のせはきは世と
ようて身のけくはなる述懐とようしそる風の心ある
ことよめり 祖註あの読説ハ述懐の事を掲る殊

しれ験の白玉のせんき　神くはゆるそうりあるとも分けす
なりしこゝに随所母
後譜云　此験の白玉ハ水精の玉を作りぬきなしとり
ぬきてゐしくるゆうしそれハぬきゐるを人それあらめ
なれハ是乃夜ゝのつハ裁して事れくちる生せられ袂ゆちろ
く袖に餝りなし　畢下ぬれハ　百満聞書　此験あこぬ玉
あみかりしもれる水上にぬきこしろ人それゆかりしとく
ちろつハ裁して神のせんきに此てえれ文のひくきる事を
云畢進をて自経限速惚とまあるし此家従伊交あり
るとし

一うせにし宮内卿もちよしが家

何人やらん系図にみえしも其家のすへにて日着なりけるといふ
ものゝ名惜也 徐璠が宅前湖水東などいふ中にみえたる事を
いふか面白からずや 愚案是三體詩に分明記之 徵還家夢云こ
後注 此人誰とも不知よし於ても此家を作りひろけてあそ
かえし 百茂云なり平 母の浮身にて後水尾帝へ条傳授のよとか
まへつも 落云 業平朝臣の母こその一家の系図の人也 後水尾の
御時詮義有て見出られし也 此系図傳授也 諸抄に書かれしより

九十六段

一かのおとこはあまのさかてをうちてなんのろひをる

後成恩寺殿の抄に地神四代彦火火出見尊の兄火闌降尊の釣針を
失ひなひて海中に入て取て海里ありし時海神乃教へあてさか
手のろしきなりといひ侍りて此釣針を海中にかけ
返しあたり是よりして人をのろふとてさかてをうつ読みにやうて
あくくるなりそのうちにあまのさかてうつと云ことを志ん給ふ
さもはりぬへし 但諸説あるは海士のかづき[redacted]に海底へいる
そてをふりて波をおしてゆくしいきもえせぬをきわまる
業平のとひの物ありきり海士の達てとおして手尋の話に
入るよしにあらしきをと云しのろひのことは其人を物に恨む
ことゝいふ 玄旨日義之 鉤針を逆手にかけ返しあたりしかは日本記
神代巻の下に委し 継出とも當流に不用 只海人乃説を用之

六百番ノ歌合ニ
寄海士恋　兼宗
いつしかもあまのさつてをうち入しうらひときてや世をもしうらん
右方云　あまのさつて其説ニあらす之強ゝ偏ニ法士[redacted]ニ定めさ承
すぬ何　俊成ノ判ノ詞云　左あまのさつて強ニ兼釈さ（きゝ事ある也
とも海人ニよめらんニ至てハ何乃うたかひかあらんや千未人ニ実
説と出んといふ甚理なきよし是荒了て往昔ニよりて作しされ
と強なりよしとて作らも伊勢物語の寺を取る證拠也とある
へしことにきれハいやもの乃りニおきてハ俊成卿の仰説ニ随ひ
て法士の説ニ決定すへし　俊成の法齋ハ新勅撰ニ
いふせんあまのさつてをうち入しうらてもなとうらめしきらか
イヤ下旬　うらうても様うらむ何世をとし　けるをしハ雲法物語

祈さきるすを呪咀なる神さしハふうきうらみをいふ也　是ホも陶
針の説を用ひさせぬの凡甚しき人々まつろまるなけんとを説の
ろふに惚よりあれと法士乃逆手といふをも叶のを見るへきも
玄旨法説曰ス
師説　如此ニ説あり一説　拾穂抄ニ委出たり　其説ハ立以出
見尊兄の陶針をとりてあまなにすきれなのしるさしあまなる
鯛のあるくへ尊法律ニ入り龍宮ニして此釣針をえ給ひし
時海神のをしへ給へるすハ此釣針をうしろさまにして海
ねかし海の中ニ無くり給ふ時とやこいるさへ是を皆すに
用ひ此説ニてハ天の逆手とよむ家ゝ侍　是ハ其説へ当流ニ不
用之し
家ニ立られ候当流の説也　海士の逆手といふ説也海士人の

かつきせんとて波ニ分チ入ル時逆手をうちて潜きて海底ニ入んとて
さかさまになりて入る時手をうちて波をおして入るなるべし独述
それを見れハ其の如くなるにたとへしいふなるべし委ハ拾穂抄ニ
出たり仍而略之
海士の逆手なと古説に用ひ来りて六百番歌合の判に俊成卿乃
御ことわりしを證として家に用ゆるなり
雪玉集　礒山の花のさかりハ知らなきかゝるもさそさを打添むらん　逍遙院
右海士の逆手当流相用之也

九十八段
一 おほきおほいまうち君の段
長月はかりに梅の作り枝に雉をつけて奉るとて
わか頼む君か為にと折花ハ時しもわかぬ物にそ有ける
此哥古今ニハ大政大臣のうたと有
おほきおほいまうち君ハ太政大臣也良房公也　清和皇
九才にて位に即せ給ふ時摂政し給へり貞観十四年九月二
日薨ス六十五才　白河ノ大政大臣又ハ染殿ノ大臣とも申し　忠仁公ハ謚
号也　歌の心ハたのむ君か　一詞書に九月はかりとあれハそれ
時しも分ぬ花とはよめり　又きじを枝ニてよめ訖
うたなり　肖　忠仁公をいはふ心に君か為にと折れハ花も時をきハ
にそ折れると云也　玄旨曰　古今第十七[illegible]しもへとよむ人ぬ
おとなまるかうつりたまへるとありて左府に忠仁公

うこめよしみしくり忠仁公の詠草なとふ行てとみて勘一
入とくを　玄清曰
師説如臣口決有
おちきおちいふ[redacted]うち君左大臣良之忠仁公良房公のうち清
和の外祖之流ふてうり男ハ業平也つり平ハ忠仁公の家の流
を忠仁公の家の流とはいへとも父母名號王連してし海
を名仁公の孫子なさることより仁明の法皇殿上して
元服有し父母親王達の死そそれより王氏を出て
始て在原の姓をかりて忠仁公の孫子ふなら咋之
されおちきおちいふうち君とあらハ太政大臣の子之
親族の女之天智天皇の臣代にて天智の孫子大伴乃
皇子太政大臣其餘の太政大臣之如天智の
親族の也之

△

法代ふ是法ち大伴の皇子如職と候君わりして人皇のて
如職ふるり人如忠仁公良房なし
柄の作り様とは色宗の子ら宗の人也大学豊通乃
柄ノわりハ為也ぶく色くして表表ふ毛生わり
先を色作り宗わとしてし一説ふたりん宗ともりの也と猜
年の内ハ立枝を挿て雄と左り上ヶて法ちて雌
を下ヶて付之年始ハ雄を左り上ヶて付るし表ハ雌
を常然しても此し付様ハ作者事とし或ハ如草を用ゆを
いつしも事は柄ふ用る様に付る常の事なり
大臣の大饗の时用之又神ニ雪の紅梅を人ふき臣ケ付り
如作法法れ々此方臣園本殿之紅梅
わ之さふ色り一雙と付りと云臣ふ季吟の文臣ねふ每

出より　又鷹飼より人の許へ雉子なと二三を人の葉の枝を
刀目(カリマタ)と結ひて本(モト)とれをしらへして付ることも一双を付る様情ニ
古例人なし　泰(ハダ)兼(カヌ)則(リ)の説　又四條大納言隆親に作一説鳥の尺六七
尺雌雄一双を付ることも　又大臣大饗の節。或ハ元服。又ハ移徙(ワタマシ)如
新将軍用之雉は人へまいらする根引の小松に付ることも義氏朝臣抄
説鷹飼より人のもとく雉子を遣すに鳥の所へも萩
薄とさしめて何ニても付るとも一説ニは松に鶉を付る事も有
山鳩こも義家朝臣に付ること鶉をハ萩薄の枝ニ付る
小鳥をハ其時節の枝ニ付るより雀をハ竹の枝ニ付る事も
十月ニは伏柴(フシシバ)ニ作るをいふ一説鷹飼前々の説也
又枝乃結やうをいふことに付る五葉の松を又付る
枝の長サ七尺或ハ六尺　但刀五分ニ截切ル　枝の先ニ鳥を

鳥に火打羽

はく付る枝ニ少しく枝ありてさて鳥の足に二所結ひて
鳥のさし所ニ火打羽(ガ)の二つへにからぐて十字に千の角の事
ニ鳥をそへし
五葉に松也五葉とても鳥付ることも
松之枝に結ひて根のもより鳥を結えて取扱人
とよあり　但し刀木竹ニよらす候ニ切用　切てその
手と切そぐと但し刀といふ也　雉子にて
鳥にて鳥をとハ結ひつらける鳥のよし
師説　鳥付る事　通例春ハ梅秋ハ萩を用ゆ　枝ニ四季ニ応
咲く花ニてしめてを結ひの也　唐土ハ鳥を枝の正面ニて手を結
是我朝ハ春を初花として春ハ唐土ハ春咲を先
枝とてはをおもて其中ニ蕾を枝の時季[redacted]用ゆ

方ハ悉く其趣ありしさて梅花を四時に咲といふなれ
夜ハ深山幽谷にも餘年に隠て初音の時咲き梅ハ八朔梅
なとゝて中秋晩秋のあて咲くものを多ハ分論其梅とて留
内に咲くさされハ梅を四時に成りて咲くものし　紅葉を秋
のみ称しを言ふも植物の類ひハ深山より早く紅葉してまろし
楓樗其葉の紅葉ハ深くさりくりとそれとも多日に垣て
とさされハ正月とりとはまハ晩秋楓紅の時なれとも空ろ
く紅葉を愛でるき也梅の作り枝に色と作るてまいりて見之
梅乃作り枝とは色紙の事なし此時葉草中称なれハ大内の
作り花ことをいひしなるし　中将も都におゐて庭の花の折り
なとをもて作りし作之まいらせるを其作り枝に色紙をなす
意の家の秘説也

△日を推む君か為にと　一三九句葉草の為忠仁公ハ主君
なれハなるたのむともあり　三句めより下へ流て見て人に
あてい折る花を得しも日をねとらに雑子をとくてよめり
折る花とハ普通にも梅の枝さまれとも夜に見て色
梅乃なるき出きしも日をねとハ四時を貴の句之先ハ梅を
四時に賞られ咲る所のものなれハかく詠せしなとさん
かく詠しに忠仁公を祝せしまでし此分古今第十七教を
とよるゝ人をしれとはり五十字ありまことなきと引て左り
此註に忠仁公とあり忠仁公の詠草なとに問合とみえ題
入ませまるれともあるし但し忠仁公の家にて天子の御方に
よみのへしとるハ時を五文字ありけきとあらてハかう
意のまのるまんにて面白し此のあらにて葉草此為にて

然ルに口ゟ出るものを以て風五文字ニ入る事成さるものなりとて振
高きと甚て嘉情ある一天子への事なり物ニ一ヶ様の
事に而もとたくる事歌屋の至極なるへし

△おかしがりのありて　此紛嘆息するものをかもしれこと

△使ニ禄出りけり　禄ハ時ニよりかけものも有又金銭などいて料足出てかりけるもあり

△鳥と人の許ニ贈る物ニて因出る時も又人と奇走となるニも
雉子ハきたりのミ又雲雀ハ句論し雁鴨風とつかふハ凡果也
るまい上据（かこかゑ）ニもて用ひられまじき事也

右鷹始終一部遂る事也

一九十九段 右近の馬場の日おりの日

△玄 毎年五月に競馬ありとて左右の近衛の二ツ
つにわかれてうちあひけるに左近乃方にてたがひ四日ハ右を左
ねりてたがひ五日ハ左近にてまてたがひ六日ハ右近の方にてつがひ
し是を日おりの日といふ也まてたがひのつぎに舎人(トネリ)とも騎れ
走りを引おりてまゐる也とふにひおりといふ也ゆゑてはひひも同し装
束なれとも也されハそと儀式ありしかれハまてたがひとひおり
といふ賀茂の競馬ハ是によりてとして競する也職掌(シキジヨウ)を用る
がごとし

△ひおりハ引おれと略しける詞也右近の馬場ハ今の北野の南
勿論 但し拾芥抄に一条京極の東を右近馬場と云を
と相書写の異本可勘 後成恩寺殿一禅定 右近の

馬場に乙殿屋(ヨトゞヤ)とて近衛の中将見物せる所あり 業
平おもひやる所にきてたの車をとゞめられより所にしる
とみる 但しそれハ狂言にてよくもみえみべし又ゝと詠こ
かゝれるいゝと覚ゆるとゝ大和物語には其日中将相
見ゐにて見えたりとはひきれたり (用之)
拾ヲ古今にあって秘決之口伝一説を以ハ五月五日に日を
下(ヒロ)しまりて諸病殺を除(ヨケ)る為にありて此日を日下(ヒヨリ)
の日といふとも是ハ五月五日の朝起て東方に向って
息をふく [illegible]神有て此ゝ所の気を以ての厄病を
なりて人是にかゝりて悩乱するとも是神代に素盞
嗚尊根の国に至りましては禍を以て五月五日の朝東方
に向つて悪気を吐たまふ其の息より小蝿(サバヘ)なす[illegible]螢(ホタル)荒神(カヤクカミ)

ヤラフハ
ハラフし

なといふ邪神となりて宇宙を横行し人民を悩ハし疫病
をうくるは皆悪神の所為なれバさる五月六月厄月にて
此邪神横行の時也と佩ふによりて諸社において夜祓を
法祓なと(やらこ)を行ひてさく此厄神をやらんとて天津日を卸し
なまりて此陰厄のおそれと比卞(ヒカリ)の日といふと賀茂の泰憲の
一傳なり天津日をさへしむるといふも此日天照大神を下卸し奉
るしむる賀茂社家の傳とある説で當底に用る
師説ム云一説 むね説の因云の語なるらし此説を底用之
但しむる古今に於て秘説也此ひとる昔のうちなる今
爰に此[redacted]裲といふりの絶てなき也世にある人所し後鳥羽
院の御時にさしくも此る絡て競てはありし此時代まで
此ひおりのるれたりしを人競ふ事ひるされる哉

茂の競馬も五月朔日と揚つらしるはすなハちのことき
さて元和の時より五月朔日の騎へにて五月五日ハ左近の荒
手番と四日ハ右近の騎にてなびひし此五月ハ左右の近衛府
の被官の侍の試みに騎ずる也るによりて試に騎といふ事
にて暮れよりもといふなし
五月五日六日ハ左右の近衛府に番也此日に左右の近衛の将曹(シヤウゾウ)、
将監(シヤウゲン)、府生(フジヤウ)、あといふ官人の騎乗ることを御て衆ぶひまて
衆ぶひといふ

△
裲(カケ)ハ今世の麻布又ハたしれどいまだ知らずことのなとみし
衆やいかにきしめきなりけるかし世にかかるまきもの上古ハ
着衣(衣)とりちのうたり也代ハ
蠻衣(バンエ) 班衣(ハンエ)とも用ひらるる蠻衣ハ松生絹也賀茂の葵祭(アフヒマツリ)れ

△
なとにうへの楽人諸ゝして老懸を冠して此裲襠を着
せし常之装束の色葡萄色はふとく色と紺色ともいふ
し■赤色におーくろうけさる色にくちたる色のさうき様
なり色之俗にぶだうといふ白しき色にぶだう色も
左近衛方は右近衛方をさくさいふ 紋ハ大紋にして
熊或ハ獅子などを付たり いつれも大きくして付るなり
龍鳳凰のやうのものなり だん衣も褐もうきぬ或は
水干(スイカン)などの類はよろしきものは褐にも袍(ヒ)といふ
なり 今世制衣せるてうきぬに似たし その褐の袍といふものハ袍の裾(キヨ)
のごとく長く後に垂てものなるをそれを去る由の目
引(ヒキ)折(オリ)て着る故被(ヒ)折(ヨリ)の目といふなり
極大事なり 秘決といふ事也 被を引折る折様に口伝有

■
依て左三巴ノ紋は是なり 天子の御紋なり 天下に
ハ不用御紋なり

なり付るなり 其折様左近衛の方ハ三ツ巴は飾に引折るなり
又右近衛の方ハ二ツ巴の形に折るなり 是れ極めて古今集に
在ることも聞るなり 今世も舞楽の幌屋の幕にも
又ハ大太鼓の紋(モン)にも左方ハ三巴右方ハ二巴なり 是れ古実なり
巴ハ天子の御紋なり 當代も菊桐の紋を用ひられども本朝
古来より天子の御紋ハ此二巴三巴の定式なり 菊桐ハ表向
の御紋也 是も此義に依れるなり
あるに依て拝ひみを只いふ也 其余拝ひに掛(カケ)ちの袍と
引折るなり

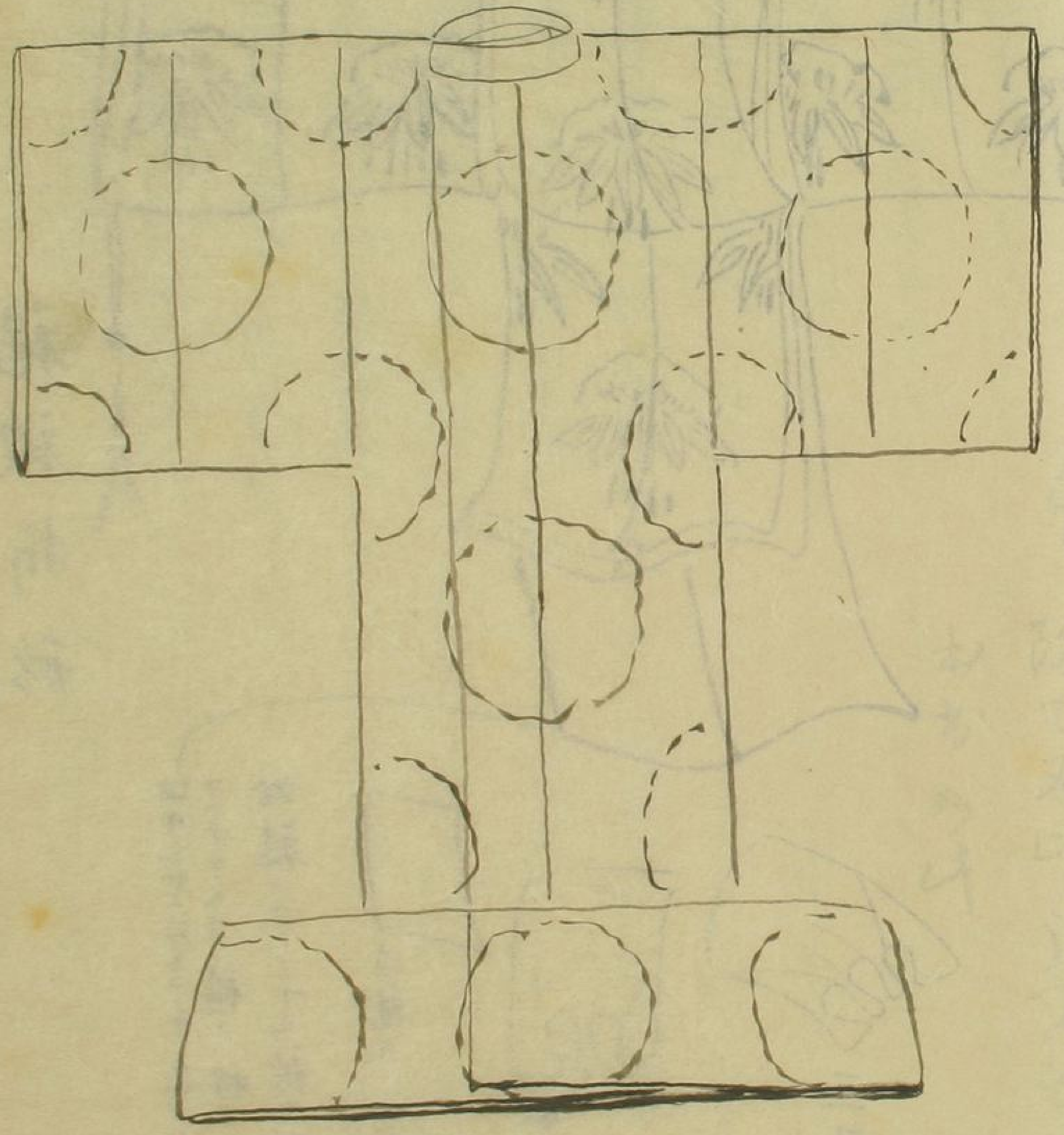
△
そめ色にする海の緑青(ミカヒ)といふ物にして染出したる人その空
いふもの取付褐の事と称する人もそのものを笑き
事にて候わハ古来顔に志す事のうちとよむ事への

あとにうへの楽人請るして老懸を冠して蛮絵衣を着
まる事也蛮絵衣の名蒲萄(ブドウ)色はふかく色と鈍色(ニブイロ)といふ
し[redacted]赤色におしくろみたる色也くちば色のやうき掻れ
あり色也俗にいふえびぞめといふは白しき色也ぶどう色は
左近衛方也　右近衛方はこくさいろ也　紋は大紋にして
熊或は獅子なんどを付る也いつれも大きくして付る也又
龍鳳凰のやうのもの也　だん衣は裲襠のりきぬ或は
水干(スイカン)なとの類のものにてきるもの也此裲襠にも袍(ヒ)といふ袖
ありて（今世制衣せられたるものにはきなし）其裲襠の袍といふものは袍の裾(キヨ)
のことくもなく後に垂てありてそのはしをまへにあまりの目
引折(ヒキオリ)て着る故に被(ヒ)引(ヨリ)折の目といふ也
極大事也秘決といふ事ども此被を引折て折様に口伝有
秘

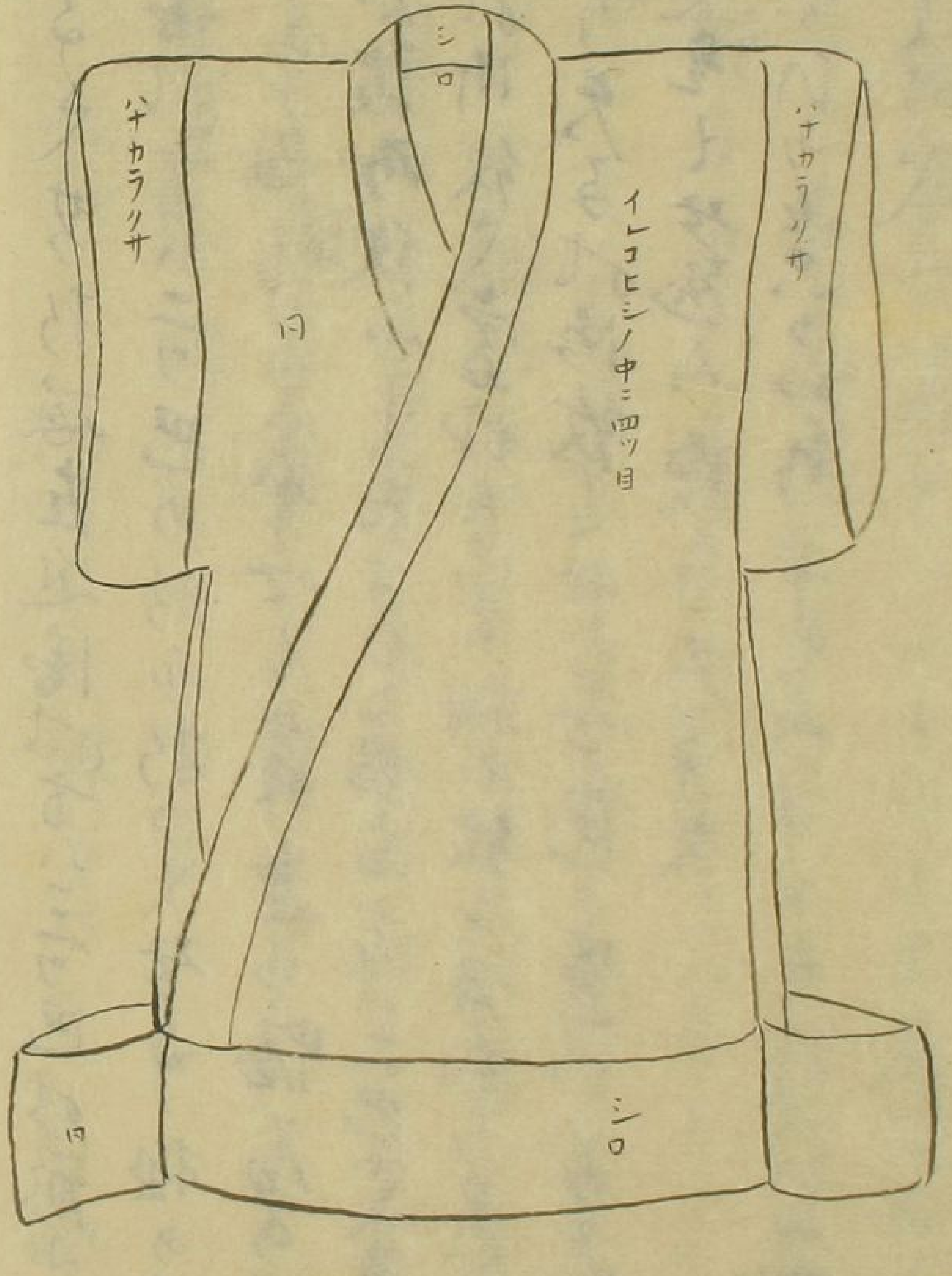
事ありける也　其折様左近衛の方は三ツ巴の形に引折也又
右近衛の方は二ツ巴の形に折也　其事極めて古今集にも
大事とも云へる也　今世も舞楽の幌屋の幕にも
又は太鼓の紋(モン)にも左方は三巴右方は二巴也　是古実也
巴は天子の御紋也　当代も菊桐の紋を用ひられけれとも本朝
古来より天子の御紋は二巴三巴の定式也　菊桐は表向
の御紋也是も其證に依る事なり
あるてはながれにはいふ也ながれてもはなれにきつの袍と
引折りける也

△
そめ色にする海の鹿子(シカコ)といふにより染出したる人をあめ坐
といふものはりけ裲襠のことを作るかる人はそのものを笑ふ
さてにそうりきわは古来論にもまさしくのうちとよむ人の

直衣（ナヲシ）



半臂（ハンピ）圖



右管ちらひのるさ夫婦のちとそあ深の名之今世ちらん
そあかちん家とるてのいるさされを夫婦のち深ともち
いろともるさ出福の袍れのるハ極秘傳の事也

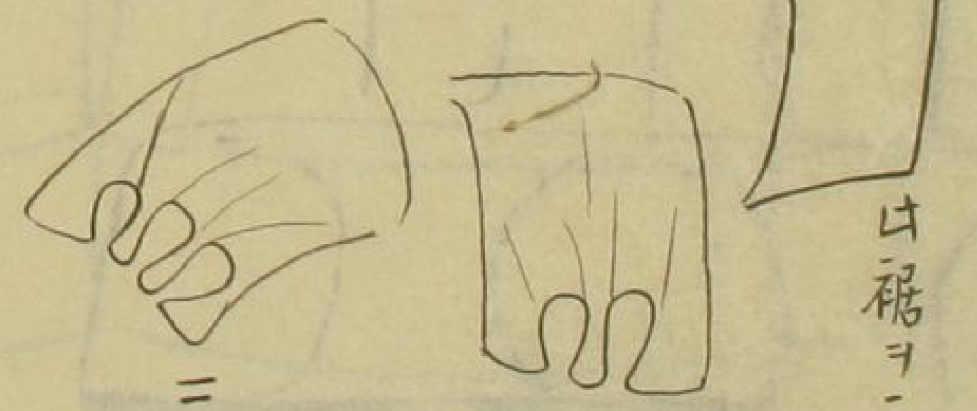
狩衣

褔被折形

此ウシロニ引下ゲテ長ク垂ルモノ袍ノ裾ノコトクナルカ 褔ノ被ト云物ニ等シト也

此裾ノコトクナル被ヲ引折ルニ秘傳アリ

此折形カ大口決也可秘々



三巴ハ如此

引折ルコト

如此■引折ルコト

此裾ヲ二巴形ニ折ルトハ

此書此図をよみし寫語ル所

候て又此ニうつしそものと

此お如件

一 後涼殿のはさまを渡りければあるやんごとなき人の御局より忘れ
草を忍ぶ草とやいふとていださせ給へりければ給はりて

忘れ草生ふる野辺とは見るらめどこはしのぶなり後も頼まん

清涼殿の後ロにあれば後涼殿と云ふ　清涼殿の西にある殿　拾芥
後註にも清涼殿のうしろ北西にある殿といふ　●白御座(ヒノヲマシ) 又大床子(ダイシャウジ)にいふ
師説後涼殿ハ天子常の御にあらず 其居御殿なり●
夜御殿(ヨルノヲトヾ) 其外皆清涼殿のうちにあるなり　後涼殿ハ其うしろにあ
る殿也 其を後涼殿(コウロウデン)と唱ふる也 ここはあまたでんとはなくだる也
うといへば年ごろ門出入あそびといふべきところとよむなり
古実に清涼殿とは又らうとはなくてたゞせいりやうでんとよむ也
いづれも此ところ大かた古実に此清涼殿の北に天上(テンジャウ)北間(マ)と

いふ孫間(ゴ)むかしハ有しぞ今ハ後涼殿なき由へ上の間(ニ)計べし
後涼殿ハ上部(ウヘワニ)なる女の住所也后の一の女御の所といふをも入れてつかふ
女御更衣殿へされハ次の文(フン)のはじめに後涼殿へも人々なき御局と有
此御局に御をもてる乃おとゞの口すさみにまうけ(ウ)られたる所なり其
正后の住給ふ所也此後涼殿のさぶらふを渡らるる也さぶらふとは間と
書て清涼殿と後涼殿の間(アイダ)の廊なりと御渡りの名也渡るとは
行かよふ所といふなり又正妃女御内侍などいふやん事なき
人々の住給ふ所なれハ恐べく男の行かよふべき所ならぬを
此業平ハ父母親王達といひ忠仁公の孫子にも有れなれハ今梅
乃所までもゆるされて行かよふなるべし　此やん事なき人とは
誰とも知らずとおほかたにあるべし　実ハ二条后の事なるべし
此段をとり用ひて源氏の桐つぼ乃巻を書るゝ也　桐壺の更に

桐壺の更衣を帝てうたいかしくて上なき女御なとの后房
をおさへて此更衣を寵しめのしたまふ弘徽殿の后なとのねたみ
の女御なとの嫉妬うらみをかけていろいろとなやまされ給ふ更衣
病しくなりゆひしくて更衣の里へ女御なとよりはなさ給ふの人
あるとてうゆいの餘りなきめ[redacted]してもてなしゆひしかて
給ふ帝の業ありにきまりゆかれみかとの法誤りて此桐壺の世かり乃は
多りしものまり此物語乃名と合させて世の哀の事れ書きとなの
趣此所の秘決也

一 忘れ草をきのふ草ともいふと
業平のきゝのかき所がゝ問ふる心いかにも忘れぬる人を任せ我ふよりて
言ふことは侍りて答へらへ人とぞ此忘れ草は思ふ草は一名
とけ之てり是二条の后は昔乃妹と思ひ出してありし平は

久しく中絶しされば口ゝゝゝ忘れつる人されとも衣をもさゝはすり比べ
見かくれとへし程に今も忘れる人を問ひ侍て中く忘れぬも安く
とはれ答へぬとや分かてありや年の名を付ても忘れ草を出て
志賀種とき草の草と云その月をいふなる人とて業平の名を付し人と
て空おもかれしてうち出なふ事あり平の空おもかれして思ふとあ
之きそと我人てそのうちる詞之比詞ふより忘れさき志のふくさ
一草二名といふ説あれども忘れ草と忘れ草の事は
忘れ草は忍とれくさ思ふ草と忍ぶくさ名ある乃種類を忘れ草と
此段の比詞をりけると又業平は大分とも中ともひて一草二名と名付
さらに忘れ草の説は住吉社家の説よろし比説を傳へ是は住
吉の岸乃忘れ草の傳へ世上通用の忘草といふ也萱草の事
秘説とせり忘れ草は住吉の岸にと云ふは忘れ草は口伝の趣

住吉の忘草といふは住吉の松のこと是秘中の秘なり

新古今十九
神祇

いかばかり年は経ねども住の江の松ぞふたゝび生ひかはりぬる

此歌は詣づる人の住吉にまうでて人の昔は何とおもふらんと住の江の

松はいくよへぬらん とよみてあまたの池によりみえし所

此住吉の御神の御神詠の名を神功皇后三韓をせめ給ふ時の後御津国に

勧請せさせ給ひ其後いまより住吉へ祈としとなる一此御神詠を

以て住吉の忘草の忘料といふは松を本様とする當流家に用ゆる

口伝説也

一 なかんづくて 業平此草を植栽してよめるなり

一 忘草種に成る人とは

此哥は伊勢物語より忘れ草を忘草と云ふとて昔も世に忘れ多くて

とねば此をそのきをうけてよみ侍らうこと 此伊勢物語のかく云み一はそこ

にはあらし物ぞと言ふ人あれど今昔にもれなりやと問ふが如く忘草を

しても忘ふと答ふるあとの名にてかく忘れ草を出て思ふ草かとお

ぼあきて尋ねたると業平此草を植ゑて忘れ草とつけて即ちその

名をとりひしいで答へ侍るなりし

哥の心 忘れ草植ゆる人とは見るあと とは生ける時人とよみし君を

此後深草殿の忘るゝとて之御神之此後深草殿のかたより今は忘れくさの

生ける時人とは忘れもしそこにて又ある方の人とさして忘れ

草の生ける所の時人とはこれをよみたれとも人あれとも此心を名に

たゝてらう見給ふ他のことゝ互に心あまた忘れたる人やに

思ひてみえけれ今かく忘れ草と見えて其の草とふと植ゑふ

まゐりし御出ありしさきは今も深心のまゝにされと忘れをおひ

かの事とさはらぬよりまことに思ひて答へしれくてあれは

記す事小君のてうしあはされし浮舟の巻とかきて君のことはすへて見給
は此御かたへは浮舟の巻の如く此條も猶ことわりなきことくなんとあ
れハ此ハ其のふかきとは先を云れ其事にて第一君ふかきこと
思ふ事を御らうしおとに此條てるかの事へし
見るゝあとく思ふることてあるゝあとくいふへきされは此詞の心を此女
見るしあるもの又かくる事下にあられしこれをといふ人をあて云は
ふ像き情のこよる猶物有味し一齣両端にてもあるへき所に
たく紫ふかくとつけて云ま之物まくきるゝ　此人といふ字云れ
其まりの縁語あそよりて生する種と云ゝのて此篇の字にてよく見
面白しと

一 うたハよまざりけれど世中を思ひしりたりけり あてなる女の尼になりて世の中を思ひ倦(ウン)じて京にもあらずはるかなる山里に住けり もとしぞくなりければよみてやりける

そむくとて雲にはのらぬものなれど世の憂事(こと)ぞよそになるてふ

となんいひやりける 斎宮の宮也

△ うたはよまざりけれど此詞奇妙也 凡うたよむ人ハ己に達せんと思ハヾ先人を達し さてうたよむも道を達せんと専に心がくる事肝要也 仁義の道にも達せんとあるれバ先令達(セ)人(ヲ)と云ふの心也 是此心み欲人の心得也 されバ前人のなき此方をはなれ○として大概ある難きを尽くすとも心を面白き詞を拵てよむ人の心也 人倫の法話に志さるれバ書く

△ 世中を思ひしりたりけり 此心を知[redacted]みいふごとく 仁義の道五常の道をしる事を知りとよむ人のことくされバ心をよく○として大学に中の有様(アラマシ)を知りたる也

あてなる女の尼になりて 此女尼とは斎宮ゝ斎宮におはしまし時業平の容貌に心うつされて身を汚し名を流して斎宮をとりおかれて今かく尼となりたまひしさ

△ 世の中を思ひ倦じて 世ハ人の世にはいなる高貴卑賤の品おほく各その分々の境界に随ひて相に世をとうしと思ふ侍るものぞ 此尼もいせにて物うきすがたかく世をうしと思ふ様となりてたそくも尼になりあへる身なくしも思ひうんじたるとはあの見の法説に出情の字めぐみとありえしよりおひ情けの義世とうしむ者の心とぞ文化の字めぐみしも有とぞ

△京にてはみやこの外の山里に
かく世をのかれる都ちかく有ても住せんとてみやこの外の山さとに
かくれて住むとて世のかれし山に住て世をのかれしとされも一家のはなち
よりして世の人乃とかくといはさはりをいふをおそれて都の人に
交らふにも西東北にみゆる人の構なる山里に住なれるのなりし
そのゝ外山里とはいはれとも西山の東山の北山の小野なとはいふにや山里とてかきて
不するとしものゝ外のさ里あ所はいはさとそるの外の山さとてある
なるへし

△ひとつゝくありの後は親族のきとにうちる世にて遠
ともも世をさけとてしわか通ふる世のえてりわれは親族
なとのやうに世上へは立みを行かぬひせゝそこ都とはなれし
世上へ係りかゝら族の氏族とハ禮記ニ曰親族者謂

従七世祖父母已来所有眷属名ヲ親族ト親族ト書て万葉にはやからと
よめり

師説 抽して世をのかるゝ一男のせうそこなと流されたる 係ある事也
されたれともく文とかりうけとりとてやうさ係りなれとも此時
は世の事は親族などはやうにおもひあまりて書てむしなすとおもひ
出て世の事をいふなるへし

△そむくとて雲にはのらぬものなれと 此歌劉安仙の古事 服ニ
丹薬ヲ上天せしことを併せてその古事ハ不用之そむくとてとは世を
そむくとてのかくの世をそむくとは世塵の境をそ離れて山に住
やうの人の世事を出て心清くなるとそもむかし劉安仙のこのこく
仙術も行はれはさのみ雲にてのり處にて御きたの御のなかれは雲
にも故郷くるとふりにて山里とても世界をとへなれるといふは

ねがはしき天上をせさるものなれどもさ浮かうき宗旨にあたりあなた
うき世のことはたゞをはなしめされ忘れしやすらんうらみ侍りき
といふ句也
ものなれどもいふは　物に付きもとものゝ句也　下の句よくよく考へてみ
とはよくよくにならとふの句也　諸てみえし世のうつろふにしたがふ
なりと云ざしてよそにあると　いふなれば世をそむきて山に入りし
て住うらん人ぞ世のうきうきときくも心安くてあらんかう
山しさとよきと句の久しき也　此てやとふてふその又根のたゝるく
よくく句をつけてしらべし

△此前の句あはんかんの古きを傳へてよろしき下の句見ければ
堅執の心より世をそむれぬとうらやしくてあるべく
又あはれといふやうなり　旅羽俗者は意し此さきの句をよく見て俗者の[illegible]にて

カズマエラレヌ
人ニアルヲトカ
リヒトツヽ

如斯にあり年月ひやうれうと云しまり

△斯家の家也　是春秋の文法也例の筆誅也
此後いさりのまりといふ本（ホン）の心　其乃考訓になる後に斯家業
平にあはせさに功をやちより世にうぞまへられを仁になりあふし在家
なりは　山世實の為也　其乃考訓に其乃後とくとんと為すうす
味ふへき後也

一　一説にとこそくなりられはよきそ　やり為の心といふなり　雲には
ぬの家にみけて見　此前の事ってふとふみけて　となんひおやまりと
いふ文を全篇なり年の句にしてうらふ云俳のり
ことは斉家生業年代氏族にはあり孫ともいせ二その心ぞ
まゐて高階の師尚ともうけなりしといふことの家要あれ
中なれぬ今かくそのことを斉家の一生れんある年ちの福となりて

かく人かしこきりあハぬ事にて山こもりしなふるもとも是いせまて
の蛙よりおこりしるなるハふかきとくせなることされハその心を
合せてなしなくかくは専ふ人の名ふ専ふと奇玄の一家の事に書
中まにそりとて帰へさて一首を今かく山さとふ入こもりて浮世ふ
そり入なふと菩提仏ならしてのなすふ近ろ衣の名なれのかく為
あいしも遁ふまといてよりのなすれれ世をそむくとて衆ふ
ものゝ心と御ことと云ふ仏術もしえあふまし只れハいと云ふ名の
こゝかり人をせ生をなのましさくふ入文者を中宮しさりなる
さもとくに山といりこすふくハ実の世のゝ心ねるもよそ年
なりあれいんなくて世をいとへ世の心ねるれよそふみ洒とい ふ為
是ハさもおんとの名もかくいひて奇玄の心をいひたる也まつい
此への蛙を今をえれなつりたる又大そかくなりのなりてもにあふ

口を述ぬかぬ也との庭の心ふ其おもとを奪ら心さいすりともなる
是ありし事の奇玄みんなをわらんやおの料と　ともく人いひやせう
世をいふと作者の詞かやなる事のころくのるとなん是は
其心ふて其事の奇玄とけ心らんの本ろふらむ文殊之　此
又事ら一段面白し是字よに其段の大るといふへし

百十七段

一おほんかみげぎやうし給ひて

△みかど住吉に行幸し給ひけり　此みかどは文徳帝也天安元年

行幸と有り　國史にも實録にも見へず次されとも其ならるへし

△我見ても久しくなりぬ住吉の　古今十七よみ人しらず此哥

文徳天皇の御製と云説あれども不用之　此ものかたりにては業

平よみたる也此哥の心ハ行幸の時の御哥也　只松を

師説　姫の字心なし只松の名なり

松を業平にて我をと云段なくしてなれハいく代へぬらんとて

△御神げぎやうしたまひて　現形也神祇の形をあらはしたまふ也　住吉の

神も御形をあらはして形をあらはしたまふ神の御事也住吉の神は影向し給ふ事

とへて後の世まで見ゆる事也子細有之　和哥の道をまもる

△むつましと君は白浪瑞籬の　歌口訣有

むつましと君はしらなみしるらんと　新古今神祇に入る哥也　左の詞に

いせものがたりに行幸の時御神げぎやうしたまひてとて有り

撰集にはむつましとそへたる也名哥也集にはむつましと君はしらなみといふ也

みづがきとは神のかきをいふ也久しきといはん枕詞也君はしらなみ

とはしらぬとの心也瞬しとも君はしらなみかなとの心也

みづがきの久しき世よりとは其社の垣の久しきといふ也

「乙女子が袖ふる山のみづがきの久しき世より思ひそめてき」此哥

師説　みづがきの久しきといはん料也神社なれハ也君はしらなみ

とは君がはるかのむかしよりいはひそめてきとはいはひそめてきとは

知らぬ住吉三神の法神も天照太神の御先祖之国をまもり

給ふ住吉の御神なれハ住吉四所の口伝有之さハ君はしらなみ

とそ

此段住吉四所の本義ハ口授也其口授傳受ハ左の次

本社一之宮　天照太神宮　相殿　神功皇后　武内宿根

二之社　阪防明神　白髭明神　一説ニ阪防明神相殿　大己貴命　事代主命

三之社　上表男命　中筒男命　底筒男命　此三神　トモニ住吉ノ御神ト申スへし

住吉ハ右三社として住吉の神社と定らるへし

四之社　玉津嶋明神也

此四の社玉津嶋御鎮座なりしは中院二条ノ為世卿ニ委くなし有て玉津嶋の海神と住吉四所のうちへ御鎮座ありしる事凡四百餘年はかりになる也以上此段の口授也又四社の事ともの子細口授神功皇后三韓退治の御時此海船の本陣なりし故天照太神宮を中宮に御鎮座ありて此おほしめし皇后ト武内宿根侍坐有りしと甚もて本社一の宮にまつりて其御鎮座也　二ノ社ハ船の主也此トモの守護にて阪防と白髭と守護し給ひし也其所を摸して二の神社に御鎮座也　三の神社は此海退治の時の海船の舳先に此して住吉三所の海神御鎮座也其表皆神功皇后の三韓平均し給ひし其陽此時海船中其樣を是ニ社にそのまゝうつして御鎮座有しるなり又住吉の海神其社にて和歌の祖神とすること此等

メナシカダマニ
メノスカヌ
ツゴシ

神も和歌の道をもてしたまふ事は猶ふかき秘説ある事也
家に口伝とて申し出さるゝ住吉四所の神社御請の様々無辺乃
口伝ある故其ハ口伝の趣と書て出すし 又住吉は末社に大海神と
いへる社有 是も御請義秘決也 無御請ハ一神ハ磯良神
神功皇后 三韓退治ノ時。干珠満珠ヲ捧し神之海中ニ住玉フ神三テ
るとち財外見たまひけれハ古き事と恥て出ぬかたりしとそいふ乃
干珠満珠を皇后に捧ケ給へるとて殿ありけりしとそ
又一神ハ塩筒翁（シホツヽノムチ） 或ハ塩[redacted]路翁氏といふ是は浙神也
神代紀付亦火火出見命釣針を尋ねて海の底時此命を尋ねしたま
ふのせまりて磯良ノ神と塩筒翁ともに海上守護せし神
大海ハ此二神相殿ニて御請也
此住吉四社の義に付ておふに住吉社家の傳有りしとそ 又こんれ有りし

住吉社家にも此太長と称ふるは何か上に出す事物あるも有りしるに

右件之限ニハ伊勢拘諸一般之口伝之労ニ他見ある事
悪てくさ為ものゝ也 函底に深く納め免とくへきるもの也

源氏物語三箇口決

一宿直物之帯

此口決とハ本文面ハ秘事也　其帯縫様并ニ寸法等
古来制法今人さらに知る事なし　此一件を以此ものゝさうし秘
事ともに隠す之此帯製しる形状寄因山城和尚師
春山長老法傳授有しよし　実花葉正鯤侍あり
而已文年間和尚示和尚示
帯　これハ此とのゐものゝ帯と響法因器と之　宿直もの帯
甚大きかりて好き帯は小さきよし　只大小のちがひのみなりと云也

早稲田大学図書

夕顔の巻

一揚名介

此事眠江入楚　夕顔巻ニ　也足軒素然秘事と云事しる殿[redacted]可尓よし師説伝りし也　蒔井頼輝子ニ乞て住吉河文庫ニ入しらら逸し眠江入楚ヲ借して披見するに此一事ハ九条殿御家其太事にして必他家ニ知らるへきよし語られけり但シ此眠江入楚は寫取りて家の本とせし写きと通例なりと二通りありよし師説ありし也　作者の本と学習通例の本も在之といへし

△眠江入楚曰　惟光と名させてと云所の註ニ云　河竹取うつほ隠蔵なとの乃古物語ニも多く実名を顕はせり此等の名の中は名字を読るヲ憚惟光良清ともさし平生は其ナ(古ナラ)ヲ文武侍斗之若子細有ル歟中惟光良清ハ揚名ノ介中文にも其名有りしくよし云る頻

九條右丞相記云天暦十一年三月廿日着南闕文範朝臣申惟光朝臣可為所监之由其詞次第相違ト云々此外寛弘比其名字如何とあり

系図　藤原惟光　寛弘元年正月召名　任陸奥介同六年三月廿日任中務少輔

平惟光　長保六年正月廿八日任右衛門少尉同七年二月十六日右近将監　長和六年正月九日補蔵人見権記

文藏是光　寛弘元十一七任越前大掾

菅井是光　寛弘二二廿任因幡大目

藤井是光　寛弘三十廿任美濃大目左衛門督年給

此内以上三人ハ作名歟　又御堂関白申文良清惟光申揚名介云々

△●揚名介ハ諸國之介也源惟之人也　口傳云常陸國上総國上野國三ケ國ノ大守者親王弘外不任之然間以上以三ケ国介ヲ為揚名與是秘中ノ本事也

満云●今ノ説右ノ事ニ親王ノ被料國介ナル二ヘ揚名ノ名有事ハ介ニ十九人ノ右規模也

此説家ノ正説也

ゐのこの事也

一 袮のこの餅

此事宣安師説を尋られしは二ツが一ツ　三ツが一ツといふ原
清濁に付き口授有る事によし此法有りし也炮炙説に曰
子の子亥の子と十二支の子の事につきて此事口授有るよし
師説伝りしとぞ　満　此二ケ条の極秘得されハかくとも
西傳授しるし不去付三ツか一ツの事は宣安の説と炮炙
の説打混して其趣を聚得もへまる事頗採尋あるへし

○

此本説與記之

一 さし竹の大宮人
さす竹の大宮人

さし竹とは大宮人の枕詞也 但し是は奈良の朝乃
時帝都の地境を定め清竹を植置けるにしあひしとかされハ此竹の
内を帝都とし竹外を洛外とすとかされハ帝都九重の内を
いふ也（洛中）されば竹の大宮人とも刺サス竹の大宮人とも作るとぞ
又佐保のうち佐保川なといふ也此刺ス所の竹より内といふ
なれハ刺竹とは竹をさし廻らせし謂ハ竹を棹竿なといふハ
其竿の内ハ九重の禁闕也故に此竹の通る川をたりめくるさ
辺りと佐保川とはいふとぞ

議 按に今の平安城にも又て東西南北に竹を植る迄ては此竹の
内を洛中とし竹の外を洛外とするも此事都の古例と以テ
あるへし其表の川辺にての佐保を称してなりや

夕の付竹
一 つるうちはてさえん 欠
つるうちとは鳴弦メイゲン也 鳴弦とは射藝シャゲイの家に蟇目ヒキメとて
死霊魔マ魅の祟を傳あり是を鳴弦の傳とて彼家の嫡子
相傳の術と云傳ふるに此もののふら鳴弦のことハ是射藝
家の傳の鳴弦のことにてはなし 射藝も唐より傳り
なるとも日本の射藝は神代よりかはりて天のかご弓
天のはゝ矢なと所持あれしより神代也に所有也此物語も
鳴弦のことハ是天津神代より傳授の神傳神秘の鳴弦
此鳴弦の奥知人なし 委クハ神説蟇目口傳抄ト云書ニ此蟇目ノ
大事ハ侍るへし 此事師長老没後 実花葉正鼎子被申
ることく長老存生ニ此鳴弦のことてより見えたるとのことも爰にて
巻の大事なりとぞ

ゆふひ乃書

一 祢のこもち

源の文中

さても子乃こはいくつかつかうまつらすべう侍らんと

あるは亥の子を御らんじしに亥の子乃日の次の日なれ

ば新枕也　古へよりの名目にはわざと菊の宴会にてゟス

あるべし

垂花ニ云　亥の日は標の日なれば　かくいへり　数定と云々　源氏さき

つかふまつるなどにおもむきぬ之と云々

三日の夜のもちゐ　三ケ一なるべきものより三ケの大事也

殊若秘すと云々　河海一説ニ曰　三ケの夜の餅ハ廿七の事乃杖と

調進を源とし　誓ノ上十四ヶなれハ十と六ト並て甚餘を四ツ

といふんとて之四ツの数多四ニといふをたんぢて二ツ一といふれ

あるひとも有賀殿室なるもの取りに惟光ハくれなと尋子
中納言なりしか姥ノ上ハ齡を惟光知りきなるなと待賢門院
御入内ハ元永二年の夜の餅の記 徳大寺左府ノ記 紫檀筥(シタンノハコ)
文鶴(モンツル)ノ丸 摺貝ヲ 普通の硯筥より大きさもなるなと 銀ノ小器三ツニ白色ノ
餅ノ丸きを御歯固(ハガタメ)の物ノ具ニ盛りて余りて小三ツ小同じ扨小
うつくしきなるなと 餝着の臺を設[redacted]小て 御洲(ス)[redacted]濱(ハマ)を作
りて鶴を立てなる小 餝箸をなとをゆゑさして 洲濱の…ゆれし小
立出ならしとそ

拾遺 三日ハよりもちゐをくへどしるしありけれはよどのにたてこつるらし
此餅の様なし イカヽ
花鳥余情云 三ヶ二を諸神小三杯一具ハ公といふを謂し 昔ハ
此餅四杯小盛りと成ゆ之ノ秘説有なる小記るなしとそ

嫁娶ハ三日の夜小あたる夜小枕がみ小とくろをそ先ハよめとなるそ
人乃死きる時小は安倍小先餅を供ふなるとあらそれと枕机
いふり二夜小なことなしあとへハ女乃男のりと嫁入して八二夜毎
ハ数へ給あるまきなれハ 借老同穴ハ契と居付てとつぐといふ
なるそ 帰の用なる是女ハ生の家を家と…なるまし
さて餅をもちゐ(用)るも清め小男のりをそて身を終りなる
なし 嫁娶ハ白衣なると…用ひしは…常花かの誘…
十三…ば有もなね小とも笠の…御丁ハうちふさうけ
取りさし入まてとくは三ツルなとね…
ふと云こ
是を清掌殿ハ清娘小小一條院と御年小なりなの一時のるるとこ
長元二 三ヶ二ツ…もとよ…説ありて三ヶの太…ハ一ツ…伝ふこ…

師説 此大事といふ事三ツ歟一ツ 三ツが一ツ 此三方へ清濁二義有
然清濁に付て其義様々なし 二ムツ歟一ツといふ義によれは三ツ
備ふへき歟又一ツ備ふへきぞとの句也 又三ツが一ツといふ義に
よれは三(サン)が一(イチ)の理にて二ムツに定まさるものとその一ツに備ふる
ように也 然清濁二ツ義有此間に秘説あるなり

一 祢のこれりち乃る事

祢のこは[redacted]いふ川つせいろはをへるん二つゝ二ツ为てもゆるし

天暦二年十二月廿日徽子女王入内四種餅盛以銀土器代同
箸一双安同器納螺鈿筥一合

又

天元元年四月一日左大臣頼忠公一女入内 遵子
十二日子始参上殿下同参餅四種盛銀盤同盤置
同銀箸餅上心葉在組 納蒔絵筥
右餅盛四杯例也二ヶ之八四杯与云々
其後 寛治二年正月十九日嫁娶 知足院殿
盛餅三杯被遣螺鈿沃懸地(イツカケチ)ノ筥銀杯三口 洲濱(スハマ)

立銀鶴一双上置銀箸一双

右餅三杯例也

河海抄云待賢門院乃御入内[redacted]の記にも三杯之 三ヶ一を

三杯一具と以て用之

今案此餅昔ハ銀器四杯にありしを中頃より四乃

杯をそへて三杯にそなへしされとも此の後ハ

并に四杯に盛る時分のことなれハ四杯の説をも用ゐ

三ヶ一とは此の杯とおもへる三ヶ一とは源氏の君のとりあへ

たるのあるし

右婚礼の時の佳例なりとおもへし

又祝のこと餅ハ亥の子に寄していの餅にていつきて婚礼

乃祝儀とせしより上ハ子孫繁多の祝義に古来用ひ来れるなり

此の語ハ女乃男婿ニして惟光か影智を覚えぬ事に

書かし也さ源氏乃時ハ未子好すに寄して素姓と

為こたる事に相なりし四説に云伝ふる事之

三ツが一ツ也 歴説をさし

一清祓の解縄之事

此事賀茂之[redacted]社家及住吉社家抔ニて傳受あるよし堂上ニは勿論のこと

解縄寸法　右なひの縄一寸二分　左なひの縄一寸二分　各金(カネ)さしにてのこと

今も賀茂に葵祭ニ勅使賀茂ニて清禊の仮屋ニ入なれ

此解縄の作法をしるして此解縄を取出されて神呪なと進

清祓あるなり　如此所聞食(カクキコシメシ)ト天波

此文ヨリ

此神呪ハ中臣祓の内也　譬言喩段

大津乃辺仁居ル大船乃舳綱解放地

艫綱解放地五

コレ迄ヲ唱テ左右ノ縄ヲ一ツ交ニ引ナルヘシ　神内ニテ

とゆふことを唱へしかりての後此祓の年ことを知ることを大切とせしこと

又解縄の作法もロ傳也

當代百十七代今上之法時　宝暦九年卯六月廿五日於殿

法楽之内
寄神祇　いとなみて神のまもりはうき世のうきたにしける常のとき縄　上冷泉　為村
はらうともけとき　あさのことゝよこゝのへるし

右墨附八十一枚各
二条家御家秘ニシテ至嚴重也然ルヲ百花
庵春山長老道ヲ　中院通茂公ニ受ケ尓
コレヲ春秋庵光瀞師ニ傳フ予瀞左師ノ依
恵ニコレヲ相傳テ函底ニ埋メ々他見脱漏有
ヘカラサル者也

一　たねてふたの事

二　治定してとむる事

三　おさへはめてとむる事

四　うたかひ乃事

五　その字は事

六　ぞとやとちるあつかひ事

七　これらの事

八　やは字乃事

九 めやの事

十 やハる事

十一 かなとめの事

十二 かねてかへる事

十三 係とめる事

十四 志かる事

十五 かハる事

十六 しをの事

十七 かなを休むる事

十八 てにをはハ一首のうちに多く置事

十九 かへなくしてよむよし紀云葉る事

二十 魂を入置てかへる事

廿一 てにくはもとかくれはの事

廿二 をふりよふかふかなふをる事

廿三 云かけてかぞえ清濁の事

廿四 さかろ五音連る事

廿五 にてといふてにをはの事
廿六 してとめの事
廿七 こゝろえの事

一 もにてにをはの事
らんとゝめるうたにうたがひの詞あれば上にもおく文字を
疑ひのてにをはを定る字あるやうにやりどを定めなれど
外に疑ひの詞を定に及ばぬ事あるなりといふは
いかに・いくたび・なと・いづこ・いづれ・たが・か
いかなる・いかに・なぞ・さぞ・いかで
などいふ詞にてとゝむるも
拾遺春巻頭
やも字にてとむる例証歌
春立といふばかりにやみよし野の山もかすみて今朝はみゆらん 忠岑
いかの文字にてとむる証歌
同集
よし野山峯の白雪いつ消て今朝は霞の立かはるらん 重之
いくたびの文字にてとむる証歌
基俊

千載賀
、奥山のやつをの椿君が代にいくたびかげをかへんとすらん

などは文字にてそへぬる詞なり　千里

古今夏
、ありそし花ちるなれなくになどかくしきこえぬらん

いづこは文字にてそへぬる詞なり　深養父

古今夏
、夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらん

いづれの文字にてそへぬる詞なり　忠岑

新古夏
、夏はつる扇と秋の白露といづれかまづはおかんとすらん

たがは文字にてそへぬる詞なり　友則

古今秋上
、秋風に初雁がねぞ聞ゆなるたが玉づさをかけてきつらん

かの文字にてそへぬる詞なり　在原棟梁

同
、秋の野の草のたもとか花すゝきほにいでてまねく袖と見ゆらん

いかの文字にてそへぬる詞なり

新古賀
、山川に菊の下水いかなればながれて人の老をせくらん

続古今
いかにの文字にてそへぬる詞なり　後京極

、池水といかにおもひしは吹かで川なるほどとかはるらん

拾遺冬
なにの文字にてそへぬる詞なり　兼盛

、数ふれば我身につもる年月を送り迎ふと何いそぐらん

古今恋
かはの文字にてそへぬる詞なり　さかゐのひとざね

、大空は恋しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらん

新古哀傷
さこそは文字にてそへぬる詞なり　西行

、なきあとの面影をのみ身にそへてさこそは人の恋しかるらめ

是など心得べき所なり

二

治定してとむる事

思らん、らん、ねん、せん、けん、なん、此類なるべし

忍ばんの詞なり

古今恋三

つれもなくしてを夜[illegible]ぞや人と歎きと忍ばん　源宗于朝臣

みんの詞なり

古今春下

春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふと見ん　好風

ねんの詞なり

拾遺恋三

足引の山鳥の尾のしだり尾のなが〳〵し夜をひとりかもねん　人丸

けんの詞なり

新古賀

しき島や大和しま根も神代より君がためとやかためおきけん　後京極

なんの詞なり

古今六

[illegible]花[illegible]なん　よみ人しらず

三

せんの詞なり

新古秋

小男鹿のいるのゝ薄初尾花いつしか妹が手枕にせん　人丸

右迄みてん[illegible]べし

おさへばかりにてとむる事

是ハかゝりのかへりハなし

はへ、ぞ（ふかき侍り）、よと、に、とて、これらみなとむるぞ

ての詞なり

拾遺神

春日山峰の木のまの月なれば左右にぞ神もまもるらん　[illegible]家
（朱）もまもるらん　或本　依改

にの詞なり

千載秋下

[illegible]の原の[illegible]萩[illegible]の[illegible]に[illegible]　[illegible]

らし・けり・ぬ・ぬらし・と云ふてとまる心がまへらんの
ふべき又らくへと思しと聞らんと申ありて先を次の
心にとてふり組なし候ハヾ
ゝ[illegible]ひりのどかに紀[illegible]白川の流く花の[illegible]　是則
発句を詠捨て余韻の付ける[illegible]も字ハ流く
又さらびの字もかくて其[illegible]先を流れ[illegible]といふ
連歌のたしなみにも何とそと云ふ字を入してとまるとあらひと
次又和歌此字にハ詞を重ざしして心に押ふ[illegible]
此句も聞なりにハいふに静なり心も残くて花の[illegible]
[illegible]にふ[illegible]なり其てふん[illegible]其之[illegible]ひでを流らひざる
かならざし
発句を詠捨てふん此二ケ條といふなり

四　て留の事
是ハ発句のてにをはなり詞の中に心残りて上へ心のかへるてにをは
云ふ也して餘情ありて
先ハ心の残りてとは[illegible]
新古冬
ゝ[illegible]ぬるよの袖がね時雨る枕にあはれこゝちして　俊成
古今春下
ゝ此里に旅ねしぬべし桜花ちりのまがひに家路わすれて　よみ人しらず
上へ心のかへるてにをは
云ふなりして餘情ありて[illegible]
後拾遺賀
ゝ君が代ハ千代に一度ゐる塵の白雲かゝる山となるまで　大江嘉言
此歌も心のこもりくさりも聞えて下にとゝまるにハ情の[illegible]
下にとゝまるへしや
右を以て心得候べし

五　そは字乃事

古語にあまさはる有音(ウソスソ又)は文之たへ人にて有る先證

花をさく　花をこそ　我をまつ　涙を袖にまとひ居

浪そ立川　まぬるとそたつ川　君をこそ　人とそ頼む

君をこそたのまん　月のさそふ

如此よりてのこて伝ふる事は有るを必ず証於外に

き。し。を。弥。し母。しる。　如此文字にて

古今
きの字は語有

我ま衣ルタそれにたる時をへりしそ人をこひし哉

一条
とのの字の語有

あはれふこまでろ母の君なるへきこそ有るとはいかにすむると

月とそみれ小　わをそ友とそひしか

し　は語有

拾の語有

あとの影いかにし吟う湖たし乃有風へしやまを有るを

すちひ伝へんその字あり色をとげだれそといふ

人ぬるあそ　かくなせそ　しなるとそ　此影なるへし

六

そと　やと　のへちゝめかよふ事(此やふるふそハうるひのそと大きや　そといふてふそハ法定し)

秋遠見卿
むさし野の霧ルふてをみり雨ふかしそみくさの法することまる

定家

そみへてるやなりけ取にそのるすりふそそめり

又やとちゝめとりそ

○ありの野に生ぬるかはわたはしれ身体を延へて神をいくらん

是ハやまと哥の風なり これハやの字にかくれたり

又そとのとまふるやう深き口傳あり　よミ人しらず

古今秋上
きのふこそさなへとりしかいつのまにいなはそよきて秋風の ふく

同秋上
折はまづ袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯のなく

新古今春上
かすみなりぬ是ハ白いかりを持也ありとや袖に春風のふく

風のふく　鶯のなく　風そふく　鶯そなく

是ハ四ツともかゝり候哉のとハいふ時に一首のうちに

かゝる字有之しかも一字なくてハならぬ事也

口傳之

古今春上
春来ても花も匂はぬ山里ハものうかる音に鶯そなく　在原棟梁

拾遺
山ふかミ人もかよはぬ峯の月より外に知るらんふく　寂蓮

又はそのぞといふあり この字を入てきくにあらぬ也　律師

新古今雑五
行へもしらぬ人の心をとゞめぬそふたの名残

是ハぞの字をいはずして又そはあはれなるの字のてに

をはあるなり

新古今雑上
さゝ波や冬やとよふ秋山の嵐にたてに川むしのなく　俊成

後撰恋二
我恋のさかひをしらぬ身なれは人のかけ絶　源等

是ハその字をのく字にのぞく事也人ハ其字ありとそ知べし

又　そかよ　是二ツのかハりかハり也　ぞそてとよ

ゞやうふの歌に　又君か心そ　君か心よ

此類し　但この文字にてハてとあるへき又こまか風

とかり　あやなりけるとなるへし

新続古
清滝や　むすふ川波　年ふとも　いく世まてさ　水のあはれそ　家隆

世にそ見えぬへきしたなき　とそ此文字五ケ所なりひと云

蒲云　水のあはれなりとあるの文字入てとまる也　或又あはれをやむ大に嫌之

上に　いく世とあれはうたかひの心あり
又云　下なしてとまるとそあり

続千恋二
恋しあはん家思へと身にそへはいつ迄さりとも清き心なりとも　頼信
辞云　是も下なしにありとも　こゝもにて留めたり

七

凡てそといふてとまる五音なり第四の声にて留る也
ウ　ケ　セ　テ　ネ　ヘ　メ　エ　レ
是也
其そのてにをはの事

又云二宮大納言為世　かゝれとたのみてもこえてもそ　あたらしきにて留る山の井大和

人とこそまて　ありとこそとめ　玉ととそなせ　いつそ神の
それとそこそいへ　かゝそ見まけ

此あいふてとまるひて有る故又たかと問ふ詞にて有るそいつ
答云二件共此事也徒右二件にて全く有るなれとも是ハ続々九下
なれと入てとまるてあそ也是れ相ひこ名にもより

如是五音なりちかそのへてもちゆめても有る之

又云初うひの心にて留め有る

続千恋二
和泉式部
恋しからは人後にとる家人はかはなおもかし世にそこそ恋のひとりをも　かとの題
又云そとりもとある
いつそもの心もあはしけかし身にてそ清き縁ありさも　読人不知

辞云此二首初ひの詞にて留りたる事もあるも各同しもにて留りたる
抄

又云疑の詞をとめりそ有

秋拾恋一
忍ひ来そ卯花垣のかくてきたるあかなりとさされの夜　花陰

此あはれをはかなきといふと云下へかゝるてにはいあはけとを留り

口恋一
いふてあはそうつかんかけれと見へ月すみ神の宿にかとも　読人
此あはけてをとかにてあるやうり　うく二そをもうはひの家あつひにあはた

拾遺巻一
又こそといふてとまる事あり
いふて渡つかんなけれやとそ見えこそ袖のにほひなれ　中務
是ハ上の五文字へ返ていふてと返してこそとまるへく
又涙こそといふ詞こそとも留なし
続千巻一
かみさこそおさふる神もわかるとも忘れといひて今そ逢見ん　権律師実性
同巻一
恋せん後の世まての人も名をしむ我にこそ思ひしれなれ　能誉法師
同巻二
思ひ立は家思ひ立にこそ花こそ咲ぬるかなしき　藤原隆信

又中こそといひて詞のかへしてとまる事有
或ハとふ詞にてたまりうける歌の詞　なとといふ類
これハなまりといふ下へあれと入してとる事
こそなまりたる詞ひとの歌とあるへし

此外に
らし　しか　しか　を　よ　き　に　かき　か
身こそ友よ　恨をこそ思ひしに　我こそ恨ん所へきに
如此の類なし
しゝの類なり
古今恋五
花すゝき我こそしたに思ひしか　ほに出て人にむすはれにけり　仲平
との字類なり
続千巻一
○あまりに思ふと人や忘るらん中絶こそ袖の涙と　大納言為氏
○霞こそ立こめたりとそいふ山の霞とはいふならん
○春も色秋の紅葉もかはりあるを又もあひ見ぬ人ならぬとの説
又のこそ有たとへハ
空と錦の紅のこそといふ
私曰今ちあかれと　又もあひ見ぬとのこそ　先かり限り音読なることしりぬへし

八

やの字の事

凡やの字に品々ある先

口あひのや　道や　山や　其類也

又呼出しや　ふとりけりや　うらきまて　小泊瀬や　其類也

又こゝろひのや　花や咲くらん　雲やかゝらん　人やくるらん　其類也

又さつるや　心ばかりや　人にとはゞや

又疑ひて捨るや　袖ぬらすとは　物思へとや

又祈りひのや　花も月のうちにあるへし

又そうるや　秋のあはれや　ことのはしや　いと哀れや

乃しるまゝや　其類也

後撰雑一　口あひのや

おほはらや此所もとつくもしのふまて立まさりぬも我宿の梅　ともみね

新古恋一　呼出しのや

よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山の峰の白雲　よみ人しらず

後撰春上　こゝろひのや

春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらん　つらゆき

うたかひて捨るや

難波がた短き芦のふしのまもあはで此世を過してよとや　伊勢

千載恋四　祈りひのや

見せばやな雄島のあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず　殷富門院大輔

（是ハ古傳ニ大事ノ歌ト云）

古今恋二　なりけり
涙川のうきにながるゝ我身さへ下にながれて恋わたるらん
よみ人しらす

又なかるや　うすや雲　う川や瀬　あさの歌也
なかれ程てありや云々　一

九
涙やといふてにはの事
○世とてもをまほとあとされてをり心のやみにまよひけるかなあや
はらきなりけるあやてにをは〳〵といふんありみるに
○いつはりとなき花桜さくらおさかおもの浦波むそしきえあや

後撰恋
涙川なかれなるゝれ乃涙のうきたる人にあひて涙やいせ

されも同してにをはにて心ハ逆ニ六十あまりやせん人にあひて涙や
もんといふことなるやの字ありてやになる〳〵先にそ有へき也

十
新古今雑下
やハ乃てにをはの事
老ニなる渚乃小川のうみけとをさつめる歌とよそにやハらん
源順
同哭
子日する野辺のうちの松原千代をハよそのものとやハみん
大納言経信
小
かう
ちかひやと同し心にてつめる歌とよそにぞんハ我身の上
とみるとも千代とハよその物とやハうらんハセし君か上とみるといふ
心又ハ字を添えてやハよのへきも有　花やあちるらんよいのわらに

かと此類ハ花やちるらんと也 又やハとゝめて其のうた君しそそ
やと斗いへる所有之此類を疑の字入てみるなり
秋の田乃穂のうへをてらす稲妻の光のまにも我や忘るゝ よみ人しらず
これはの字を思ひて我やハ忘るゝ事はあらしと云心也
又我やと云てはいはゝ にかえと言ひかけて留る也
○うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人めをもるとみるかわひしさ

十一

かなとめ之事

大速まさ如く立見 てにをはかな 感心のかな、二疑慮のかな
治定のかな 吹かけかな 詠嘆のかな 中世かな 嘆息乃かな

てにをはのかな
○なかなかにおもひたえてもおしくとおもひはてゝかひなき山のかな
○東路の不破の関やの跡をとむるやふなりとおもひなるかな

新古今恋一
感心のかな
わすれてはうちなけかるゝ夕かな我のみしりてすくる月日を 式子内親王
此かなハ中のかなゝれとも歎の感心のかなにて下の句の言葉にかへりて同し也

同秋上
疑ひのかな
心ある小嶋の海士の袂かな月やとれとはぬれぬものから 宮内卿

千載春上
さゝなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山桜かな　よみ人しらす

詞花春上　治定せし卿
いにしへのならの都の八重桜けふ九重ににほひぬるかな　伊勢大夫

新古雑上　ふきはらしせしか
めくりあひて見しやそれともわかぬまに雲かくれにし夜半の月かな　紫式部
新古ニハ 月影 トアリ

後拾遺恋二　久しき歌
やすらはてねなましものをさよふけてかたふくまての月を見しかな　赤染衛門

後撰恋四　中の歌
秋風のふくにつけてもとはぬかな荻の葉ならはおとはしてまし　中つかさ

拾遺恋四　嘆息の歌
わすらるゝ身をはおもはすちかひてし人の命のおしくもあるかな　右近

草木の事にぬけかなとさまくさまのいひまはしてあると
此歌ハ第意の義なり〈一　此歌ハ時節の心に用ひ侍る〈一 一説云ハ

詞花恋上
風をいたみ岩うつ波のおのれのみくたけて物を思ふころかな　源重之
時節の心に用ひ侍り又第意を
まち夜をなけきふ風のうつろふに相逢に梅とそひゝる歌　崇徳院

又中へ入るより心をこめて前書にこゝろみし其歌ハ

千載集　源俊頼

春日野の雪を若菜につみそへて今日さへ袖のしほれぬるかな

又の歌と謂るハ祝ひ書て示之　歌ニ

後拾遺集　いつミ式部

あらさらん此世のほかの思ひ出に今一たひのあふことも哉

此歌ハ本歌へ引直して歌とあれは押へ字を能くかくいへると
いふ様とも有けれハ初心の者の及ひかたし故未練の人ニハ斟酌
すへき事也尚押へ詠まるとも功のいりたる歌ハ見るへき也
初心の者ハ有のまゝ成歌とて用ひらるへき様とも先を知るへし

偖又此の歌に題を定て工夫すへし只一首の心をもて作る事也
上より云ひ下しきよけに義理分明に其言葉よく続よく
離歌の様へしされくては弱く聞えしくせひなくの歌と
なるゆへに有り其に題定は二ツに限らなれし
題さといふは　てにをはの歌　次なりの歌　又様の歌
中の歌也　又言葉といふは　来ての歌　寝覚の歌
治定の歌　嘆息の歌也　歌とあめの大事也
忘れては題をき歌とて多あやまち有ゆへに其心へ入れて所よく
工夫して古今の例を新古今に詠しならぬへし

十三　かのてにをはる

かなといふてふえとかといふすめたとへいふに　よみ人しらず
亭子院　心くるしなかれかひけむおもひしかなきあと人にしらせん
さくら花のちるあめのふるかとにいつる家なき
新古今　夕日さす裾野にいかよりの茎の末に招かしくも有るか　前大納言忠良
浅みどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か　遍昭
寂しくもあるか　春の柳なる也　是亦なかつては疑ひの字なるへし

満云
かといふてには二件あり一件は是也又に出されはなくかといひてかの異に
なりか也是は決定のかなり　又一件はかといひて疑ひの詞なるかの事也

秋風の吹上に立る白菊は花かあらぬか浪のよするか
木のまよりみゆるは谷の蛍かもいさりの舟の沖へ行かも
くるゝ夜の路かはも川辺のかへるかへる見せしのゆやのたくひか
此頭の文字を多く入てそれかこれかと云ふやうにみたるは名疑ひの
かや　又同し疑ひにもかの字一所ありも有
白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消なましものを
是は文字一つなれとも白玉か何ぞと問ふところ是又此かは一つなれとも疑ひの
かな　又か文字一つ有てとらひの詞なくして疑ひになるもあり
昔の人に宿をかる時天の川原ぞ我のかいの宿か
けふは一首の内に疑ひの詞なけれとも此かはうたかひ　此歌のか文字は上手
決定して疑を多く略したる詞定して　さもは天の川に宿を借るかいの宿かさねと
われに問へると名なるきこそ云ふの詞になく此かの字も治まれも疑ひのかの字也

此歌によりてハ文字乃法定と疑ひをなすへし

十二　[illegible]

古語に二つ有　[illegible]　なとよりて　辛苦のつ

[illegible]くとなと[illegible]と兼方も有

後撰秋の中

秋の田乃かりほの庵のとまをあらみ我衣手ハ露にぬれつゝ　天智天皇

此御製ハ辛苦艱難をしろしめす御製也　民の貢をおさめて給ふ時

かにせよとて田の[illegible]仮の庵乃苫なと[illegible]まて[illegible]ふに為て[illegible]時

[illegible]そくよ[illegible]露にぬれて[illegible]を御覧して[illegible]仮のまなと

[illegible]て衣の袖に[illegible]露ありてあるにて袖もぬれつゝとハ

よりて辛苦と艱難と侍りけり

古今春上　光孝天皇

君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪ハふりつゝ

此歌も辛苦の御歌也　詞書に仁和の帝ハ光孝天皇之御子におハしましける時

人に若菜たまひける[illegible]と有り　仁和の帝とは[illegible]

とは親王にておハしましける時之[illegible]とあるとは[illegible]是皇子にて[illegible]

皇子なりける[illegible]に此親王の[illegible]乃[illegible]て[illegible]

[illegible]君か為[illegible]と[illegible]

袖に雪ふりつもりて[illegible]若菜を[illegible]にて[illegible]乃

[illegible]事[illegible]人の[illegible]十年[illegible]

[illegible]秋[illegible]春[illegible]の[illegible]花の[illegible]秋[illegible]

若菜の[illegible]と[illegible]

新古冬　赤人

田子の浦にうち出てみれハ白妙の富士の高根に雪ハふりつゝ

此歌ハ[illegible]心ハ田子の浦の絶景にて不二の山に[illegible]

雪ふるを文に言語に述る詞とは此字にあらめ言語にあらはし出てこれ
雪もふりつゝおもひ出てこれを雪気降りつゝとおもへしくさへし不二乃
雪も雅にもふくめたる新古今に冬に入たるしはかへて世に雪ふる頃
冨士の雪は猶一きはやまさ遠くとふ句にては此字にこめてら傳ふ故
なりへし此歌元来万葉集に入ぬをもはや古今有て兎角に

万葉
田子の浦にうち出てこれはましろに於不二の高根に雪は降りける　赤人

ぬ初傳へと新古今撰集の時傳しろふにそを高ねのとなとしふりらへと
ふりつゝと改て入たる也傳ふ詠に於心にてそ此歌なる所にも公風しまりる
なとはふも万葉时代の詞にておもしろきなれは糸おのなさと和ちたる也　よみ人しらず
入出る積りとそ

新古今
冬ごもりにも雪もふりつゝ志かなくに関あめ重なり春は来にけり
此ほくいなりけなつゝ雪もふり風くもる也

右是をこふとは此大をとふ意へてのうちにも字にあらぬ想してつゝ
てあしらぬとめと白しるとかへ乃らなどてもおくかくはへとあるといふ
猶も知しき四の泉にの傳り外なりし能くまへの古歌とを味ひて覚
語をへし味はふかく歌は能くこそりたる詞なる所は神心の人をきま
しき事ていふにも切考の志いふを所なへしされはらなとめ悟てとめとて
大きにし傳るも此謂を也好く初心をゆむよりしてもるべし
滿云　凡ほとといふは万葉に管（ツヽ）筒（ツヽ）作（ツ）など書るしと本據にして後
世いろいろと此字義に何かと惑説とも多くありおて和歌のてに此元来其
神国は神代不測なるにも天地開闢の時にて此人のこゝろとなる時にも
と出来ても、もんも出来て只て猶白きのまことされは吾のうの中ても法理之義に
よりて幾千万なきりあくて此と世もにたるまなきのは言はし更に猶すを
らく含をきれはなもよあれて今もも事に據るに少し

又数とふする其元来を思ふに凡一以二を生し二以三を生し三万物を生ずといへり
さ其ハ世の訓にても 一(ヒトツ) 二(フタツ) 三ッ 四ッ 五ッ 六ッ 七ッ 八ッ(ハッ) 九ッ 十ヲ 是一より十と数ふ
此訓ぞ如名ツ文字を添へて和訓の例とせれば其の神語ともされハ云とぞ
と数ふるよりに此字を以て書けば法と字を添へ経歴(ケイレキ)の心を持たせ給ふ
是正字の餘音(ヨオン)にして言をそれる正字は不足りのこされとも万葉に漢字を仮り
音義に多くさとされハ管 筒 作 此字義にとかくかくありける
凡法に五種あり其本文に分かし 満 法らくあまねにて法の元来ハ経歴の
初とて始て法とふ號ハ出来ける也其法ので元起をより又五種の
不変すきあり一しさせる法の元来とやとなりつとて一ツ其謂ハ右の一
より九と此数字の餘音とかさ○あるハ其て和の塩餘なり。きみや数字の
十の此字斗ツの餘音なく十ヲと唱ふるものハ一より九迄の餘音に字を○上ヲて
十にて始終を合せる也へ十ヨと唱ふるも十ヨト云訓ハ貫通(カンツウ)あるにて貫通乃

略語をかりて用る訓なり一其也一より十と数とよみてそれを十にて止へ
合せて法とやらにある也一ッ以貫之の謂にして之を訓と付るなり一文字
此形ハ十とは一より九迄て竪に法ぬきて其始終を合せる也此形容は
十此形に似しまする心やと学ひきされ十とをへとふ訓もかゝりなるや
右の趣ハ満足の趣也経後の君子考へぬいて正偽を糺し一道を待る
ふ因其趣意ふらくいたりしまに記さしとて後の君子の一顧をまつのミ

十四　しかれてにはの事

古今春下
おもふどち春の山辺にうちむれて　そこともいはぬ旅寝してしか　そせい

金葉秋
明けはまた秋のなかはもすきぬへし　かたふく月のをしきのみかは　平忠盛

是ら大かたるしかてにはとしをいふてにはにてしかれとしかのし
字のかとはめてしかといへる也　歌ふんも有とよく味ひ侍るへし

十五　かはのてにはの事

此かはといふに二つあり　といふてにはは疑の詞也
古今春下
いさけふは春の山辺にましりなむ　くれなはなけの花の陰かは　そせい
新古秋上
おしなへて物おもはぬ人の袖をさへ　秋の月のやとるものかは　李部
是らを字とかはとわけて見と心得へし

古今雑下
いかならん巌の中に住まはかは　世のうき事のきこえこさらん　よみ人しらず
千載
あふひ草てる日は神の心かは　かけさすかたにまつなひくらん　基俊
又かといふてにはかは中にあることあり　やの字をさしはさむへし　体にてにはに用る事多し
○ たとへは名を惜む君やは人のうきやらん
これにてしるへし

十六　しとめてにはの事

凡句はしめにしとよみて下にしめの字を納へし　一首に
拾遺恋
我おもひのあらはれにけり(?)世の中に　猶うき物はよの中とこそ　よみ人しらず
古今恋
頼まれぬうきは人とはおもへとも　猶うきものはふかきなりけり　読人
古来然とおしてしめといふとしめの字を納る也

新古今

一　あるハてまつ大さはにたつぬる濁（ぬ）は濁（ぬ）れて袖のなこと　有家

やまとなのとふすわかれ家

後撰
行方ハ十ゝ人乃玉ころも舟てこ常のむ葉てふなと　よみ人しらす

されはあふてふなとゝけてをなのそと上へ云ふこゝ心なり

又すのとと云ていいのこ次るあるも

新古今
志つ玉か何そと人のとひし時露と答へて消なましものを　業平

拾遺雑秋
ちふりさいそふ社のありみち遠き宮めといふ名そおもしとふ事と　よしたゝ家

又すのとといれて志とりふるあり

古今
あおとみてありへしものと梅の花うつろひの神まされ　貫之

十七　かなとやすむる事

しも　かな　や　も　なし　とに　せし　但し　しとは今ハしも此数

但しあるハ如此やすむる連し

かなハ雑とかも此濁なと明へし

又ふらく　こふらく　まちてこ　なそみ　ふりみ　ぬりまこ

なと体め成ハ今の世には用捨あるへきなりとそ

十八　てにはと一首のうちに多く逢くる事

拾遺
大井川のゐせきふりぬれとも人のまつとは思ひそかなん　定家

秋の夜も有明の月も山の端にかくれてかくれやまる次　日

如斯古歌にも伊達とてそ時々よませ給ひし證也

又かな文字と多くよみし事あり

古今恋五

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとの身にして　なり平

続後撰恋七

うつゝをもよみれ夢りのいろ偽やみえてうらめしくおもふらん　河内

此類いくらもあるへし用捨あるへき事なりとそ

十九　ゆへなくしてよむまじき詞の事

伊達なきといふ事とをけし詞といふ時は嵐のうへ

又あまとといふ時は海吉里一筋なとにもよせてよむへし

又たむけなといふは日本唐名ていふへし

又ほのおほき　時のまの事とも小康も角によせていふへし

又くるしきとは辛労の事とも多くは恋に寄せてよめる也

其外かゝる詞ありて其心のふよもれすなるには

続後撰雑一

しのはといへはなくそれかなき世の中にいかにあつるたく我なかるらん　忠見

あつるとは堪忍の事と　又まとろといふは

芦　荻　蘆　篠　笹　なるへし

又しのはらへと海によせて云時は志のはるゝといふへし

此類悉く準すへし

二十　読と入道さてふえのす

苦しく　絶　みに　さへ　いとど　あふ

後拾遺恋三
今はたゞ思ひ絶えなんとばかりを人づてならでいふよしもがな　左京大夫道雅

同
明けぬれば暮るゝものとは知りながらなほ恨めしき朝ぼらけかな　藤原道信

古今春
深山には松の雪だに消えなくに都は野辺の若菜つみけり　よみ人しらず

後拾遺恋二
君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな　藤原義孝

いせ物語
いとしくも見れ〳〵のあ…きふれ山しくも久流浪ふ　あり平

足ふのて山はさえや深くはふる世谷のすそし

廿一
ゑにし流ともふ久家はのす、

古今秋下
ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くゝるとは　なり平

神代はきこえずとて流るゝもみぢに並べて水なし　是と通ふとなし

廿二
と不通ふにて通ふとのす

新古今
津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり　西行

わしの御れ歌とも恋ええし

世にもとのとも通ひ又ふとの心かよふべし

廿三

いひかけてにえに清濁のこと

凡云かけてにえに清濁あることを示し置ハらく一二といひて

新古今一
みかの原わきてながるゝ泉川いつみきとてか恋しかるらん　中納言兼輔

後撰恋一
男によりて家を出で侍りける女のもとへは悪しと思ひけるにや　よみ人しらず

後拾遺恋一
かくとだにえやはいぶきのさしも草さしもしらじなもゆるおもひを　藤原実方

いつみ川にはいつと清の字濁りてよまばいづと清みて云かけ

えやハいふと云ことを名所のいぶき山にえやハいふを取と云かけたり

如此の類ハいくらもある古歌に見えて有なる事也ーー

廿四
壬二上

古歌に依りける

みしま江や小舟のうきねしてあしの葉の短き夜半の五月の比　家隆

山川の岩ねとさゝ鳴かはづいつちらはぬさまきれのころ

凡ころのはけころの句ハそのこのこゝろもあはれべし　五月雨の名にはい

うつされ此といひたる事に

続古今下
来ハ来るべき山の端にかゝるさみだれて月出る比　定家

これは時分のこゝろなるべし

拾遺五
○時雨ふる里にさとなればまだき卯の花の五月やみ比

これハ五月の比なるべしーー

○五月雨のつもりあめのめぐみの為こそ晴雲のたちゐのこゝろなる比

月清集上
是は五月の比の如にて是も羽を翔て鳴声をふくみたるに

時鳥初のひくまで鳴やり卯花月夜ありの見る比　後京極

廿五

にてといふにてにかえ乃事

に　とハの之人

新後拾遺竹下
ものゝふの宇治にてまされるみの苦にて関と屋に落とさて秋らか中らく　定家

拾遺愚草
秋津島ゆすて風たつらふにて旅にて風にたなふ雲のしるく　同

新古雑中
日本たふみそれ人も昔にて見れより庭のおとは梅ふき　同

山里もの入乃月住と眠りて聞く雲のまとくさにさいさ流るし

ふれらの松かたましけかたと人々

入相の色の色々きるもちつゝにて

山風さへ花の香の色みにて　かとあそ人し

廿六

拾遺愚草
しておめの事

そらは哀りし月を当みて鶴鳴なれ人山の巴みくに　定家

年月をきのふえりのわすれし者のおきさ知る　同

併の心なきにりみる都の山を月なるくして　同

是もみてのくへみ同し

廿七　みよとめの事

世の中かゝわる五音第二の音にて清るし

空の海ふ雲の波たち月の舟星の林ふ漕き隠る見ゆ　人丸

続後撰羇旅
箱根路を我越くれは伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ　鎌倉右大臣
如此五音之第三の音にておさへてあるを　ウクスヌフムユル
此文字にてあるをたとへハ

ウ
神の乃垣にやしこてふらむ

続古　舟出する沖津浪もたかまの月の宿のかり寝なきたくらむ　ク
あしのかりやふ見やりたくらむ

ス
舟もこそとまをとるきのかをすらむ

ツ
春のきは谷に鶯　きなくらむ

ヌ
山のいろやきりふてらぬらむ

フ
みとりの雲を鶯のなふらむ

ム
浮草のいろうつり沈むらむ

ユ
君か代くみに残さるらむ

ル
上ゑ風山に月の流らむ

右如此にて第三之右是を裏のてにはかへりといふ此外口伝のなき大事
大きの此歌七ケ条にかへりたる其餘歌にもよりて伝授あへし此外
近来風躰にもしててにはの例是等にあまり用ゐるもあり

此あふ云の字も有ふや　いせ物語十七段目うちに
紅ふ匂ふ見いつら白雪の枝もとをゝふふるかとも見ゆる
返し
紅ふ匂ふ上の白菊を折ける人の袖かとも見ゆる
此のあもふておもふり　師説て慶之の心也　見その道意之
此頌歌ハもんめけといふ異ふてそるの道意之依て手ゆ能之　見ハそらの
ふはく

見る
見ゆ　のこと
見るといふ時ハ此方よりそれとさして云之　たとへハ見渡せハ花も紅葉もな
かりけり　此方より見るていのこと之　見ゆるうちに霧にきえてかゝるものゝ風
なといふてつ之

見ゆといふ時ハあなたよりもこなたよりも互ふ見ゆるていふ之
はるかなるといふも同じことなり　極化のもの此界なと他の事ニ而いふて云之
それと定めかたくてさて併ふ春雨桜のこと之　行ふゝゆかるゝのていふし
春雨といふそふりふやみよしの山も霞て見えたるらん
なとのていふ之

満去地ゝ見つゝやり
新古今撰　天さかる鄙の長路を恋ひくれは明石の門より大和島見ゆ　人丸
玉葉雑二　なくやたに千鳥はるゝ夕汐の雲ゐの浦ふ寄する袖ゝ見ゆ　為家
風雅雑中　あはれふなふその里をはるかみあまとゝめこりの煙見ゆ　為兼

新古今　藤原

今日ハ守しある人の砂もしかも日されぬ人をとさるかな中山　家隆

古今にて書子と讀みにけり卷の?にて如を孝孫のあるかきハ孫ふ古人の人とえの子をれちを危いも孫ぬとハふをやあらしのえをもつ見て只古人をえてかなとふ思にいとをれく我ふ孫なと思ふやうに吹とこされハ忘れぬ人と嵐のさやハ古ハ人と日えるなとふ思ふに色手わく吹とこさるハうをそて忘れなと花の香とい一字ふさやの中山へ出してよ見らるこ此所とらふなるへし其外とに紀者の粉書あるへし

古今

心ざしふかくそめてし（居れハ年　折りけれハイ）きえあへぬ雪の花とみゆらん

讀をお守え古歌ふ子細なしてしかしを心字をそめて居りけれハときえあへぬ雪の花とハよめるんと見え意と取ふふくそのをあふ取きえやらぬ雪も花かとこそあるとさ明らさ

居折の古説をかりいろくにやせとも家の説ニて居と

（居ハとゝまる　織　揩の定）　折ハ（おりし　奥ふおこ）

見え（申　え）　ふのへふゆふハへし　申えふゆふハえと

見の守を元正説　右寿春山ニ孝孫道候

宜安子ハ見へえるか用に御佛のよし和尚清中と存知子ニ申されかより此付廿七月八日桐尋侯處定元ふてへとえと承用らるハ寺しより直談ふ為之其尚後證此處子記ス

為ハ天の書也と云々

天之巻 墨附二十八枚

右百花庵主山蘭長老傳書也道統道宗主秘蔵
満光師ゟ御傳授之左之記とおり地之書とおて右
保合主地の巻と号玉極々御秘書也

てにをは百花庵師傳後之巻

奥秘を言ふは深き事ありて色見えぬ心とのべ侍る事限あれば てにをはを
とて肝要と次されども又其稿に書といへども心は外に顕れ出ると心得
密に書いれまじき事有べし

一 てにをはといふ事詩歌ともに大事の秘密口傳也 唐にては文字を讀て知る
日本には久しく入りて讀て其心を見れば てには出づしかるを八其後我らが心の如くなす
てにをは生葉也といへり草木葉のくさぐさ何の草何の木と云ふごとく てには
ありそこし萌出て出づるなりそして其草其木と知るごとく和訓にて和歌
とりて其義あらざる理とあるは文章詩法の手爾乎波口傳多し 和歌
てには生きもの也

△ 天地とおりし浦の様子に隠れかくれ居て船と見えずおの
は義さし。八手にをは葉之手にをはの事隠くて左に書付る也

第一巻　十三ヶ條　口傳　秘傳

一 はねてにをはの事

疑ひとうたがふには　や　かと　か　何　なぞ　など　いづく

いかに　いかでか　いくたび　たれ　いかで

右等の詞のうへに有てははねて留るを本とすべし

拾遺春巻頭

△同春　春たつといふばかりにやみよしのゝ山もかすみてけさは見ゆらん　忠岑

△千載賀　よしの山峰の白雪いつきえてけさは霞のたちかはるらん　重之

△古今冬　奥山の八ッおの椿君が代にいくたびかげをかへんとすらん　基俊

△同秋上　宿ちかく梅もかれなくになどなつかしき花ぞ咲らん　千里

△同秋上　秋風にはつかりがねぞきこゆなる誰が玉づさをかけてきつらん　友則

秋の野の草のたもとか花すゝき穂に出てまねく袖と見ゆらん　在原棟梁

其梁按に忠岑の春たつとの歌をふやのらんにてやの字のこたへを依ておゝ證哥

新古今春上　鶯のなみだのつらゝうちとけてふるすながらや春をしるらん　惟明親王

△同春上　年を経て花のかゞみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらん　いせ

△同恋四　大空は恋しき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらん　さかゐのひとざね

△同羈旅　山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらん　おと

△新古今哀傷　なきあとのおもかげをのみ身にそへてさこそは人のこひしかるらん　西行

此歌五句ともにうちのべてもはねても詠べし　但しうたがひなどの辞は

おはすべし

満私云此歌にやといふてにをはとある證哥奥のやといふては

これ等に多くこたへたり　仍る此所に略す　此歌に何やといふてには

そなる也も奥のかなのてにをはに證歌見えたり

又云くといふてもらんのとまりは證歌可不用し

一

一 治定してよめる事
思りん　ぞん　祢ん　せん　りん　なん
此類なるべし

満私云 抱字や
古今恋三 △ わかなしてこよひはかば春の日のながくや人をとはじと思ん　源宗于

抱や
同春下 △ 春風は花のあたりをよぎて吹け心づからやうつるとみん　藤原好風

抱か
拾遺恋三 △ 足引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねん　人丸

抱ぞ一句
新古秋上 △ 小男鹿の入る野のすゝき初尾花いつしか妹が手枕にせん　人丸

抱や
同賀 △ 敷島や大和島根も神代より君がためとやかためおきけん　後京極

抱に
古今五 △ 七紅未なきいまぞみびなからちらくきだれ梅ふ右ねかるなん　よみ人しらず

此抱字ハにやの類なれバなんとよみてしるべし

一 とさへ留めてよめる事
是ハ何れにへ致連里但しさへぞに其心得わけ
そ・と・に・て・ハ　是等も何にてとめると知るべし

拾遺愚草中 △ 春日山みねの木の間の月なれバしづかにぞ神もおもふらし辞　定家
口傳　とぞハ　とやて

千載恋下 △ 恋ぞ入る野の原れたがまだられ恋のかたみにたえてなん（ふの下へと云字入てよむべし）　源頼政
口傳　此ことはふの前清えしてふんとへ字と一字入て心得べし

左右にとめ　ふ字と　とふ（に）てよむ

一　のべてたゆる口傳

一　うらびれ

一　さ侘うらびの事

一　まくとりてかしこともうらびれとありて文ともうらぶるは稀字

これは古今同風ふて傳授

満私云
らし
わらぬ
ぬらし
右三件
各題の
心に仍て
下ふ
たね字ふてあるべし

一　らし　わらぬ　ぬらしといふ事

らし・わらぬ・ぬらしといふ詞はいづれも隠んのへあるべし
又くへの風と思しよる隠ずあり其流あぞねといふ御あいひ也

古今恋下

△　久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらん　紀友則
（此月へ何とてといふ事を入てこゝろ）
是をはめぞのといふ習ひ何とてといふ字を入てこゝろえるなりひし今いふ習ひ
是も言葉に出さず隠して心のうちに思ふ義也是等は上手の上
ならでハはかりがたき事し

一 まじといふ事

一 [illegible]きといふ事

右五ケ條いづれもらんの[illegible]へあるべし

波私云此二件も又上ノ三件ノ如ク疑ふんあり詞なれハ其[illegible]字とあれ[illegible]（抱）へあるへし

滿私云此註ハ[illegible]

一 [illegible]田舎[illegible]にはあやをといふて[illegible]心得あるべき大事なる口傳之者にあるがたいとし

△[illegible]ぞるとて是[illegible]はうちなる[illegible]これぞ五[illegible]のうちなりけり

拾遺秋 ツル

△ 水の面にてる月なみをかぞふれば今宵ぞ秋の最中なりける　源順

古今春下 コソ

△ 枝よりもあだにちりにし花なればおちても水の泡とこそなれ　菅野高世

千載春上 キヤトハ

△ 花[illegible]とは　俊成

古今春下 ハリ ヤラン

△ 古さととなりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲けり　ならの帝

曰

△ 三輪山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらん　つらゆき

第二巻

一 ぞといふ事

此ぞもじにあまた義あり五音第二ノ音にて[illegible]口傳也第二ノ巻

此ぞとは ウクスツヌフムユル の口傳し

我ぞ[illegible]花ぞさく[illegible]袖に[illegible]波ぞ[illegible]とぞ[illegible]

といぞこぬ　このぞゑふ　人とぞ思ふの也
此類をとりてのべよはじめよ
上件の外に　志きと　初と　しかしか
此詞とむすぶもあり
古今恋二
△かゝる夜日をタぐれにある時はくもゐにこひ渡る　読人不知
日雁上
△我妹子が紀の船の君を恋ひぞわたると書きまつ　伊勢
花ぞらに　月とぞ見しに　松とぞ友とえひしか　君ぞ来るらん
此詞は時やとう流れはしかるよむべし

一　為家とに用　その字あり是と下春のぞといふ也
おなるひぞ　人なにがめぞ　かく流きぞ　此類也

後私云　此字はすり下に　らんとふ心と　てめていひ掛　なるてかえるし

一　そとやとのへはじめよりいひ作るは　たとへは
拾遺恋中
△むさし野の霧もえんぞふる雪に中々にまさるかなやこそ春　定家
思へとぞ我のぶるやといふ此也へふをやうぞにとしきもの
又やとはじめてはそあるべし　満私云　やとつむるといふは締まることれるし
△春日野に若菜つむ子何の松しらむ子供とぞへつ待ちぞ行くん
此ぞ文字はや文字也　満私云　此ぞとよる久る心ある詞なり　らんしや文字とつめる時有用と有説にもうえたり

一　ぞと　のとてふえとらひ作る之　是深秘し
古今秋上
△きのふこそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く　読人不知
口傳　此ぞとしかと押へて又いつのまにとかく字よいつとふとこめ流れ
ぞよと答　秋風のふくとくし

古今春上
△折つれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここにうぐひすの鳴 読人不知
口傳アリ 匂ぞと云有りとやとてここと云うぐひすの声なくし
是にて知べし 風なく 鶯なく 風ぞふく うぐひすぞなく
口傳ぞとおもわでふくと云ぞとはなりて吹くと云ているいづれも通
ひ侍るのといふ時ハ二首の中にてへ入べし かくへなくてもぞなるべし
深秘也

滿私云 此註にある如く(香へ)とはうぐひすの羽と上にとくと
きのふそはくとハ いづれ中にと上にうぐひす係ル のふくし
折ればハのうとハ ありとやと上にうぐひすの声 鶯のなくし
されくてハ そふく そなく
ぞとのに通るすハの文字にてハ下にらんと云字をそへてみる 仍て上にうぐひすの声なくへ
なくてハ不まる也たるべし

古今春上
北邊五件の中
△春来てと花も匂はぬ山里はものうかる音に鶯ぞ鳴く 読人不知
△山高み人もむかしの我宿りて身よりさ知るに我ぞなきふく 定家
是等の味ひ大切之心にてよむべしとぞ
滿私云 上件の二首ハ上にうぐひのかく(なきな)そと云るそ ろ字の文字 此等是にとく
分別すへし

一 思ひのほかに云かけしを係てふんにすと是等の味ひふかく秘すべし
新古今雑上
△しめおきて今やと思ふ秋山のよもぎがもとに松むしのなく 俊成
滿私云 たのみのうしてふそ 松虫のなくらんと云ひのこしそろてふんなし
此歌しめおきつ秋山のよもぎがもとに今ハと松虫なくでわらんと見ろなこらんとあてそひ
おし身てふそれなく(思へ)とのふくみてのなくし なくてわらんと云ふ心ふくむ者へ此の文字

後撰恋二

[illegible]とかもちてらんとかのそてなるらん

△わがおもふ心のたけは船橋のかけてはなれぬ人のかよひぢ　源等

後私云　思ひのこもれてふかき人のかきならんと思ひのうちてふかき

此歌の下句のかな字ふかく語しずつかくふて後あはれなるべし

是はぞとのべずしてそのあまりかなかくして納こし

△後私云大きにのべちぢめてふかれ内のある時はなどおしはかるひおもとる事なれば第一の字と後心にありてよむと

なると仍て[illegible]かん[illegible]かん[illegible]かん[illegible]かん　かとたるの字と後心にあてよむと

又ちぢめてよむ時は一首の中にて其理のあらはれざるなきひの字をわつかひ入るさらへし

此両様よくよく見[illegible]べし但しのぶかなは大きにの字やの字の二字ともにしてを二字と心をおしてそふ事の

仍るへし　先ず字の字と後の後抑来の字とし此両と[illegible]おして不依之の[illegible]

[illegible]不可限うこのひの心と上にこあて[illegible]あるらんのくへあるへきなし

一とぞこそてぞ

是等の心得あるべきにや

一ぞといひのこなてふくあり

一ぞかよこの字はかんなりとも仍るし

又君が心ぞ君が心か君が心よなどいふなり

一いひはかりでありし下の句にはかならず此三文字をたてとまる事を口伝とし

新古今哀傷　△渡しても[illegible]むすぶ川瀬しふとも[illegible]いく世をむすべきこれのながれぞ　定家

古今春上　△浅みどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か　遍昭

奥傳

一 ふとふてあはふ　ふきとふ心乃おもむき有
悪分明ら心乃ふかき出もり
そらみなる人の心は秋風ぶく浮りて見え侍さくぬ

秋風に

一 ふとふてみえに　ふきとふ心のこもりたる也
秋にこそあれ
秋にそこらあるにも似てるにそ有る
その字を略しつるし

ふと ふそ おく傳也

第三巻

一 こそといふ事
凡こそといふ詞は五音第四の声にて留まる通し
エケセテネヘメエレヘ　は礼にて留る也
揚てこそ見へ人とこそ有とこそ待つ月とこそ花とこそ玉とこそ見え
いつそ祈らぬそれとこそこめ
如此五句の内のいつれも作りめてしを留るべし

一 こそといひさ懸とかといふて不波
後拾遺恋四
△ 松島やをしまの磯にあさりせし海士の袖こそかくはぬれしか　源重之
日本三
△ かくなくなる人を何ゆゑ待てゞなふそ筆を経にしか　藤原輔親

千載巻四
△契りしも誰とさへにしらで契りけることのはかなき家もわすれはてける　参議雅道

同巻二
△松川の瀬々のしらなみ契りけむおもひそめにしつらさをもみん　藤原盛方

同巻二
△えりなくしも人かんと嘆きくるかなしのよあはれ名はてぬらん　花園左大臣

右五首のかはそへ字にてそといふてよといふて有之

一　すそに称がひとふくむ口傳
古今巻八
△津の国のなにはおもはず山城のとはにあひ見むことをのみこそ　よみ人しらず
拾遺巻五
△なにはのことは手に撫ぬ歳とおもひしのこゝろなきかな　九條右大臣
右口傳おひらにすとのことなる名へとそへ
又公ハ雲林上にすそあるとと
称がいと合せさし

一　あそう入るかなといふれとも
千載巻下
△花の香をさそふ嵐のさきとおもへば散るとをしまれやはせぬ　権大納言経宗
日本紀
△恋をしひてうちみるよひの月にだにまた人のこゝろにかかるあはぬ　藤原盛範
口傳右そへだにやあるめそのなどにみだれさへなるめあかぬがた
とかへるになり

一　すそといひてめといふなり
古今巻上
△あはれにそ妹にまたなくあけぬれば桜なくなれまてあ　読人不知
千載巻二
△追ひかへる鳥まなくあはれなるなれも雑面とても忘れじ帰るなり　左京大夫

満私云此歌　なにはなる名恋あるくさあれあるハすそ　あきれいよし人の行道なれとても、おりふし
ほしのびて　きなるうきとんのなくさめにして帰君がかたよりあるべし
或注にはなるなる恋とし　人の書をなるとに公と分けさるやうれ公なるべし　在判

よりては過なきなてとといへるもつ過なきはうき人のなさけなくもなるひなかる是は
えいけなる人の心にも一つになれはよとほんしかなる人のうきとうらみて猶其心を過

金葉雑
△年ふれぬるだけりかなはやうすゝけがなの夕にはりつがりせば　中原長國

蒲私云此歌ふれり年比なる身のよに住わつらせハ只すそふとし比ふれれといふ身
とてそハ中ましりと奈良に身の住わりり出へよそに中其そられを老裏と思と
うきなるてうきとそなるすなを是それのみりりに身の裏おもんと思ひきけうらんかく

右三首ハそといひてめと感め候ハで不叶てふえと守へし

千載恋二
△祝川の淵はしかたを契りしがおどろかれぬとしらぬかな　藤原盛方朝臣

淵はしだぞとあらば末とりなふめと思ふべきと思んとも待るゝは
と先淵に向る田契しがふて果てなどる初めてふえなり

秘とべし

一ハそとふて過とふす

金葉冬
△おとはや片岡の小野にさかさそなかりの人のつぶれ　内大臣家越後

是其人とはらく思ふるんと思ひやりありてふえ之此ころは讀人まで思ふ

ありてよろしき歌之

一又さてといひて過とふふ現在未来なる心あり

後拾遺秋上
△まだ宵に寝たる萩かな同じ枝にやがておきゐる鹿もこそあれ　新左衛門

金葉恋下
△音にきく高師の浜のあだ波はかけじや袖のぬれもこそすれ　祐子内親王家紀伊

此二首ハそ何過ハそされハ現在の事といへる

後拾遺春中
△桜花ちらさて人居行のひとよにかとは思ひもこそすれ　坂上是則

後拾遺秋上
△友の夜の心と志まる宿とまなぐやも鳴かなん聲もこそすれ過　中務

詞花春
△身にかへてあやなく花ををしむかないけらば後の春もこそあれ　藤原長能

拾遺恋一
△いかにして恋しき花ん命にあらはあふよしありもこそせめ　よみ人しらず
此四首はこそさんさきはとみな未来のことにいへるてにをは味ひみるへし

新古今恋一
一こそといひてへといふハ現在未来あり
△時鳥なくとハ見けど花のえにかさふみなれ絶えそ止　前大納言
去こそそへハ現在也

日本紀下
△山里は庵よりかにまさるも花なぬやと人もこそとへ　越前

日雑下
△かくばかり恋ひてかくへハもれやすからめもこそ止　和泉式部

日恋二
此二首ハこそとへこそなど未来のこと也
△玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする　式子内親王
是未来とうけるてにをは也
口傳に云こそせんこそせめといふにとふなり

上件のかならしこそしつゝそよきまかふかきこか

古今恋五
△花すゝき我こそ下に思ひしかほにいでゝ人にむすばれにけり　在原仲平朝臣
△[illegible]
蒲私云此こそハらしにてかゝりあり　但結句ノらんハ何にてかゝり也や
後自答　上のてにをはのらしといふとうけてらんとあるらしハ疑の心なれハ也
月こそ友よ眼らんとこそ思ひしに我こそ眼を向べきに
然ぞめたべるべきこと

一いひのこせこそ有
△恋もうき夏のなかも限あると又も逢らんこととのこそ
口傳に云こそあ逢といひおきなり

一 ぞやにもすそといふにも云やまりてよまる始るなり
是又ふり紀口傳有飯こ秘すべきなり之たとへば歌に
古今集傳 △血の涙落てぞ瀧津白河は君が代までの名にこそありけれ　素性法師
落てぞのぞは字のあまりなりかしとよむべき瀧津の津の字にてあつ
かひそなり
口傳に云瀧津の津の字はぞにかよふあつかひの津之名のはとは遠之
又君が代までのといふは白河の院崩御の後なりとぞ然瀧津の
津の字に替ひ來ありまてもあつかひ侍也
按私云 血の涙落てぞ瀧津と　そりしと津りにて云なりといふは大きなる
古遠は落てそたぎるといふにてあつかひ方てにえもきこえりて〔ぞ〕通音に
あるも此所秘説之
白河は八の八文字も　と以八の八文字之此下のてにえあつかひは此書の訓にて
明らかなる

一 御傳
すそと云までに餘情ありといふ事有
（櫻戸ト云時ハ清ム 山櫻戸ト云時ハ濁ル）
拾遺愚草 △あしひきの山さくら戸をまれにあけて花こそあるじ誰を待らん　定家
山桜は花こそあるじ誰を待らんとよみたる也すそをむつかし
初心の用には紀するにすそ
艸庵 定家卿歌 一 御傳
霜ふり秋萩の上葉の風にすそと雪にすそ野〔のこす〕[illegible]袖ぞ入
〔毎にもす〕
野分吹夜の毎にもの〔の〕ゆへと以八よく[illegible]えたるや
△ふた　すそ　野をといふ時は此すそ也つゞきてふるさ
とと雪にすそ袖ぞ野をふれ　青雪にすそ野をて袖ぞ八と打返て
雪てふえ之　袖をも野をふれといふをも中に入てよるてふえ之

第四巻

一 やの字の事

凡やの字に仕立て云ふ有べきるなり

一 口あひのや、雪や木ほり、花や雲、ここや是り、
などのたぐひ也

一 呼出しのや、かつらきや、小蝶や、ここよし野や、
の類也 此外にも多く呼び出しのや侍れども今略す
准じ侍る

一 祈ぐひきつるや、をかしさや、人と思るぞや、

一 出はりや、

一 うたがひのや、疑いて涙によろこびたる心之

一 きれや、うたがひにも通ふべし 又おもへるぬにも似るべし

一 中のや、夕月夜、又すぎさる言葉にも似るべし

一 きみのや、是やにて云ふ文字とて、祈ぐんのやに似たる所あり、
心とどまるさうぐひあふみ遣るべし

一 このや、是は問ひかける詞也 又大かた推量のする事なるべし

一 祈ぐひのや、是も句の内にあるべし 祈ぐひ様なる所におもしとど

一 たりや、

千載恋一
△おぼつかなうるまの島の人なれや我ことの葉を知らず顔なる 前大納言公任

なれやは いとまあるやは おもしく すぐるかるやの字也

なれやは なるやと 何連やは あるやと

満私云 なるやとは物を推量して云ふ詞也 右の本説のたとへうるまの島の人なるやと
ふてふえさうしてあるふと推量しまちたるうるまの島の人は云語通じがたければ此
島の人の何は字ても去る心ぬ有さまと云ふ歌也 島の人は人の我言ふをきくとも
有さまとてあてそこにはうるまの島の人やらん我はいふ事へと字に気つてきたりてと字也
うるまの島とは琉球國のことと師説

後撰雑一　口あい

後撰雑一 △ これやこの行もかへるも別ては知るもしらぬもあふ坂の関　せみ丸

新古恋一 △ よそにのみ見てややみなんかづらきや高まの山の峰の白雲　よみ人しらず

後撰春上 △ 春霞たなびきにけり久かたの月のかつらも花や咲らん　貫之

新古恋一 △ なにはがたみじかき蘆のふしのまもあはで此世をすぐしてよとや　いせ

千載恋四 △ 見せばやな雄島のあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず　殷富門院大輔

古今恋二 △ 冬川の上はこほれる我なれや下にながれて恋わたるらん

一 めやといふてにはうたがいの心也

△ 世をてらす日吉と跡を垂てける心のやみをはらさゞらめや

口傳に云、はるけざらめやははるゝあるべしと也

按私云 此てにをはかりといふに同し てにをはいかやうにてもおなし所にてもおきかへて
かりとよみても 下のさらめやは本哥の詮のおとし

後撰恋二 △ いつまでか花ざかりなる桜あたらのおしむらん道をたどらめや

△ 思ひ川たえずながるゝ水のあはのうたかた人にあはで消めや　いせ

口傳に云、是は同じてにをはなれども、六十越やせん、今あはで消やせんと云詞也

按私云 消えめやは消えやせん あはできえめやはきえもせんといふて
うらてにをは也

一 やはといふてには

新古今賀 △ 老にける渚の松のふかみどりしづめる影をよそにやは見ん　源順

旧賀 △ 子日する岩根のうちの小松原千代をばよそのものとやは見ん　大納言経信

是も見んやとおなし也

口傳に云、しづめる影をよそにやはみん、見はせまじ、我身の上にと也
千代をばよそのものとやはみん、見はせまじ、君がうへにと也

按私云
一しづめる影をよそにやはみん我身の上にてこそあれ
千代をばよそのものとやはみん我君のうへにてこそあれ
と心を云添し きかせてにをは也

一 おなじやはといふてにをはにも、体の字にしてやはといへる事も有り
花やはあらん夜半の嵐に吹散るらんといへるは、花や散らんやとぞ
一 やはといふ心にては、其字を略してやと斗いへるもあれども、の字と
あひてよみあはすべし

△古今集 秋の田の穂の上をてらす稲妻の光のまにも我やわするゝ よみ人しらず
口伝に云、我やはといへると、その字を入てきくべし
△いせ物語 行やらで夢路をたどる袂には天つ空なる露やおくらん
口伝に云、是もその字を入てきくべし。但みの字の事有

一 そやはとかけていふ、又そとはいひかけてあるともいふ
△うつゝにはさもあらぬ事きく雑雨てみえしぞ夜とひかるらんとや

△くちなしてよるの衣をかへすにもえぞみえしとぞ衰なるらんと
口伝に云、何は意也へかし。源氏明石の巻に
思ひけしと云ふとも、よるみる衣をちぎりし橋衣思ひけしと云人のいとはん

一 体の字や字文の事
雪や霞、さほや夕日の類也。但歌に詠むは用捨有べし

一 やはいろ〳〵わかつ也
△古今集 桜花ちらでもとまれ時の間も人の心に何かはやば いは やはやは
右の歌やはの字にて何れもやはとは外とのやと、やはやはと
いふにて心得べし、何とて何れ也ぞといふ心也

古今夏
△時鳥声も聞えず山彦は外になく音を答へやはせぬ　みつね
是又人をまぬてふこたへぬよといふ也
△ことならば咲ずやはあらぬ桜花見る人に志づ心なし　貫之
口傳云、是やハの心也。散かハ咲ずぞもあれかしといふ也
今集恋下
△さのみやは家身のうさに別ぞて人のつらさを恨べき　盛経女
口傳、是ハさのうさやうに恨べきにてハなきぞとぞといふ也
右四首の心おしはかり進ども大むね一振に心得べし

一 人をやハの字
後拾遺恋三
△隠やは又もあふべき後まなかりん なくより外のなぐさめぞなき　左京大夫道雅
是ハ此の人をやハ衣のたゞとはまをいふ也　神めの心ふつよふ也

千載恋四
△人ぞてぬさしとやはともえふ心尽せぞおもひしらまし　殷富門院
是もやハとおもんといふ也。右の人をやハの字にむつかしき詞
據といふ

一 きや
詞花秋
△関越る人に問ばや陸奥のあだちのまゆみ紅葉しにきや　堀川右大臣
これハみちのくにまかえる也。紅葉したるやと疑ふてふえし
時鳥きなき志のびしぐれきぬ袖を猶くに心すゝむと能く申すべき
事肝要也

一 てや

△拾遺 君が住む宿の梢を行々もかくるまでにかへり見しはや 菅贈太政大臣

此ながらと者也と書り則心もかへり見しものをといふてかへし

若菜の巻に我身さへかぎりと覚ゆ物おもひの有らしやと涙を

うけてと有

一 後撰 川辺 さりともねらし 聞くおとも 少なくものか さきれをしや

（コレハ清兵）

一 迷や

△古今恋五 須磨のあまの塩やき衣をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ よみ人しらず

△新古今 て間のなきおもひ迷ひ思ひ男の涙のさだめもさ也

△今よりはわびじとたのむ我宿におもひ我なきのかへしくは ありし

口傳 此之首の迷の中に此の字を入れて心得べし

後撰恋五

△ 首明の有だにあれや時鳥只一声の行がたも見ん 宮内卿

君のあまやは帰りし又君ふとも恋しくも何以んあるなれやのみ[redacted]

にて見もの心にてもなきといふてかへし也

一 だにや

△古今恋二 思ひつゝ寝ればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを 小野小町

△後撰秋下 いろいろとみゆる也のこれればや隠さるゝの山とかへん 大弼

△拾遺哀傷 蒲公は吾あとに細にむすべたる涙の花とちりあてもくらん 藤原清輔

口傳 右之首だにやの中ににの字をもちいて心得べし 有りと

お傳
一　とやのとゝいふ事　何せんとこそといふへきを句にあまれはやの字と
畧しあるゝ何せんとよみてやの字をふくめるてにはなり

一　新古秋上
にやのやといふ事
さむしろや待夜の秋の風ふけて月をかたしくうちの橋姫　定家
口傳さむしろにまつとふかき心にやとかたしくらんとならんとかへつて
てなるゝ

雪玉
さいと草なきこてかはる花薄袖のうちかる野への秋風　逍遥院
此やハ元意のかへし口傳之

新古春下
百敷の大宮人はいとまあれや桜かさして今日もくらしつ　赤人
此二件のや満足して書かするもの也

第五巻

一 かの字の事

およそうたがひのかなのおなじ疑ひのやに同じ

△古今秋下 疑ひのか一字にても用ゆる也 但一首にわたて一字を省

△ 秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか　菅原道真

△ みてよの里か何処のちかうも我すむ里の海士のたく火か　なりひら

但し一字にてとちゆうとは

△いせ物語 又新古哀傷に入 白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへてきえなましものを

是も何ぞと言ふ也へてうたがひの首仍て一字にても守る

一 疑ひのか文字

△古今春下 わかやまちの山辺に打むれて桜こえて花のいへ桜桃てしか　そせ法師

△日本紀 公卿女房のにもか何の恋をきまのと人にこふると歌　よみ人

△後撰恋五 いせの海[redacted]にわたる網のひともあらしか海をきとけてしあらん　なりひら

△古今恋九 親王の御詞歌上男 我宿の花見がてらに人の来るとて其をこひてむすびおきしの花のかが

△ 老ぬれば花ぞ花の葉もが君が八千代をかへえはてん舞　壬生忠岑

右五首歌のかなによく疑へにごりて濁て清むて短歌を濁るし

一 やよひの加文字

△後拾遺恋一 までとひし秋をまになりぬるとたのめか逢しに宿たいねを

△新古秋上 秋を得て誰をかとえて夕暮を待かとうらむ宿の花ちどれ　奈良社宮作

左近中将道真

此二首のかな休め字也

一 そへ字のし △それとだにおもふにたえて我宿を見きとないひそ人のきくがに　大和物かたり
是ハききとがむる人のきくにとふることか休め字也

一 しもといふてには
古今春下 △おもふどち春の山辺にうちむれてそこともいはぬ旅寝してしか　素性
金葉秋 △有明の月もあかしの浦風に浪ばかりこそよるとみえしか　平忠盛朝臣
此しもハ大なるものの志かめてふみしとといふてにをはにもなし休め字也
又古きのしもおふかたとおもひて志かといひても古文法ぶ仮名有
よく味ひ知るべし

後私云 そふどちの歌花のかげ字と見る時ハ旅寝して逢ふ中の志文字ハ助字也

第六巻

一 かハやといふに通ひ侍る事
古今春下 △いざけふは春の山辺にまじりなんくれなばなげの花の陰かハ　素性
新古雑上 △明石がた色なき人の袖を見よすずろに月もやどるものかハ　藤原秀能
なかハ やどるまじきとなり

一 かハといふにも休めてにをはなる有 たとへば
古今雑下 △いかならん巌の中にすまばかハ世のうき事のきこえこざらん　よみ人しらず
千載夏 △あふひ草照る日は神の心かハかげさすかたにまづなびくらん　藤原基俊

此二首ハ皮バかり心ハとぐべからず

一 うとふてふに用ゆるも有やの字ハさそのかしそめてふえに用ゆ

△ かとくずれ物思の空にゆく君きくらんか頼みを忘る

口伝 此ハ文字体ののかし

皮私云 此君きくらんハかへかれもそのちハ心つらハかし君きくらんか

又ハ物思やさうんきうきうといふ心もしとはふさとくひの心ときうなる也

第十巻

一 しへとふてふえ

凡句のきりに忘とといふも多くいひの次する有り

△ 口が恋のわくふにもあの所ハ都のふじといはれなましと　みな家

口伝 見心を網に遠わかちよそへとえのえしぬ程に都の冨士とハいふ通

ぬとも云おしもらし

皮私云 此我恵の歌 恵と火にかけてきうかしとりかりの紙へとさりし

わつハふらあつものあつハあかとふへり 火ハ烟のあつある者れ也 烟ハ身に思ふる

その恋ふかく思いわびてわかつかの冨士にもよぶるハ烟の立と云 歌の文字ハ其かりの立つ

ふれし都の文字とハえぬえの山へとふへし

△ 佐ぬふ汚をとをを守しつとまの布ふとは君いそがれしと　あつ年

此歌あやかりかて口伝し 是ホかくしのととおもへにてよ

まをうし 又ハへとといひてわかれるありたとへハ

△ 自の君いそぎ大空の雲にぶふちぎればちり秋の袂ぞ　有家

此へとしともおれどことなし

一 かへしのと

皮私云 久しれとと八心の久しるし かくしせとといハかへ我のとといふにかし 遠てよむともこハ法ハしてよめハわるハにそれとされ きゝ頼にかくしのをあとくいふなり

後撰友 △ 引き原ハ千代の玉つゞるみてぞきぬむおふひてふ名ぞ　よみ人しらず

是ホハあふひて祭とかけてぞ初むといへるなし

一 とのへとゝふる事　これはいひかけて云へる也

新古哀傷
△白玉の何ぞと人のとひし時露とこたへてきえなましものを　なりひら

拾遺雑秋
△たぶさこがいふ社のむらすゞめもをしへばこして子ありといふなり　よみ人しらず

是をくやしと云へて也

是をおしきといふなりとのこと也

一 枝へとといひてさしとたちけるわけりたとへば

古今春上
△ちるとみてあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる　そせい

枝との字ぞふりよみ成ると書ことゝまて之所に除也

添のうちとてし

一 説へと入るべきてふれふ也

きくゝ桜さへきぞに、いとゞ

我此所のかはとぞ先達の詠せず不と化味すべし。只書き添字いと

やすく通へるにいつまでも秘すべし

彼私云、さへに付いつ迄も同し意にや是を歌の作けるを後流の説ぎきよ外とわきとふ

よりて其所にてたゞと用てよろしきさとあるべし又さへと通て可きもあるべし其故

行要あるべし

▲きえへ 千載秋上 ●夜もすがらあのかけを詠やりて此之の思まさへ侍るありけり　後鳥羽院

▲さよふの心あるべしけれにてハさへとをうまししてハ優ならずまさるべし

冬ふ 新古秋上 ●きりぎりすなくや霜夜のさむしろに秋を来にそけり　家隆

さへの心きりのうちへと侍りてハ事をかしに申すに之外のふてハ多ふとりへうち優に字をうゝふ之

其支歌の雰めの心りの無定ありべきとなり

又云

只と云ふてふれ其更きてふれの大事ありべし　只の字ハ唯且の二字ハヨエシヨカラストニ云テ

端胸の詞也　後拾遺恋三

今ハ只思ひ絶えなんとばかりを人づてならでいふよしもがな　左京大夫道雅

と人伝てならでいふよし人にあるへと侍りとえりてこれ歌にてん心根

きゝんとかゝる只一ツに思ひつめて切なる事ほとりて心ふりさると形ひ

わかるゝ事あるべし　物の心侍をかくべし物のゝひかりあるにも

諸的の心府ありのかはらし

又 様と云てかえ 是又大事なるべし 様といふ字をの二つの字有てハいひくる
重し それよりもこれハ様まりりなんなりとの心也 又 是日とう字めりの忍事ハ此ちより
ハ字を様ぐ字よりも明ら是なとかりとなるべし 又 源の心も侍るべし 伝語にも是を
同ふえしより様ぞまでりなる言とゝろも是をあかてえしよりハ至くてつん底を
源ふえすまでりまるよしなるべし 然ハ源の心もこもるべし

又 いとゝといふてかえ ありけハいとゝあと続け 又ハ
新古今 哀傷
花これそいとゝ家語そいそれぬ侍らんとえふ人しあれれハ 後撰 ちるたるを
とゝろ続ふてゐる時ハ様の字ふかんひ侍るべし ゆるんとえふ人のあれれハ様花の木ぬて下立
なるさくなこり判きとも としまれ人もわらハ 此分の侍人といふ君えふ人の
なりし其えふ人のうせ方角の後の春花見ふまぞりて多逢るに花の木の下ニ立ありり
その時花の名残り押ふてよみるなべし されハ此春ハ家ふえふ人のゆ侍るもおかれハいつも
立うき花の陰なるふしてけ春の花の名残ハ一入ふうく判きといふんべきゆるふりて
家ふかられとえふ人のなかれハ此花の陰と立まなる名残のいとゝかしくて我家路ふ
帰らんとえふ心もなくみえさもそうれあるべし 然ぬハふのぬし年ぬそハあり侍て
いとゝといふるハ源の心侍るべし 様の心も侍るべし

第八巻

一 ぞの字

古今 恋二

△ つれなくも猶ても覚えても恋しきか心といづちやりてかゝるのわらんとし きかの心といづちやらバあんまん よみ人しらず

此ぞ文字清之是哉の略字しかと疑ふ心ふていふ

同 紙下
△ 右心といづちやりて いかならん岩ほの中に住めバかハ世のうき事のきこえこざらん 同

此ぞ休め字也 又ハ是ぞ哉 かなあり

一 ばなりけりといふ

古今 秋下
△ 吹風の色の千種に見えつるハ秋の木の葉の散ればなりけり 同

後撰 秋中
△ 宿かるぞ月の光もまさりける 世の中のうれさもすゝめバなりけり 同

是ハ是かれバかくのごとくありけりといふてかえ

金葉 秋
△ 秋萩の枝もとをゝになりゆくハ白露おもくおけバなりけり 同

此二首共とめバ此方とけバ此方こゝなりといふてかえ

後云此歌色ノ宿かるぞ月の光のまさるハと有 宿かる月の光の落るハとめハしんりけるとさゝそなるべしなり
其根分に此方の事にまるろ事ゆゑ所々にかしく

満私云 なかなかとふてふてえきて 小有なりの詞也 又ありとふてふへハ 小あるの詞也
又云 なかとふても あとふてふえき まありてもの詞也 まれハさ さわるハの詞とも
さてもさ さわりてもの詞也 右皆百花庵師説也

一 まじかば

後撰恋也 △ わびつゝ嫌ふかりしかば白露の置きて風に散り迷せましや　伊勢

後拾遺秋上 △ まちえたる二夜たになりと七夕の逢ひにあかぬ思ひましかば　奥羽通房

口雅一 △ 月影の入るを惜むもあやにくに西の山のなからましかば　宗治左衛門

右二首のましかばは祈願也

△ 君が命さえながからましかば我まして雪とも消えましやは　後白川院

此歌の君がましかば心ないよなかり君が命さえとらば雪とも消えましと云ふ意也

一 志のハ

詞花春也 △ 木ずゑにて散りしのばでありければ老木も散りし庭を掃ひでぞ見る　大武道通

此志のハ、まだわらざりし也

満私云 梢にて見し折より何かざりし老木の散れば今庭に落ちしく花をいひて折のかざりあれハ掃はでこそ見ると云ふ意也 (?) 花を惜む也

一 ませば

後拾遺恋也 △ 君が宿ませばよいて門まぜばなし心の松をいでて来べき　大武言左

新古今 △ 哀近人にふの命と志のまませば難波の芦に踏ぐまじ　継国法師

此二首のませハ門ならんにも命と志のへ人にもとらん

一 かなと思ふ所にする

新勅撰秋下　下手寺　西行にて

△ 惜なく入る日をと見てもみるにかなしきは何れの門出なりけれ　都若院兵部

此歌なとといひて又そそと一首にいひなりけりと聞ゆるの詞　秘るの傳(引歌ハありけれといふ)

初心にをいて

随私云　此事らを秘説とこゑ　かなと上の句にて切テ数下の句に西ナそとてつけ有りるとこゑしてにえ大事なり(一西ナそハと八の字を入てうへきにや　かりけりハにありけりのつゞきなれハ大そハ西の門出に有けりと聞ゆる也)

古今春上

△ 春きてば花とや見らん白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく　素性法師

鶯はなくによりて疑ひなきのなくしぞと見るべき所あれども

かよふ字さへ又あるのみと思しきなし

古今冬

△ 雪ふりて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松もみえけれ　よみ人知らず

すそといひきるこゝハウクスツ文の連続なれば通ひてとまる詞之文

とみちぬをもみぢぬとし

一 手に葉を聞て読の心なるあり　是第一の勢ハ口傳也(秘事也)

古今恋三

△ 有明のつれなく見えし(時分)別れより暁ばかりうき物はなし　忠岑

見ゆる暁より見ぬ暁と聞てとるもよつてとるあるべし

小秋上

△ 月見れば千々にものこそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど　大江千里

我身ひとつの秋のあるにと聞てとるべし　一ゝ歌の詞先達の詠なる

下の味ひなきべし　ふかく秘すべし　初心にてたやすく云まじき

おかせくべからず也

第九巻

一 仮名(カナ)と体むする
しと、ことゝ、たし、たしわらば、の類ひし
と、ふと、てと、と体むすぶべし
今はしと、誰とことゝ、又、ころく、恋らく、恋らく、
立て見、ねてこ、有りこ、ありまみ、など体むする事当
代みと用捨あるべし

一 さはといふ詞
(千載恋三) △ としさぞあひみて後はかくしても命とたのむ人ぞとの知らば 左京大夫顕輔
(金葉秋) △ いにしさぞはちりのまとも伝はらばありやなしやの情けを見む 中納言国信
(新古雑下) △ 思ひ出のそくふ似ぬしさてさばいふ(終)泊めの思ひあそ 西行法師

右のさは是を略きたるいと
(金葉秋) いふさは雪打ちけて後の声の出風神祇なる人 前大納言隆季
かみを いふされども

一 めや
(金葉春上) △ 志賀のめや浦の錦よりことふ浅きなき人とこひしとち 長宗安母
(新古今春上) △ 志賀のめや霞の空とながめつ花も匂ひぬ春をなげくと 中務
かとしのとかとし侍ける詞も

一 いつしか

（は探たよ）△ 松も花もきのふか摘ておりぬるといつしか桜さきもしなん　左大臣

満私云 此下知の かんをんあるはいつしかはめづらしくもなくもなんいかにおもふ 上にいつしかとうたひて下にかんとはおもふなし

（日暮略）△ 思ふ人ありて御迎ハいつしかの風まちわびのあきぞかなしき　よみ人しらず

（康卜踪の初ふりにけり）

其ハいつくし庵とむすびて老父々行かざりき

（金玉ノ咄）△ いつしかと照月の空のくもあはれ天の戸しらぬ星をたつらん　藤原朝仲卿

（日主）△ いつしかと春のこゝろしにさそはれのは野か原の雲ありけり　太宰大貳重家

（千載抄）△ 思ふらしいつしか妹を待て袖の露ぞこほりのまがふらん　後二条院関白

（兼之）△ よそにてもときし人はいつしかと袖の雪をはらふきりか　左京大夫顕輔

右四首皆いつのまにといふてふえ也

第十巻

一 おなじてふえを一首の中にわかちて置くる

（於書るる仲ノ件）△ 大空の松の千とせをおりぬとも人のまことは君ぞかぞへん　定家

是をかぞへぬといふべきにかぞへんといふをちがひてふえごとにやらん

後私云 此そそやと通音にあって君そとおきてかぞへんとそ〇てて書し

一 との字とばかりは四のてふえといへる花も一首にわかちよめる

△ 秋の夜は月のかつらも山の端もおなじ花もてちらなん

一 やの字もあまた有り

古今恋五
△ 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして　なりひら

是も倚句にいへり

[illegible]
△ かづらきや[illegible]の岩橋や中空にてぞ[illegible]ぬる

[illegible]のやぐひあまたあるべし　此味にかるべし

一 同じ字のあはれす

古今恋一
△ [illegible]のみも行方しらず[illegible]人にしられでせん　よみ人しらず

注私云 [illegible]

新古今秋下
△ [illegible]の袖より霜やをくらん秋風吹ば[illegible]　家隆

一 問答の詞一首の中に倚句にもなれる次

古今夏
△ 五月まつ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする　よみ人しらず

[illegible] 問答秘の説也是こそ深き心の伝へなれ　但当時[illegible]て好むまじき事也

一 何へありへと

古今冬
△ [illegible]雪の花と見ん　よみ人しらず

是も[illegible]

注私云 [illegible]

古今秋下
△ 秋風にあへずちりぬるもみぢ葉の行衛さだめぬ我ぞかなしき　[illegible]

此あへずハやがての心也　又一説に不堪也

一 あやし、あやし、あやしめ

拾遺集恋三
△おほかたは人にしらるれわがこひの命もがなとおもふころかな　藤原有親

右あやし、此ハ無礙之意の字也

日
玄々集
△あやしくもとなりみえける夜の瀬のまれなるをどうかせむ　相模

右ハ怪し

千載集
△おきて行涙のかゝる袖なれは人のあやめん　よみ人しらず

右ハあやめん也

満私云　怪之字ノ心也

増云　あやしめんにて

一 なんとかは

古今離別
△夕くれのまがきは山とみえななむ夜はこえじとやどりとるべく　僧正遍昭

後撰雑上
△なにはなる流の川原はあせなれど人の心ぞとはれぬるかな　紀友則

拾遺春
日古今
△ 散り花を今年ぬかで惜まれん今ぞ人もこえ迄
△ 花ふたゝびさかぬ(?)世の中にはかなきしもすゑしのはけなん　日　よみ人不知

右四首のらんこらは下知也

日恋一
△ 夢よりぞ恋しき人を見初めつる今はあはする人もあらなん　日
拾遺雑恋
△ いとせめて恋しき時の命かとなくよそ人もかるらん　公忠作卜

是はのなん下知也　但しらんにあてゝは願しのなんとも云

一 らの字略してある

古今春上
△ 春たてば花とや見らん白雪のかゝれる枝に鶯の鳴く　素性法師
日秋下
△ 夕月夜小倉の山に鳴く鹿の声のうちにや秋は暮るらん　貫之

見らんのらと思しき也　暮るらんのらと思しきなる也

拾遺雑秋
△ 霜がれに見えこし梅は咲にけり春には我身あはんとはすや　躬恒

日恋四
△ 難波潟おのがやゝはまでなれどおのがはまれにてもあはなん　人丸

是も下知也

古今秋下
△ 雲(?)宿こそあれとてく秋の野にまじりしもある風の音なき　藤原時昌

古は下て見られどのらと思しきなる

是もとゞめてある也

一 よりといふ事

拾遺恋二
△ 鶴ごとく思ふ心もあるきみによりかゝてぞ恋しき袖なる(?)らん　よしのぶ
後拾遺恋
△ 袖ぬらす枝とふりぬれ時を待くかども流きこす忍ふよ　小弁

右二首のよりハよつてなり

一 てへ

古今雑下 又秋道忠ニアリ

△ 今更に訪ふべき人もおもほえず八重むぐらして門させりてへ　よみ人しらず

右てへハいふてといふ詞也　へハ助字也

愚私云 てへハといふといふ事也 下知の心を打させるといへ 為仕けるとぞいへ

秋道雑賀

（注 てへもていふのつめ也）

つれなきのこりやこりはてぬらむ(?)てへば我が(?)の尾上にたてる松も子もち　よみ人しらず

なれ(?)こそこりはわかり

口伝に云 こりはてへハ子を持ちて我のみ子持ちといふが如く 我先に(?)たつ山の尾上にて生ふる松は情のあるものとぞ聞き(?)年ふればちりなどといふて 子へと持ちるを経れば我のこ子へと持つ事のあはれに生ひてしいまるの心を言ふ式

言ふ事かどうかとのあるこそ秘説也

一 てぬ

後撰春下

△ かくばかり折りて来とやはばくしてぬ花の匂ひを折りとらるべく　よみ人しらず

散てぬハてんと云に同じ やはいかばくしてんと云とも なげてもあるべきとの心 但しこの続がいざるまでに事也 能々おもふべし

一 まにまに

古今離別

△ 君がゆく越の白山しらねども雪のまにまにあとはたづねん　藤原兼輔朝臣

同

△ わかれをば山の桜にまかせてんとめんとめじは花のまにまに　幽仙法師

我雪にまかせて尋ねば尋ねんとの花のまにまに随はせんとの随はさせる事にての意也

古今雑下

△ 久方の山のはにそありてはつかひかりさへてしやしぬ名にこそありけれ　凡河内躬恒

第十一巻

一ゝおどめの事

於遠見御中

△ おふかとしかえぬ空の青ことそむかしこえて行末かな　定家

称ゝふゝな

てふ天のゝか

△ 東路の不破の関屋れとも出て今日むなしきにみえぬこはかな

△ なかむるに見えてもおしくきえゆくと紫とひ流れて過る山かな

感心し多かりけり

新古今恋一

△ わすれては打歎かるゝ夕へかな我のみしりて過る月日を　式子内親王

此歌は中のしなゝ衣とも其袂也有心之下の句の意りに有てもみえる

新古今秋上

心ある雄島の海士の袂かな月宿れとはぬれぬものから　宮内卿

麗英の事

千載春上

さゝ波や志賀の都はあれにしをむかしながらの山桜かな　よみ人しらず

中のか

後拾遺恋四
△ 秋風の吹くにつけてもとはぬかな荻の葉ならば音はしてまし　中務

千載恋四
△ 松風のうき人よりもつらきかな恋しきをりとて吹かざらめども　空人法師

右二首中のかとて上の句は詞と下の句にかゝるかゝりと云ふも同じ

たとへば

新古今冬
△ 降りつみし高嶺の深雪とけにけり清滝川の水の白波　西行

此歌詠殊見えし

一 りへ字の格

古今雑
△ 君が代を佐山の岩清水木がくれたりと思ひけるかな　壬生忠岑

後拾遺恋二
△ やすらはで寝なましものを小夜ふけてかたぶくまでの月を見しかな　赤染衛門

右木がくれたりとえぞふかと云ふ又やすらはで寝なましものと

寝なまし月を見しかなと云ふ同し

一 かかの文字

古今恋二
△ 風吹けば峰に別るゝ白雲の絶えてつれなき君が心か　忠岑

同恋五
△ そこはかと[illegible]待ちて恋ひの文も絶ぬか　よみ人不知

同春上
△ 浅みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か　僧正遍昭

同秋上
△ いとはやも鳴きぬる雁か白露の色どる木々も紅葉あへなくに　よみ人不知

新古今恋五
△ おのづからさぞしくもあるか立別れ日も忘れぬ面影の有　前大僧正慈円

一 治定のか

詞花春
△ いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな　いせ大輔

一 嘆かしのか

新古雑上
△ めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな　紫式部

一 歎息のか

拾遺恋四
△ わすらるゝ身をば思はで誓ひてし人の命のをしくもあるかな　右近

是等のかたちなどは其人の心とこゝろにまかせていひ下し
てこそあらめ。さりながら当座の題なるべし。此かは其題の心を用ひ
作るべし

詞花恋上
△風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくだけて物を思ふ比かな　源重之
是此題の心なるべし

千載恋上
△恋のよも吟やふ命のうき身ながら木ずゑにねぐらとさだめむ　崇徳院御製
是當座なるべし

拾遺恋上
△恋の雁の雲ゐ遙に鳴て行くさへ袖のぬれぬる哉　源信明
これは人のこゝろの心とこゝろにて當座までにいひくだしたるよく
工夫あるべし
すべてかなのあるべきは、おほく字の流れ、かくのごとくは萬葉といふ振もあなれば
初心の者の手に及ぶべし。故に未練の人は斟酌すべきことに

詠歌とも切ならぬ事共多けり。作りぬるものに初心のうちには
空(ウツロ)なる事を用ひられぬることも有ども、心も作り出す躰そと
書て、工夫あるべし。只一首の表ばかりにいひ下し
きよげに聞え歌の作れば詠は少しく偉く難なけれど
さりとては事え難しく、先作りなくならざることは無き事
あるまじき事の二つが心得のかなし。先躰とはてふ云のかな吹流
のかな、又家なかの神のかな、諸家のかな。是等は躰をさし
又甘心のかな、かうふりのかな、強ひのかな、嘆息のかな、是等
かな重ねく
哉とあるは是也。然とも古きにはみ中にてふたの例にもいはれ
能く工夫して古歌の例へを引出して作るべき
打雲のるとも

第十二巻

一 歌まくらの事

十三集上
△ 三島江や鳰のうき巣も乱るらし蘆の末葉にかゝる夕波　家隆

△ 山河乃岩にせかれし水の音いつちるらん夕暮の月

此二首此歌の心も又此ふの心も見べし　さゞれの此心とは　いかゞあれど
歌也有ける歌を案じて　耳馴たる有難の歌をも作るにはあらざるべし
出しかるを此遣ば多く歌といへり　是故文相ひあるべし　古之へば

詠六百番
△ 東山只雲晴の山の端に暁みて　月ぞ残る　右中将定家

これは時分の歌也

松浦月前
△ 郭公声の里のさと聞よりも卯の花の有明の月　定家

△ 秋月に子のさとをこひし松の色それとも見えず雪の峯が　よみ人不知

私云　此歌諸句雪の峯ばとあり次の歌とをこひ違へて出し侍る

新月暁
△ 谷の戸や法性寺の山の岩にかけそれともえしらぬ聞かな　従二位家隆

是は詩ばかり歌といふなりけるへば

白氏文集に　琴詩酒友皆抛我　雪月花時最憶君

此時といふ字を歌を案じありといへり　口伝と受べし

△尾上より木のめも春の雨そほふ霞の立居の関なり
是第五句て云残しより其心得と感しとも

一 寒く
古今雑下
△世中のうきたびごとに何を身を奥山の木の葉に隠るゝ雪さへとまらじ　よみ人しらず
日新後拾遺
△まちわびぬ何そはなくて荊萱の乱れてわれとわが寒くなりし　同
立こ暮とく寒くのみ心も

一 さとし
続拾遺雑上
△祇園会の祇園会の時の如く立つ道をも従大路のいきはしや世に　よみ人しらず

一 ざつとめ
日新後
出る湯のわくにかく青みにゐとはる人もなし身にならば
（それより物忘れ）

一 まれとよぶ
△君と云ば見んはれらも海辺の武士の祇園の流れとも恵みの心もあはれなりけり
流ざりける
藤原為氏

一 そへ字
続拾遺雑
△柳葉の葉とかくば色みなめくれど八十氏人もおもはむ
世の中も陰にもせりといふてたとへなり

後拾遺雑上
△ 秋風ハ浅茅が原の虫の音を尾上の鹿も聲たてつなり　源兼長朝臣

是も有りハ上へ寄せ聲をそへて用ひて宜き之

一 夢と云て見え

古今恋三
△ 恋しくは下にを思へ紫の根ずりの衣色にいづなゆめ　よみ人しらず

後撰恋三
△ 千早振神引かけてちかひてしことも由てあはなる由め　藤原滋幹

此二首共ハ八代集ニ出て扨ハここへ傳之

一 まうし躰

拾遺雑春
△ 誘ともにかおりし春のとひしらで独ちるらむ花ざかりかな　よみ人しらず

新古雑下
△ 情ありし昔のみ猶忍ばれてながらへまうき世にもふるかな　西行法師

右二首の歌ハ物寄せ只久うきなるべし

是歟　此たび学の前ハさいと学文有りしとせてこそよ
かく有りき也のきつる也の見　様様ハ
右ゆへハ　いと由あり名るし

一 ながらハ

拾遺恋二
△ 今日ぬ丈のうち残らせバ今まで流るき人ハかれなき　よみ人しらず

是をちらバや

後拾遺恋一
△ さりともと思ふ心にひかされバ今まで世にもふる我身かな　西宮前左大臣

是ハ心ひかされバ引出てあり

千載秋上
△ 秋の月高根の雲のあなたにて晴れ行空のくるゝ待けり　法性寺入道前太政大臣

是ハ今ゝを待といふことを思ふべし

恋七
△ 尋迷てハ形見なりけり玉ほさき恋ぶりの書もとゞめて　久我内大臣

続拾遺 雑上
△ 秋の野の浅茅が原の虫の音も尾上の鹿も鳴きそつかり　源雅家卿
是もあり八(?)をへ…(?)…

一 夢と云ふてよみ
古今 恋三
△ 恋しくは下にを思へ紫の根摺りの衣色に出づなゆめ　よみ人しらず
後撰 恋三
△ 手弓張り月日かけてちかひてしことも忘るなゆめゆめ　藤原隆経
此二首共ハ八代集ニ出てよみハいろいろ侍る之

一 ますら雄(?)
拾遺 雑上(?)
△ 読ともに…[illegible]…てもかは…もながら…か　よみ人しらず

[illegible]

新古 雑下
△ 情ありし昔のみ猶しのばれてながらへまうき世にもふるかな　西行法師
右二首の歌ハ助字也只ながらへうきなげくべきなし

一 ながらへハ
拾遺 恋二
△ 今ハわが身のうちにはらせ(?)ながら今までながらへき人ハわれならなくに　よみ人しらず
是らをさらばや

後拾遺 恋一
△ さりともと思ふ心にひかされて今まで世にもふる我身かな　西宮前左大臣

千載 秋上
△ 秋の月高根の雲のあなたにてはれゆく空のくるゝ待ちけり　法性寺入道前太政大臣
是ハ心ハされバ引出てあり

〻 恋七(?)
△ あふまでハ形見なりける玉章を恨みぞ人の書もとゞめて　久我内大臣
是ハ心を侍といふと思ふべし

新古今恋倭

△思ふ(君)とえし　見ハとゝせてハ(清仮名之)とゝせてんのんし

袖にまがひなで立とかれる雲の霞を　後京極

花まがひなてハ雨がかぞしてとのるゝし

第十三巻

一 ふてはといふ手尓葉の口傳

ヲ・モ・ハ・カ・ウ・ 又 モ・ウ・ク・ス・ツ・ス・ フ・ム・ユ・ル・ウ・ 是ニ而て おさふ(…之)

新古今雑中

△モ つらさハふてんれし人もむかしにてそ迷よりてこゆるいほきさ　定家

拾遺集秋

△ハ 秋の露おきまで涙に開にてむかしに出家大和云のさま　定家

新古今秋下

△ニ 招ぎよせてぞまれかみの花にてそへもに後とさて秋ぞなき　前中納言定家

△カ おのれうこんきとおのがかぢで柳の枝に雪折れはせぬ

△ヲ 山里は秋を走つ秋にかぎりにて哀のまず終にうつらなる

△ノ 入相の鐘のひゞきはおとづれて

△サ わらしまく花のやのさゝみにて

△ツ 霞立つ春の山の櫻の花宮にて

一　志てどめの事

扱道品第中
是もふてあと白し紅葉わかへし

△ 今よりは紅葉し身と成とみでゝ秋ぬれぬ山の紅ぞ　定家

日 △ 年月は世のふぞれの紅葉ちりしはなまであかる　日

日 △ 竹の葉の露さよかける都の山を月かそくして　日

一　八雲ぞめの事

扱道箱上　五音第三の音　ウクスツヌフムユルウ

△ル 空は海に雲の波や月の舟星の林に漕ぎ隠るみゆ　人丸

流俗従四位 △ル 箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄るみゆ　鎌倉右府

フ 撫でみゆ　ツ 波の川みゆ　ユ おしみゆ　ツ 立隠くみゆ

此外にしかども おさへ留まる　口伝之秘なるべし

一 のどめ乃事

秘中の秘にして読事希にて少也、定家卿も一代に一首

あり

古今五秋上 △吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の　雲林院の親子

源氏薄雲巻 △取まさていとゞ深くも見ゆるかなおやあもとまかれきし袖の

拾愚道 △昔おもふ空にさえきゆく人行帰もしらぬ有明の光の　定家

一 得ゝどめ対る事ハ

秘中の秘にて二ツのかはり有なかば、などあつて也

かはらばハそうわりながらかはりしながらといふ心にし

得ぬ得ハ指有ばしゝしゝしと

などと盃事と種々色に備るをしべて一通のるすり

いふを大きに誤るべきものなくしてもおきさし

猶口傳をお紙にくはしく傳るあり

一校 了十

地之巻墨附四十一枚天地合六十九枚

右百花菴老師傳書也道統之遷宗春秋庵滿光老師
之依恵滿書寫切手努々不致他見従漏者也於道極秘
是也

宝暦十二年壬午初夏

門人　蒿亭芸渠